Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-01-06

中国語における「空間動詞」の文法化研究 : 日本語と英語との関連で

盧, 涛

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
1996-03-31
(Date of Publication)
2008-07-11
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲1472
(JaLCDOI)
https://doi.org/10.11501/3116820
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1001472

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

平成七年九月二十九日

中国語における「空間動詞」の文法化研究
-日本語と英語との関連で-

A Study of Grammaticalization of Spatial Verbs in Mandarin Chinese
-In relation to Japanese and English-

神戸大学大学院文化学研究科(博士課程)

盧　　濤

目　　次

はしがき：研究の目標と構成……1
第1章 機能主義のアプローチ……3
1 HOWの問題とWHYの問題……3
2 形式主義と機能主義……5
3 意味関係と文法標識……10
注……13
第2章 文法化理論について……15
1 文法化とは……15
2 文法化研究の対象……17
2・1 範疇化……19
2・2 形態化……21
3 文法化の先行研究……22
3・1 古典期：フンボルト、サピアとメイエ……23
3・2 反形式主義の隆盛……24
4 文法化研究の関連分野……28
4・1 意味論と認知文法……28
4・2 語用論と機能文法……32
4・3 類型論と普遍文法……34
5 文法化理論の言語学的位置付け……37
注……38
第3章 中国語の文法化……40
1 類型論から見た中国語……40
1・1 孤立言語……41

1·2 VOとOVの混在型言語……42
1·3 主題卓越言語……43
1·4 類像性言語……44
1·5「文法化言語」……46
2 中国語の文法化……46
2·1 動詞の範疇化……47
2·2 動詞の形態化……49
3 文法化と関連する先行研究……52
3·1 中国語史研究:王力と太田の場合……52
3·2 Li & Thompsonの研究……54
4 場所主義と「空間動詞」の文法化……56
4·1 場所主義の考え方……56
4·2「空間動詞」の文法化……59
注……60
第4章 存在動詞の文法化……63
0 はじめに……63
1 動詞述語から文法標識へ……63
1·1 動詞の構造……64
1·2 動詞述語から文法標識へ……64
2「在」の所格標識……65
2·1 他動詞述語文……65
2·2 自動詞述語文……68
3 共起制約から見た後置の「在」の接辞化……71
3·1 モダリティとアスペクト……71
3·2 補語と複合動詞……72
3·3 関係節……73
4「在V」と「V在」の語用機能……74

4・1「在V」の背景化機能……74
4・2「V在」の前景化機能……76
5 日英語との関連で……78
5・1「で」と「に」の役割分担……78
5・2 英語の倒置法……80
6 おわりに……82
注……84
5章 方向動詞の文法化……86
0 はじめに……86
1 動詞の分析……86
2 向格標識への文法化……88
3 方向指示の機能拡大……91
3・1 交流行為の対象……91
3・2 与格と源泉格の標識機能……94
3・3 目標指示……95
4 方向動詞の接辞化……98
5「にむかって」と「にむけて」の標識機能……101
5・1「向かう」と「向ける」の分析……101
5・2「にむかって」と「にむけて」……104
6 おわりに……107
注……109
第6章 直示的移動動詞の文法化……111
0 はじめに……111
1 文末の「去」のモダリティ機能……112
1・1 意志表明……112
1・2 反語……113
1・3 命令……114

1·4 揶揄……116
2「去」の構造……117
3「去」の文末シフト……118
4 文中の「去」と「来」……122
4·1 文中の「去」……124
4·2 文中の「来」……125
5「いく」と「くる」……128
6 おわりに……129
注……131
第7章 GIVE動詞の文法化……131
0 はじめに……131
1 動詞の「給」……132
2「給」の接辞化……135
3 述語動詞から前置詞へ……138
4「給」の前方移動……142
4·1 前方移動の動機付け……142
4·2 受益者のいろいろ……144
4·3 他動詞述語文から自動詞述語文へ……146
5「給」のまとめ……147
6 日英語との関連で……149
注……152
第8章 通過動詞の文法化……153
0 はじめに……153
1 動詞の分析……154
2「通過」の文法化……156
3「経過」の文法化……159
4「通過」と「経過」の統語範疇……162

5「を通して」と「を通じて」の標識機能……163
6 おわりに……166
注……168
第9章 文法化の再認識:結論と課題……169
1 空間動詞の文法化体系から見た「5つの原則」……169
2 一方向性仮説の修正案……171
3 動機付けの再検討……174
4 今後の課題……176
注……178
付録……180
1 存在動詞の文法化……180
2 方向動詞の文法化……181
3 直示的移動動詞の文法化……182
4 GIVE動詞の文法化……183
5「通過」と「経過」の標識機能の比較……184
謝 辞……185
参考文献……186
Ⅰ中国語文献……186
Ⅱ日本語文献……187
Ⅲ英語文献……189
資料文献……196

中国語における「空間動詞」の文法化研究
－日本語と英語との関連で－

はしがき

--研究の目標と構成--

Everybody laughed at my going to Europe for Chinese grammar. But when it was possible to exchange ideas with European students of modern Chinese, ..., I found that going to Europe for Chinese grammar was, to change the figure a little, not entirely a matter of 東轅西轍. [Chao,Y.R., 1968: vii]

題目に示すごとく、本研究は日本語や英語と関連付けながら、中国語の文法化(grammaticalization)を分析するものである。文法化とは、狭義には語彙項目が文法形式に変化するプロセスを指しており、語彙項目とは、基本的な統語範疇の名詞と動詞のことを指している。本稿では動詞の文法化を考察の対象とする。

動詞の文法化は普遍的な言語プロセスであり、様々な動詞が文法構造の様々な側面において文法化する。本稿で取り扱うのは、「空間動詞」の一部である。空間動詞(第3章4節で詳述)は不適切な分類かも知れない。運動形式が空間をベースとするという論理的解釈から、すべての動詞が多かれ少なかれ空間的性格を備えるものとも言えるからである。伝統的に他動性関係を、AからBへの行為の移行又は影響であると解釈するのも、動詞と空間との関連に基づいた認識であろう。ここでいう空間動詞とは、意味的にも統語的にも、広義の場所又は方向とより緊密に関連している動詞のことである。第4章から第8章まで議論する存在動詞、方向動詞、直示的移動動詞、GIVE動詞、通過動詞がその一部である。これらの動詞は、一方では動詞述語として機能し、一方では連動文(serial verb construction)という文脈において、それなりの意味関係の標識機能を果して、統語範疇の移行が行われている。従って、このプロセスの分析において、統語範疇と文法標識の問題を考えることになる。本研究はこの2つの基本的な文法研究の問題を念頭に、中国語の文法構造はどのようなものであるのか、そしてなぜそうなっているのかを、文法化の枠組で解釈することを目標とする。

本研究の構成は以下の通りである。

第1章と第2章は本研究の理論的背景の説明である。第1章では、言語研究をHOWの問題とWHYの問題の解決とみなし、形式主義と対立する機能主義の問題解決の有効性を検討する。具体的には、文法標識と統語範疇の問題を提起し、中国語において、これらの問題の分析と文法化研究の同一性を示す。第2章では、文法化の概念を解釈し、文法化研究の対象と本研究に直接にかかわる先行研究及び文法化研究が関連を有する理論分野を検討し、機能

主義をモットーとする文法化理論のより統合的な性格を立証する。

第3章は本研究の基礎となる中国語の文法化を動詞の状況を中心に考察する。まず、中国語の類型的特徴及び「文法化言語」としての特質を分析し、文法化と言語類型の特性との相関関係を考える。そのうえで、動詞の文法化を範疇化と形態化の両方からまとめる。そして、文法化と関連すると思われる先行研究を要約し、その問題点の指摘を試みる。最後に、場所主義の考え方を検証し、それに基づいた中国語における空間動詞の文法化の体系を示すことにする。

第4章から第8章までは、文法化のケース・スタディとして、中国語の空間動詞の文法化を詳しく分析する。第4章では存在動詞の「在」、第5章では方向動詞の「向」、「朝」、「往」、第6章では直示的移動動詞の「去」及び「来」、第7章ではGIVE動詞の「給」、第8章では通過動詞の「通過」と「経過」の文法化を考察する。最後の第9章では、空間動詞の文法化をまとめ、文法化理論の中心となる方向性と動機付けの問題を再検討し、今後の課題を提起する。

第1章　機能主義のアプローチ

A method is a way to make sense of the facts; that is, it is a way to relate data to explanatory concepts.　[Croft,1991: 5]

1. HOWの問題とWHYの問題

カメラを使ったり車を運転したりする時、我々はそれをどのように操作するのか、つまりその機能は知っていても、なぜそうしなければならないのか、即ち機能する仕組みの在り方には関心を示すことはない。使用者が必ずしも使用するものを理解できないということである。言葉に関しても同じことが言える。

母国語の使用者はたいてい無意識に母国語のルールを守ってそれを使う。そのルールを体系的にまとめることも出来なければ、なぜルールがそうなっているかの説明も出来ない。生成文法では言語能力(competence)という言い方でそのルールに関する知識のことを指すようだが、そこでいう知識は一種の直感（intuition）に過ぎない。[1] ある言葉を外国語又は第2言語として習う時、学習者はその言葉のルールを1つずつ覚えていくなかで、直感的にそのルールを記述し、体系にまとめようとするのである。

言語研究においては、母国語にしろ外国語にしろ、それがどのようになっているのか、即ちHOWの問題の解決と、なぜそうなっているのか、即ちWHYの問題の解決を同時に進めなければならない。なぜなら、HOWの事実からWHYの答えが得られ、WHYの説明からHOWの事実が捕えられるからである。残念ながら、20世紀に入って成立した、ソシュールを創始者とする構造主義の言語学が主流を占める時代にあっては、研究者たちは言語構造を恣意的(arbitrary)な存在と見なして、HOWの問題に取り組んできはしたが、WHYの問題にふれる余裕はなかった。今や古典となっているLyonsの言語学概説書(1968)の第1頁に書かれた「科学的な言語研究」に対する定義がその表れである。

(1) ... it will be enough to say that by the scientific study of languege is meant its investigation by means of controlled and empirically verifiable observations and with reference to some general theory of language structure.

b.言語の普遍性と個別性を理解すること;
c.言語の進化と変化を理解すること;
d.テキストの性質を理解すること;
e.使用者と機能から、言語の多様性を理解すること;
f.文芸作品及び言語芸術の本質を理解すること;
g.言語と文化、言語と環境の関係を理解すること;
h.言語の役割の諸側面を理解すること;
i.言語の学習の手助けとなること、例えばもろもろの言語の参考書を書くこと;
j.翻訳と通訳の訓練を手伝うこと;
k.言語と脳の関係を理解すること;
l.言語障害の診断と治療を手伝うこと;
m.コンピュータソフトの設計や機械の言語の表出と理解のシステムの開発など。

Hallidayは機能文法の言語学者として、これだけの言語研究の応用価値を示しているが、機能主義の方法論者だからこそ、多岐に亘る応用価値に目を向ける姿勢を強く打ち出すことができたのであろう。換言すれば、機能主義こそが、言語研究の広い範囲にわたる応用目的の達成を可能にすると同時に、HOWとWHYの理論的な問題を解決できる有力な手だてになりうると言えよう。次の節で形式主義に対する機能主義の有効性について考える。

2. 形式主義と機能主義

ドイツの哲学者ニーチェはかつて、there are no facts only interpretationsと述べた。いろいろと解釈できるが、科学研究の立場からすると、解釈の仕方によって事実の在り方が変わってくると理解することができるであろう。言語研究において、どう解釈するかによって、つまり、方法論の選択によって、何が意義のある言語事実になるかが変わってしまうということは、この主観主義の傾向が強い考え方を部分的に裏付けている。

先に述べたように、言語研究は言語構造の事実を発掘し、その事実に存在する動機付けを説明する作業である。方法が異なれば発見される事実も異なるし、事実の動機付けの説明の仕方も異なってくる。言語研究における形式主義のアプローチと機能主義のアプローチは、この事実の発掘において動機付けの解釈の仕方でもするどく対立している。[3)]

文字どおり、形式主義は形式を重視するアプローチであり、機能主義は機能を重視するアプローチである。両者はおおざっぱに言うと、形式主義は、言語構造を自律的な形式体系即ち言語知識又は言語能力と考え、言語構造と言語使用(performence)又はソシュールがいうlangueとparoleをきれいに分割できる言語の局面として取り扱い、言語使用は言

語構造の成り立ちに関与しないとするのに対して、機能主義は、言語構造を連続性をもつものとし、言語構造の成り立ちを言語使用、即ち意味機能と語用機能に動機付けを求めるべきものと主張している。以下で統語構造に関する二、三の問題を考えながら、2つのアプローチの相違を検討してみることにする。

まず、統語範疇(syntactic categories)について、2つのアプローチの対立する考え方をみよう。

生成文法を中心とする形式主義では、統語範疇を明確に区分できる(clear-cut)ものとして、伝統文法がより処にした意味論(観念論)的考察を排斥し、専ら形式上の特徴を語彙分類の手掛かりとする。次の例に示すように、音韻、形態、統語機能(分布)がその統語範疇の基準になっている。

(4) a.We need to inCREASE productivity
b.We need an INcrease in productivity
(5) a.show-shows-showed-shown-showing
b.must-*musts-*musted-*musten-*musting
c.at-*ats-*atted-*atten-*atting
(6) a.Is Linguistics a spectator sport?
b.Some people consider Linguistics kinky
c.Has anyone ever been known to die from Linguistics?
d.Do you hate Linguistics more than monetarism?
(Radford,1988: 56-64)

(4)は動詞と名詞が強勢の置かれ方で音韻的対立を示す例であり、(5)は動詞と助動詞及び前置詞が屈折という形態的特徴において見せる対立の例であり、(6)は動詞とは異なる名詞の統語機能(位置分布)の特徴を示す例である。しかし、(4)から(6)までの例は、中国語のような形態統語論的特徴に欠ける言語の統語構造の分析に応用することはできない(後述)。形式上の特徴による統語範疇の区分は普遍性を持たないアプローチと言わざるを得ない。しかも、(4)-(6)はあくまでもその規則の記述にすぎず、なぜそうなっているかの答えは出していない。

これに対して、機能主義では、統語範疇を連続体として、範疇と範疇の区別を原型論的に捉え、概念化(conceptualization)のプロセス自体と同様、漸次変化を呈するものとして取り扱い、言語使用の状況と機能から把握しようとする。Hopper & Thompson(1984)が打ち出した発話(語用)機能による統語範疇の区別モデルがその代表である。[4] このモデルでは、形態統語論的特徴はあくまでも発話機能の表れであり、発話機能が統語単位の範

構造外部の諸要素の関与に求めている。第二章で見る文法化理論はこの機能主義を出発点とする言語研究の枠組である。いうまでもないが、本研究も機能主義を立脚点とするのである。Givón(1979:90)が言語の形式的な取り扱いの利害について述べたコメントが我々の言おうとすることを代弁しており、それを引用してこの節を締めくくる

(19) 1.Its formal aspects are largely a heuristic for the linguist.
2.Those formal aspects cannot constitute by themselves an explanation but must rather be explained.
3.The explanation must refer to what we know about the use of syntactic structures in communication.

3. 意味関係と文法標識

形式主義のアプローチと機能主義のアプローチには共通点がないわけではない。両者は共に言語構造を研究対象としており、文法論のレベルにおいては、ともに文法的意味と文法標識を分析することで基本的に一致している。ただ上で見たように、形式から出発するのか、機能から出発するのかによって、両者は異なる側面から言語事実を記述し、説明するのである。

文法的意味は、数、性、格、テンス、アスペクト、モダリティなどの文法範疇と、主語、述語、目的語などの文法機能といった抽象的な意味関係のことである。[8] 狭い意味でいう意味関係(semantic relations)とは命題的な格関係を指す。即ち、動詞述語を中心に統語構造を考える場合、報告されるイベントの参与者(participant)の役割関係のことを言い、意味役割(semantic roles)とも呼ばれるものである。

機能文法も生成文法も意味関係をとりあつかっている。生成文法のいわゆる「主題関係」(thematic relations)というのは、意味関係即ち格関係の同義語である。Cowperが提示した主題関係を見よう。

(20) a.Agent: Judith hit Emily.
b.Goal: Betsy went from Montereal to Toronto.
c.Source: Betsy went from Montereal to Toronto.
d.Location: Annie stayed in Toronto.
e.Experience: Alan likes cookies.
f.Recipient: We gave George a present.
g.Instrument: We cut the meat with a knife.
h.Benefative: I bought these flowers for Sue.

i.Theme: The children gave a book to Sue.

j.Patient: The dog bit the child.

k.Percept: Suzie saw the monster. (Cowper,Z.,1992: 54-56)

Hallidayの機能文法(1985)ではこの「主題関係」を観念機能(ideational function)の実現に参与する参与者(participants)と環境状況(circumstances)に分け、格関係とは言わないものの、実質的には同じ意味関係のことをいうのである。例えばbirds are flying in the skyという文では、birdsはactorという参与者であり、in the skyはlocationという環境状況とし(p.102)、それぞれ(20)aのagentと(20)dのlocationと対応している。[9]

Palmer(1994)は(20)の「主題関係」を更に抽象化し、意味関係の文法化としての文法役割(grammatical roles)と呼び、[10]類型論の立場から普遍的な意味関係として、動作主(Agent)、受動者(Patient)、受益者(Beneficiary)、道具(Instrumental)、場所(Location)の5つにまとめている。例えば、(20)のagentとexperienceとperceptを一括して抽象的な(文法レベルの)Agentと見なして良いとする。

この意味関係(文法役割)はさらに、統語上の実現関係からいう文法関係(grammatical relation)との対応関係をもっている。つまり統語単位とは文を構成する際の統語的な働き即ち機能のことであり、文法機能(grammatical function)とも呼ばれるものである。主語(subject)や目的語(object)などがそれである。統語分析は具体的にまずこういう文法関係と意味関係、即ち形式的意味と命題的意味の対応関係を考えなければならない。[11]

(21)aのように、文法関係でいう主語と目的語は、それぞれ意味関係でいう動作主と受動者と対応するように一般的に思われる。ところが、(21)bとcの通り、主語は動作主に限らないのと同様に、動作主も必ずしも主語として働くわけではなく、意味関係と文法関係は1対1の対応関係にあるものではない。中国語と日本語の例が示すように、それは言語ごとに異なっており、相対的な普遍性を見せている。

(21) a.John hit Mary.

b.Mary was hit by John.

c.The key opens the door.

(22) a.張三 打 李四

b.李四 被 張三 打了

c.??鈅匙 開 門

c'用鈅匙 開 門

(23) a.太郎が花子を殴る

b.花子が太郎に殴られた

c.*この鍵がドアを開ける

c'鍵でドアを開ける

意味関係にしても文法関係にしても、それがどのようにマークされるのかを考察しなければならない。格標識(case marking)とは意味関係の文法標識のことである。英語では、(24)のように、動作主と受動者は語順(Word order)、形態(Morphology)と一致(Agreement)で示される。

(24) a.The boy hit the man)(The man hit the boy
b.I hit him)(He hit me
c.The boy hits the man)(The boys hit the man
(Palmer,1994: 7)

Palmerが指摘するように、類型論の観点から見ると、前置詞は文法標識の周辺的なものかも知れない(p.8)。しかし、(23)の例の通り、日本語において、典型的に「が」で動作主又は主語を示し、「を」で受動者又は目的語を示すことなどからしても、後置詞と前置詞で構成される側置詞(adposition)も文法標識の主な要素として観察すべきである。特に中国語のような形態的標識に欠けた言語において、語順に加えて、機能語の1つである「介詞」(前置詞)を文法標識の中心的な問題として取り扱わなければならない。[12)]

本研究は中国語における動詞の文法化を取り扱うものである。その文法化は主に意味関係(又は文法関係)の標識として、動詞から前置詞などへの統語範疇のシフト(機能語化)が起こっているところに現れる(第3章4節を参照)。従って、この文法化研究は意味関係の標識の分析にほかならない。文法化の角度から分析を加えるのは、あくまでも意味関係の文法標識の動機付けを求めることが狙いであり、これは1節で提起したHOWの問題とWHYの問題の解決に通じるものである。

そもそも無標言語又は「語順の言語」である中国語において、文法化を経たこの意味関係の標識は自律性に欠けたものでしかない。これは3つのことを意味しており、我々の研究もこれによって方向づけられるのである。

1つはこの標識は総ての意味関係を示すことは出来ない。例えば、「把」のような受動者を導入する標識はあるが、[13)]能動文の動作主を導入するように文法化される要素はない。これらの標識は主に場所、受益者、道具など主要関係(core relation)以外の標識として機能するのである。そこで、本研究においては、いわゆる動作主と受動者で構成される「直格」ではなく、「斜格」(oblique)の標識の分析が主な内容になるのである。

もう1つは、入力が動詞であって、動詞述語の機能と関係標識の機能が共存しており、標識語の意味解釈は文脈依存の性格が顕著であり、文脈指向の分析が必要である。従って、

Hopper & Thompsonが議論した名詞と動詞という主要統語範疇(major category)の問題でなくても、動詞と「介詞」(前置詞)という副次的統語範疇(minor category)の区別問題に対して、文脈などの語用的条件に着眼し、分析することもこの文法化研究の重要な課題の1つになってくる。

更に、この文法化は連動文(serial verb construction)という文脈構造の条件のもとで実現されるもので、標識語として機能していても、語順変動によって示される意味関係が変わってしまうのである。[14] 従って、語順と文法化の相関関係及び「語順の言語」の特徴を考察することが是非とも必要であり、本研究はその点からしても類型論との関連付けで進めることになる(第3章1節を参照)。

以上の3つによって、当然な帰結として、本研究は歴史的な研究でも形式的な研究でもなく、共時的で言語使用(機能)指向の分析になるのである。言語研究への我々の理解(1節と2節)と機能主義をモットーとする文法化理論への理解及び中国語の言語事実が我々の研究をこういう方向に導くことになる。第2章において、我々の理解した文法化理論を検討し、本研究の理論的な枠組を提示し、第3章において、中国語の事実を文法化の側面から見ることにする。

注:

1) Radford(1989:4)が、competenceとintuitionについて次のように述べている。" The native speaker's grammatical competence is reflected in two types of intuition which speakers have about their native language(s) - (I)intuitions about sentence well-formedness, and (II)intuitions about sentence structure. ..., by saying that a native speaker has intuition about well-formedness and structure of sentences, all we are saying is that he has the ability to make judgments about whether a given sentence is well-formed or not, and about whether it has a particular structure or not."

2) 生成文法では、言語能力を生得の生物的能力と見なすが、それについての知識を言語事実からどれほど説明出来るかという問題と、それが直接言語研究の対象になるのかどうかという問題があると思われる。

3) 形式主義と機能主義については、主にGivón(1979)とCroft(1991;1995)を参照した。両者は絶対的に対立するものではなくて、3節で示すようにその研究対象はいずれも構造であり、特に意味構造に関しては両者は基本的に同じような見方をしている。

4) そこでは語彙範疇(lexical categories)と呼んでいる。本研究で伝統的なparts of speechなどの用語を用いず、統語範疇の用語を使うのは、統語機能からの配慮でもあるが、最も重要な点は、これを統語構造の単位であると考えるからである。

5) 「声調」以外に、zhòng(重い)とchóng(重ねる)など「畳韻」という子音の屈折(第3章3・1節を参照)によって形容詞と動詞が区別される例もあるが、一律には一般化できない。

6) 西光教授の教示によると、「与える」のかわりに、(18)aは「まわした」、bは「もらった」、cは「まわされた」というように、これはblocking(阻止)ということからも解釈できるという。

7) もち論これでもって、理論的な一般化を否定することにはならない。幾つかのところで見るように機能主義も一般化を求めはするが、何をベースにし、どんな一般化をするかが問題である。

8) Lyons(1968:435)がFriesのstructural meaningという概念をgrammatical meaningと言い換え、文法語、文法機能、伝達機能を果す文(の分類)といった3つの局面に分けて議論しているが、文法範疇に収められている格などを抽象的な意味と見て差し支えなかろう。また文法語(grammatical items)の一部は後述するように、意味よりも、意味関係の標識としたほうが適当であろう。

9) ただしHallidayはthe lion caught the touristのなかのtouristを(20)jのpatientと呼ばず、goalと呼んでいる。そのgoalは(20)bのgoalと違うのは明らかである。

10) Palmer(1986)が文法化を伝達する内容の言語化とするようだが、本研究でいう狭い意味での文法化ではない。

11) 文法関係(機能)も広い意味での意味関係としていたが、それを形式的意味と呼ぶのは、それが命題的意味関係の形式上の現れになるからである。ただこの形式的意味はまた形態的・統語的にマークされるので、その標識からいうと、形式の内容になるのである。言い換えると、文法機能というのは、純粋な内容の意味関係と純粋な形式の標識の中間に介在するものと理解できる。

12) Halliday(1985:102)も環境状況が典型的に前置詞によって実現(標識)されるという英語の事実から、前置詞の標識機能を重要視してはいないが、そこには参与者と環境状況の区別をどこまで付けることが出来るかの問題が残る。

13) 「把」は語用機能を果すものでもあり、統語的に制約を受けており、単純な受動者の標識と見なすことはできない(第2章4・3節を参照)。これも標識の自律性の欠如と言えよう。

14) serial verb construction(又はserial verbs)については、Sebba(1987)やLord(1993)などを参照されたい。ただここでいう連動文は、Li & Thompson(1981)などの記述文法で述べられる、pivotal construction(「兼語文」)なども含まれるものと異なることを断っておきたい。

第2章　文法化理論について

A repeated lament of those who would understand human nature is that every thing is related to everything else. [Miller & Johnson-laird, 1976: 1]

第1章で述べたように、言語研究は根本的に言語構造についてのHOWの問題とWHYの問題の解決を目指すものである。機能主義のアプローチが言語構造を構成する内部の諸側面だけでなく、言語構造の成り立ちに関与する言語使用の主体性などの外部の要素を取り扱い、言語構造がどうなっているか、そしてなぜそうなっているかの問題に取り組んでいるわけである。文法化理論は機能主義のアプローチの1つである。

第2章は、本研究の理論的枠組となる文法化理論を概観するものである。第1節では、文法化とは何かの問題を英語と日本語の事例から考える。第2節では、文法構造の具体的な事象を交えて、何が文法化研究の対象になるかを分析する。第3節では本研究と直接かかわっている先行研究をまとめ、今世紀初頭までの「古典期」と70年代からの「反形式主義の隆盛」の2つに分けて論じる。第4節では、文法化の本質と動機付けの説明に利用される意味論と認知文法、語用論と機能文法、類型論と普遍文法といった関連分野を取り上げ、文法化理論の方法論を考えてみる。最後に、文法化理論をまとめ、その言語学的位置付けをしてみることにする。

1. 文法化とは何か

英語を習う際、次の例の中に出て来るbasisとterm、goとhaveについて、深く考えることは普通ないだろう。

(1) a.He's asked for the special retirement package on the <u>basis</u> he's been with the firm over twenty years.

b.They're a general nuisance in <u>terms</u> of they harrass people trying to enjoy the park.　　(Hopper & Traugott, 1993: 177-78)

(2) a.Henry is going to town.

b.I am going to eat.

c.I am going to do my very best to make you happy.

d.The rain is going to come. (Heine et al., 1991a: 70)

(3) a.have a book

b.have a book to read

c.have to read a book

d.have had a book

e.We've built a new garage (Hopper & Traugott, 1993: 108-09)

文法化とは、おおざっぱに言うと、上のbasisとtermのような名詞と、goとhaveのような動詞(実語)などが、ある文脈において、抽象的な意味関係を示す標識として機能する、という文法構造のプロセスを指している。文法化理論はこの文法化現象を記述し説明しようとする言語研究のアプローチである。

「文法化」、"grammaticalization"、"grammaticization"、"grammatization"は、"reanalysis"とも"syntacticization"とも呼ばれたりすることからも分かるように、必ずしもその実体についての認識は一致したものではない。[1]一番包括的で明瞭に定義していると思われるのを引用してみよう。

(4) We define grammaticalization as the process whereby lexical items and constructions come in certain linguistic contexts to serve grammatical functions, and once grammaticalized, continue to develop new grammatical functions. (Hopper & Traugott, 1993: xv)

(4)の定義をめぐって、次の4点を付け加えることができるだろう。

1.自然言語の文法構造は静止したものでなく、変化しつつ構造化していくプロセスである。文法化はそのプロセスの1つである。このプロセスは歴史的に見た場合の変化のことを意味することもあるが、共時的にある文脈において、観察され、分析しうる言語現象である場合もある。

2.文脈がなければ文法化もない。文脈は表出される伝達と交流の命題的意味内容で構成されると同時に、話し手の事態の捕え方及び話し手と聞き手で構成される対人機能と対人関係なども関与しているものである。従って、文法化ないし文法構造は言語使用に動機付けを求めるべきである。

3.文法化の出発点としての語彙項目あるいはある構成はある文脈に現れ、その意味構造と統語構造の特質に従って、文或は文以上の表現単位の中で標識の機能を果す。すべての語彙項目又は構成が文法化するわけではないが、文法化される元(source)と目標(target)、又は入力(input)と出力(output)はある種の相関関係をもっており、意味変化の結果として、意味的には多義性(polysemy)の性格をもつものである。

4.文法化の結果として、標識語の機能は度合のある連続変化するものになっており、文法化は意味的に具体から抽象へ、文法的に開放類から閉じた類への範疇化又は形態化という方向性をもつものと一般的に考えられる。[2] 文法化ははてしなく終わりのないプロセスである。

文法化は(1)-(3)のような英語例に限らず、世界の諸言語に見られる普遍性のある現象である。第3章で考察する中国語の文法化も豊富な事例を見せているが、ここで我々の馴染みのある日本語の例を2つあげておく。

(5) a.遠いところから来た
　b.今のところは心配がない
　c.もうすぐ式が始まるところだ
　d.きれいどころ　　(松村明編『大辞林』三省堂)
(6) a.幸兵衛は課長の机に向かう
　b.幸兵衛は課長の机にむかって走っていった
　c.我国にむかって無礼な言葉をはく
　d.専制王朝体勢へ向かって動いていた　(盧 1995b)

(5)は、(a)の名詞の「ところ」が(b)の時間表現という抽象化を経て、(c)のアスペクト的な表現になり、最後に形容動詞を名詞化する接辞になっている、という名詞の文法化現象である。(6)は動詞の「向かう」が連動文(serial verb construction)の文脈に現れ、「に」と複合格助詞を構成する文法化の事例である。後接する動詞述語の意味により、「に/へむかって」は方向から相手(対象)へそして目標の標識機能を果し、意味的には具体から抽象への段階をたどっている(第5章5・2節を参照)。

文法化が普遍性のある言語現象である以上、文法化理論も普遍的な方法論を提供するべきである。以下では、文法化研究の対象、先行研究の歴史及び文法化理論の関連する分野とその方法論を我々の理解に従ってまとめ、文法化研究と文法研究との関係、そして文法化理論が言語理論の位置付けの問題を考える。

2. 文法化研究の対象

例(1)-(3)と(5)-(6)に示したのは文法化現象のごく一部であり、文法化研究はそれよりも広範な文法構造のプロセスを対象としている。「出現文法」(emergent grammar) (Hopper,1987)が主張する、文法がなく、文法化しかないという極論から言うと、文法研究の対象が即ち文法化研究の対象であると言っても過言ではない。

側置詞化と助動詞化以外に、名詞から指示詞(代名詞)又は類別詞への範疇化も研究の対象になる。指示詞は統語的に名詞的な性格が強い。これは名詞と指示詞の連続性を示すと同時に、指示詞が名詞からの範疇化であることを物語っている。名詞から人称代名詞へのプロセスとしては、日本語の「僕」と「君」が、そしてフランス語のon,personneが典型的な例である(Heine et al.,1991a:35)。そういう固定化したもののほかに、現在なお文法化しつつあるものもある。空間的な位置関係を表すものは、例えば、「こちら」と「そちら」などのように、具体的な文脈において人称代名詞の役割を果しており、指示詞の範疇化へ向かっているのである。

類別詞の文法化になると、日本語でいう助数詞、例えば、「冊」、「杯」などが典型的な例として挙げられる。これらはほとんど名詞からきたものであり、名詞から類別詞への文法化への研究対象になる。そして、日本語の類別詞の範疇化と中国語の類別詞のプロセスとは類似しており、文法化研究における言語接触の問題もその射程に入る。日本語の「一頭の馬」と中国語の「一匹馬」が示すように、類別詞のプロセスが異なってくる事例も観察され、文法化の対照研究の課題になる。日本語にも中国語にも、動詞から類別詞(特に「動量詞」)へのプロセスが観察されはするが、類別詞の文法化の典型とは言えない。

以上単文レベルの範疇化の主な研究対象を見たが、より複雑な文法構造、例えば、複文(complex sentence)のレベルにおける範疇化の研究対象もとりあげた。機能語は複文においてそれなりの標識機能を果し、より複雑な範疇化のプロセスを構成する。文法化のより文法的(more grammatical)プロセスというのは、一部はこういう複文レベルの範疇化のことを指すのである。

すべての複文は機能語でもってその関係をマークするわけではない。中国語のような標識が多く語順に担われる無標言語では、複文の標識は義務的なものではなく、その文法化も顕著なものではない(第3章2・2節を参照)。英語のような形式化が比較的進んでいる言語においも、次の例のように、形では並列構文(parataxis)(又は並列節(coordinate))でありながらも、意味的に従属節(subodinate)の1つである、条件副詞節(conditional adverbial)の関係を表す、という無標の例が観察される。

(10) You keep smoking those cigarettes, you're gonna start coughing again.
(Hopper & Traugott, 1993:173)

(10)はインフォーマルなものであり、文と文の意味関係を明示するには、複文レベルの範疇化が起こってくるのである。並列接続詞(coodinator)、補文標識(complementizer)、関係節標識(relativizer)などが複文レベルの研究対象になるが、様々なsourceの範疇化

が現れて来る。日本語においては、「ところ」のような空間を表す名詞もあれば、「なら」(条件)へシフトする「だ」のような繋辞(copula)もある。一方、英語の方においては、thatのような指示詞もあれば、名詞から時間(temporal)副詞節へ、そして譲歩節(concessive clause)へのwhileのようなものもあれば、更にtoのような前置詞から不定詞(infinitive)へのものもあれば、in terms of のような複合したもの(冒頭の例(1))もある(Hopper & Traugott,1993:ch.10)。このほかに、アフリカ諸言語では、saying動詞が補文標識になる事例も報告されている(Heine et al.,1991a)。中国語では、名詞、動詞、副詞及びその複合したものが複文の標識になるものが多く、類型的特徴を表す例になっている(第3章2・1節を参照)。

2・2 形態化

(7)に示した、文法化された形式であるbの派生形式とcの接語及びdの屈折を一括して、形態化と見なしてよい。そして、形態化は機能語化(範疇化)と連続しており、形態化は範疇化の延長線にあるプロセスであると、一般的に考えられている。(3)eのように、haveが'veになるのは機能語から接語への更なるプロセスの例である。こういう変化の関係を一般化して、文法化のクライン(cline)とHopper & Traugott(1993:7)が呼んでいる。

(11) content item > grammatical word > clitic > inflectional affix[5)]

(11)には(7)bの派生形式のプロセスが入っていない。しかし、接辞化は屈折だけでなく、派生形式にも見られるプロセスである以上、派生形式にまつわる接辞化を文法化研究の対象となるのは当然のことである。

派生的接辞化は(5)の「ーどころ」の例以外に、典型的なものとして、次のフランス語のmentが挙げられる。

(12) lente<u>ment</u>'slowly'; ferme<u>ment</u>'firmly'; douce<u>ment</u>'softly,sweetly'

(12)のように、mentは形容詞を副詞化する派生的接辞である。このmentはラテン語の自立語であるmente(mind+ablative case)から接辞化されたものである(Hopper&Traugott, 1993:130)。

(12)の英訳に見られるように、mentはlyと対応しているが、ここでは問題になるのは、派生的接辞に近い複合のようなプロセスを文法化の対象と見るべきかどうかである。統語範疇又は統語機能のシフトが行われるプロセスはすべて文法化の対象になる、というのが我々の考えである。第3章2・2節でみる中国語の動詞の形態化は、一部複合のプロセス

言語学が成立するまでの、比較・歴史言語学が主流になっている20世紀初頭までの古典期と、言語理論の多様化を迎えた20世紀後半の「反形式主義」の時期という2つの発展期に分けられる。ここでその歴史をまとめることは不可能だし、必要もないので、我々の分析に直接につながっている先行研究を概観することにとどめたい。

3・1 古典期：フンボルト、サピアとメイエ[8)]

ドイツの哲学者で言語学者であるフンボルト(1767－1835)が比較言語学者、そして言語類型論の集成者として、言語の本質を追究し、言語を客観的な存在としての実体ではなく、人間の行為であると主張した。文法化という概念を言い出しはしなかったものの、その「言語行為説」と文法形式の進化についての研究が言語の「プロセス説」をモットーとする文法化研究の「祖型」であるといえる。彼の言語構造進化の「四段階」という考え方及びそれと言語類型の相関関係についての研究が、文法化研究を類型論と関連付けさせるモデルを提示していた。

「四段階」とは、Hopper & Truagott(1993)の理解によると、それぞれ「語用」(pragmatic)の段階、「統語」の段階、「接語化」の段階、「形態」の段階であるという(p.19)。最初の「語用」の段階を除いて、それぞれは古典的な類型論でいう孤立言語、粘着言語、屈折言語といった言語類型と対応するわけである。完全な理想的な類型がなく、文法化も言語類型と一貫した対応関係をもつわけではないが、しかし基本的な傾向として、例えば中国語のような孤立言語という類型的な特徴をもっている言語体系では、形態化よりも機能語化(範疇化)という文法化が主要なプロセスであり、相対的な対応関係が求められる(第3章を参照)。

「語用」の段階の設定は言語構造の意味機能を出発点とする考え方に基づいたものであり、この考え方を受け継いで、更に意味関係の局面から文法構造を考えたのは、アメリカの言語学者で人類文化学者であるサピアである。

言語学の古典であるサピア(1884－1939)のLanguage(1921)には文法化理論に近い考え方が随所に見られ、彼こそが文法化研究のモデルを部分的に提供した最初の言語学者であるとも言える。彼の“thinning-out <u>process</u>”(下線が引用者)は文法化で議論する意味の弱化(weaking)という概念そのものである。彼は言語構造に現れてくる概念の体系と抽象度との対応関係を求め、抽象化が文法構造の成り立ちに関与することを分析した。彼のまとめた概念の体系と抽象度の対応関係は次の通りである。

(15) (概念体系) ----→ (抽象度)
　　1) 基本概念　　具体的
　　2) 派生概念　　非具体的

3) 具体的な関係概念　　より抽象的
4) 純粋な関係概念　　純粋に抽象的　(Heine et al.,1991a:42)

(15)は今日の文法化理論でいう文法化に伴う意味変化の具体から抽象への段階(方向性)を示すと同時に、命題的意味と文法的意味の連続性を強調しており、範疇化の原型論は彼のこのアイデアに遡ることができる。次に引用する論述は範疇の連続性の主張を端的に示しており、今日の文法理論は、ここへの回帰であるとも言よう。

(16) It is enough for the general reader to feel that language struggles toward two poles of linguistic expression-material content and relation-and that these poles tend to be connected by a long series of transitional concepts.(p.109)

フンボルトとサピアとは異なり、フランスの言語学者であるメイエ(1866－1936)は、専ら文法構造から文法化を体系的に分析しており、文法化理論の創始者と認められている(Heine et al.,1991a;Hopper & Traugott,1993)。彼は構造主義言語学の創始者であるソシュールの弟子だったが、皮肉なことに、構造主義に対抗する機能主義の先導になっていた。彼は始めて文法化の述語を導入しただけでなく、フランス語などの文法化の事実を詳細に考察し、文法化の動機付け(motivation)をいろいろと関連付け説明し、体系的な研究を試みている。彼は、意味変化と表現の意図が文法化を引き起こす力(force)と考え、機能語と実質語を連続体として取り扱った。そして、機能語の使用頻度の増加と具体的な表現の価値の減少の相関関係を文法化にまつわる性質の1つとして一般化したのである。メイエの文法化研究が基本的な問題を提起し、その研究モデルは今も尚参考に値するものとなっている。

3･2 反形式主義の隆盛

フンボルト、サピア、メイエの時代から今世紀70年代までは、文法化研究の不毛の時代であった。これは形式主義のアプローチが長い間、一貫して言語研究の主流になっていたことによる。生成文法に対抗した機能主義の台頭に伴い、多様な言語研究の方法論が模索される中で、文法化を再提起し、新しい事実が発掘され、綿密な記述、説明及び一般化が行われてきた。特に、80年代後半から文法化研究は言語研究の主題の1つになり、多くの言語学者が加わり、Traugott & Heineが編集した論文集(1991)やHeine et al 1991aとHopper & Traugott 1993はその集成とも言える。

ここ20年の文法化研究はGivónの論文(1971)を発端として再出発したものである。彼の

し、文法化に関する基本的な問題をほぼ網羅している(第9章を参照)。Hopper & Traugott (1993)はこの5つの「原則」と発話機能の動機付けをめぐって、言語交叉の歴史的事実から、文法化について、広範な領域にわたって体系的に研究しており、今のところのバイブル的な存在になっている。

機能文法の言語学者であるTraugottは一連の研究において、文法化の方向性と動機付けという基本的な問題に真正面から取り組んできた。彼女はHallidayの観念、テキスト、対人といった3つの機能に着眼し、Whileの標識機能が時代と共に変化して来た事実により、文法化の方向性を一般化している(Traugott:1989)。

(19) 例: 'at the time that'(Old English) > while'during' (Middle English)
> while 'although'(Present-Day English)
方向性: propositional > (textual>) expressive

Traugottは文法化の動機付けを意味と語用の要因に求め、Givónなどの提出した意味の「漂白」又は弱化の仮説とは逆に、inference informativeness relevance等による意味の増強と、話者の事態に対する態度が文法化の起因だと結論付ける。これは、Hopper & Traugott(1993)においても強調されている。

文法化のより具体的な研究になると、Bybeeの形態論の研究に触れなければならない。BybeeのMorphology(1985)は、"A study of the relation between meaning and form"という副題が示すように、形式と意味の相関関係の追究から形態のプロセスを分析したものである。文法化という用語を用いてはいないものの、文法化の形態化研究の集大成的な存在であると言っても過言ではない。50種もの言語データでもって、結合価(項構造)、テンス、アスペクト、ムード、ウォイス、一致(agreement)といった文法的意味と、複合、抱合、派生、屈折という形態のプロセスとの相関関係について、語幹と接辞の意味的関連性から分析を加えたばかりでなく、形態の連続性に着目し、形態範疇のプロセスを一般化し、形態化の方向性を示している。次の論述から彼女の基本的な考え方が理解出来る。

(20) Compounding, incorporation, derivation and inflection are on a continuum, in which compounding is the freest, involves the largest(indeed an open)class of items, with the richest and most specific meanings, and inflection is the most contrained, involves the smallest classes of items with the most abstract and general of meanings. Languages

differ with respect to the extent to which they make use of these different methods of combining morphemes. (p.108)

Bybeeはまた形態の意味変化と音韻上の対応関係を指摘し、意味の弱化が強いほど、音韻の弱化又は融合が強いという一般化をしている。これはBybee & Willia(1985)で示された、モダリティの標識の文法化の方向性と一致する結論である。それを次のようにまとめることが出来る。

(21) a.命題的意味: specific/concrete meaning→general/abstract meaning
b.文法的意味: agent-oriented modality→epistemic modality
c.文法標識: non-bound auxiliary→inflectional

Bybeeが指摘するように、意味変化は普遍的なプロセスであり、それと形式の対応関係も普遍的な傾向が見られる。第3章2・2節で見るように、中国語においても、Bybeeの一般化と類似している形態化のプロセスが観察される。

文法化研究にさらなる豊富なデータを提供し、文法化をさらに普遍的なプロセスとしてとらえたのは、アフリカ出身の言語学者であるHeineなどの研究である。Heine et al(1991a;1991b)はアフリカ出身の言語学者として、当然の成り行きとして、研究対象の「主流」となっていた欧米など以外のアフリカ諸言語を、文法化理論の枠組で体系的に考察することになる。その研究は文法化研究の普遍的な意義を示す一方、共通の問題解決に示唆を与えるものになる。最も特徴的なのは、彼らが文法化の方向性と動機付けを主にメタファーの面から追究したところである。1991aは'A Conceptual Framework'というサブタイトルからも窺えるように、認知プロセスと文法化を関連付ける代表的な研究になっている。身体名詞の文法化の分析を通して、彼らは次のようなCategorial Metaphorの連鎖(Chain)を提示し、文法化の方向性との対応関係を一般化しており、サピアの概念の体系と抽象度及び言語表現の関係に対する考えを具現し立証したものとなっている。

(22) PERSON > OBJECT > ACTIVITY > SPACE > TIME > QUALITY (p.48)

Hopper & Traugott(1993)が文法化の構造分析に重きをおいたものというなら、Heine et al(1991a)は文法化研究の動機付けの説明に重きをおいたものと言える。両者は今の文法化研究の「双璧」をなす。

以上文法化の先行研究をおおざっぱに見てきたが、これらはいずれも我々のケース・ス

において、文法化とされる語順移動の動機付けは、張り合っている語用機能(主題卓立)と認知機能(類像性)に求めることができるのである(第3章1節を参照)。

このように、文法化の方向性と動機付けはその類型的特徴と合致する一方、文法化はまた類型の変化をもたらしている。VOからOVへシフトするとされる中国語がその例である(第3章3・2を参照)。即ち、文法化は類型の変動が伴うプロセスでもあるので、文法化は類型論と関連付けられるのも、当然のことである。

言うまでもなく、類型の変動は部分的に4・2節で触れた語用機能に動機付けられるものであり、Haiman(1985)が一般化した語順と語用機能の相関関係(Croft,1990:194;Hopper & Traugott,1993:51)からして、文法化は根本的に語用機能に動機付けを求められるのである。

(42)(i) what is old information comes first, what is new information comes later in an utterance;
(ii) ideas that are closely connected tend to be placed together;
(iii) what is at the moment uppermost in the speaker's mind tends to be the first expressed.

結論的に言えば、文法化は意味と認知、語用と機能、普遍性と類型といった様々な要素が相互作用する複雑なプロセスであり、文法化研究も、もろもろの言語事実と関連付けなければならないということである。従って、文法化研究は、言語構造の外部要素に目を向けるというよりも、総合的なアプローチになるのも無理ないことである。機能主義のもとでの文法化研究とはこういうものにならざるをえない。

5. 文法化研究の言語学的位置付け

文法化は、通時的な変化のプロセスとして捉えられることが多い(Givon,1979;ch.4;Croft,1990:ch.8)。我々はHeine et al(1991a:ch.9)の、文法化は「汎時的」(Panchronic)のプロセスであるという主張に賛同する。つまり、これは通時的にも共時的にも観察され、分析可能なプロセスである。文法化は度合(degree)があり、機能語化としての範疇化にしても形態化にしても、すでに進行しているか、標識機能を果す要素として定着している場合は、より歴史的な観点とデータ即ち通時的研究が必要であろう。逆に文法化が遅れていて、未だ定着していない又は定着しつつある要素の場合は、より共時的な分析が必要であろう。我々が選択した空間動詞の文法化は明らかに後者に属するものである(第1章3節を参照)。

第1章で見たように、言語研究はHOWの問題解決とWHYの問題解決を同時に進行しなけれ

ばならず、これを実現できる方法として、言語構造の内部形式の分析に限られた形式主義のアプローチでなく、より広範な言語現象を取り上げ、より多角的な動機付けを求める機能主義のアプローチが期待される。文法化研究は機能主義のアプローチを最大限に生かした方法論として、理論的にも実践的にも言語学を一歩進んで科学化するものと言っても過言ではない。以上見ていた言語事実もそうであるが、これから述べる中国語の文法化分析も、これを証明するものとなろう。

注:

1) Heine et al(1991a:3)とTraugott & Heine (1991:1-2)を参照されたい。Hopper & Traugott(1993:xvi)によると、これらの述語の使用によって、通時的な現象を指すか共時的な現象を指すかが区別される場合もあるというが、いずれも定着していない。もち論ここでいう文法化は広い意味での「言語化」のことではない(第1章注10を参照)。
2) これはいわゆる一方向性(unidirectionality)のことであるが、これについては具体的に2節の研究対象の実例を参照されたい。ただ一般化された、語彙項目から機能語へそして形態化という文法化の方向性は、必ずしも一方向ではないことを指摘しておきたい。中国語の事実としては、機能語化(範疇化)と形態化が並行するケースも見られ、一方向性の修正が必要である(第9章を参照)。
3) 『小学館 国語大辞典』(1981)によると、格助詞の「へ」は名詞の「へ(辺)」から変わってきたという。これは主要な統語範疇から機能語へというプロセスを通時的に立証している好例である。
4) 「買ってやる」の「やる」は動詞の読みも補助動詞の読みも得られるように、補助動詞は助動詞と動詞の中間に介在しており、文法化研究が共時的には可能であるだけでなく、共時的な研究が必要であることを示している。
5) (11)は文法性のクラインとしてまとめられているが、108頁に出て来た、full verb > (vecter verb >)auxiliary > clitic > affix というverb-to-affix clineと同じものであり、文法化のクラインと理解出来る
6) こう見てくると、語構成即ち語彙化も文法化に収めるべきか否かの問題が出て来る。文法構造を構成する文、語彙、形態が連続体であると認可される以上(Langacker,1987)、語彙化の一部を文法化と見なすことができる。
7) 「言語過程説」では、言語を単なる構造物とみなさず、人間の行為として、言語の機能、言語の使用者、言語の社会・文化的条件などと関連付けながら、その本質を解釈している。今日でいう普遍主義的、機能主義的アプローチで議論する概念と命題、認知と経験、対人関係、話者の態度と意図などの要素にも触れている。(『国語学原論 続編 ー言語過程説の成立とその展開ー 』岩波書店、1955年)
8) この部分はドイツ語とフランス語という制約もあり、フンボルトとメイエについて、

性と動機付けを解釈することにヒントを与えられると思われる。いうまでもなく、1つの言語に1つの類型のすべてのパラメーターを当て嵌めることは出来ない。[1] しかし、言語構造に傾向的な特徴の存在が認められる以上、傾向的(相対的)な類型の特性が表れるはずである。その傾向的な類型の特性は文法化にも反映される。極端に言うと、言語の類型は即ち文法化の類型そのものである。

周知の通り、中国語は一般的に、音韻的に「声調言語」(tone-language)であり、形態的に孤立言語であり、統語的にVOとOVの混在型言語であると認識される。語用的特徴として、「主題卓越言語」であるとも言われる。最近の認知文法の観点から中国語を見ると、また類像性の強い言語であると言われるようになっている。これらは、すべて中国語の文法化を解釈する有力な手だてになり、文法化は類型的特性に反映され、方向づけられることの証明になる。例えば、音韻的に見ると、語彙項目が文法化する場合、ほとんど「軽声化」(neutral tone)が起こり、軽声化は文法化の音韻上の現れであり、文法化を判断する1つの目安になる。以下では、文法化現象と直接にかかわっていると思われるところに絞って、1)形態論でいう孤立言語;2)統語論でいうVOとOVの混在型言語;3)語用論でいう主題卓越言語;4)認知文法でいう類像性言語という4つの類型的特質を検討し、中国語を「文法化言語」として位置付けてみることにする。

1・1 孤立言語

古典類型論では、言語を形態論から基本的に孤立言語、膠着言語、屈折言語、抱合言語の4つに分け、中国語は孤立言語にされるというのは、よく知られることである。

孤立言語とは、統語単位の形態変化(屈折)がなく、文法関係は主に語順によって示される言語であると理解される。「我愛他」のように、主語と目的語は語順で示され、「他愛我」のように、人称と文法関係の変化にもかかわらず、述語動詞と目的語名詞の形態変化がないのである。そもそも形態的標識機能に欠ける言語として、中国語は迂言法(periphrasis)の文法標識が多用され、第2章で触れた「文法化のクライン」(cline of grammaticalization)と異なる方向の文法化が予測され、いわゆる「接語」(clitic)の文法化も起こらなければ、最終的に「消失」(zero)のプロセスも現れてこないのである。

ところが、屈折がないにしても、語構成にまつわる複合と派生のプロセスがあり、Bybee(1985)の分析が示したように、これは屈折とつながっている形態化のプロセスである(第2章3節を参照)。複合と派生によって、意味変化と新しい範疇化だけでなく、一部は統語単位の機能シフト、例えば、述語動詞の「価増加」(valency increase)をもたらす接辞化のようなプロセスが起こってくる。しかし、この接辞化は必ずしも一般化されたような機能語化を経たプロセスでなく、それと平行する場合があると考えられる。これについては、ケース・スタディのところで詳述するが、動詞の接辞化と見なすことのできる典型的な例を

幾つか示しておく。

(1) a.我們 走在 社会主義大道上(我々は社会主義の道を歩んでいる)
b.从勝利 走向 勝利(勝利から勝利へ)
c.唱給 祖国 的 賛歌(祖国に捧げる賛歌)

1・2 VOとOVの混在型言語

上で見たように、中国語は形態的には孤立言語に属しており、文法関係は屈折などではなく、語順又は一部の前置詞のような機能語で示される。これが「語順の言語」また分析的言語(analytic language)と言われる所以である。機能語は殆ど動詞からシフトされるものであり、それについては、本章第2節と第4節で詳しく検討するが、ここで中国語の語順及び語順と文法化の相関関係を少し考えてみる。

中国語がVO言語かOV言語かについては、意見が分かれている。Light(1979)が先行研究に基づき、OV型の側面とVO型の側面を次のようにまとめている。

(2) OV型
a.relative clause before noun
b.adjective before noun
c.genitive before governing noun
d.adverbial before the main verb
e.adverb before adjective
f.proper noun before common noun
g.identical order for question and statement
h.final particle for yes-no question
i.postpositional
j,standard marker befor adjective in comparative constructions

(3) VO型
a.object follows verb
b.aspectual verb precedes main verb
c.negative marker precedes main verb
d.verb precedes complementation
c.modal verb precedes main verb
f.activity verb precedes resultative verb

実際の言語表現においては、OVとVOが併存する現象が多く見られ、(2)と(3)は絶対的なパラメーターではない。VOとOVの混在については、一部は文法化から解釈することができる。

Sun & Givón(1985)は、統計分析により、目的語が動詞の後にくる((3)a)例が調査するテキストの94%を占めると報告し、中国語は基本的にVO言語であると主張している。Light(1979)も同じ考え方をし、OVのような構文は、意味機能又は語用機能に動機付けられるものと強調している。これに対して、Li & ThompsonがVOとOVの語用機能、例えば、名詞句のdefiniteとindefiniteの対立を認める一方(1975)、一連の研究において、中国語はVOからOVへシフトしつつあり、OV言語になっていくという趣旨の説明をしている(3・2節を参照)。我々の考えでは、構造が固定化していない言語、即ち文法化言語(下を参照)として、中国語はVO型とOV型の混在が何も不思議なことではなく、必ずしも単一方向への類型にならないと思う。なぜなら、語用的機能しかも認知的機能がその構造の成り立ちに深く関与するからである。文法化の可能性が大きいというのが、その表れである。例えば、(3)fは1・4節で議論する類像性に動機付けられるものであり、(2)dは語順移動に伴って、意味機能の分担が別れてしまうという性格のものである。動詞の文法化としての前置詞の位置変動と接辞化が副詞句の位置関係を変えるにつれ、意味関係も変わるというのが、典型的な例である。GIVE動詞の「給」は、前置詞として、(4)aでは受益者と受け手両方の意味が読み取れるのに対して、(4)bでは受け手しか示さない。そして、接辞化の(4)cも、受け手をだけ表示するが、この受け手は(4)bと比べ、旧情報の読みが強い(第7章を参照)。

(4) a.張三 給李四 送 一本書(張三は李四に/李四の替わりに本を1冊やった)
b.張三 送 一本書 給李四(張三は李四に本を1冊やった)
c.張三 送給 李四 一本書(張三は李四に本を1冊やった)

1・3 主題卓越言語

中国語は「主題卓越言語」(topic-prominent language)とも言われる(Li and Thompson, 1976;1981:15-16)。上で検証した形態上の孤立言語と統語上のVOとOVの混在型という形態統語論の観点とは異なり、主題卓越言語というのは、語用論から捕えた類型的特徴である。第2章4・2節で指摘したように、文法化研究は、方法論的に語用論ないし機能文法と関連付けられるものであり、語用論の観点から類型的特徴と文法化の相関を考えることは、語用論と文法化の相関関係を考えることになる。

主題卓越は主語卓越と対比していうものである。主題と主語の区別は、一般的に前者は語用的に定(definite)であり、意味的に述語動詞と選択関係がなく、統語機能的に項構造を構成せずに、語順的に文頭に位置するという特徴を持つのに対して、後者は不定(inde-

造の在り方と現実世界の在り方及びその捕え方に存在する、ある種の対応関係のことをいう。考えてみれば、現実世界を映すことが言語機能の1つである以上、すべての言語体系にはこの類像性が存在するはずである。ただ中国語においては、その性格がより強いのが顕著な事実である。語彙体系と文法構造だけでなく、それを記録する文字も、象形文字などのように、類像性をもつものであると言えよう。別れの挨拶の「再見」(再び会う)も、「后会有期」(これからも会う時があるはずだ)も、類像性のあいさつ表現である。語彙のレベルにおいては、語彙化に現れる、現実世界を細部にわたってコードする細分化というのが類像性の典型である。[5] 動詞の場合、日本語の「笑う」に対して、その付帯状況などを克明に描写し、現実の有り様を忠実に反映するため、「冷笑、微笑、嘲笑、干笑」など50もの語彙項目が成立するように、語彙化が行われている。同じ語彙化(範疇化でもある)の例であるが、有名な分類詞(classifier)の細分化は認知文法との関連でよく取り上げられ、これも中国語の類像性の現れである。

文法構造のレベルにおいては、多くの現象が類像性の反映として解釈でき、その構造化(広義の文法化)の動機付けを類像性に求めることができる。例えば、時刻の前後関係を表す場合、中国語では要素の配置(語順)と実際の時計の表示とは全く対応しており、構造的に語順が一律化している日本語と英語とは、対照的である。

(7) (前)5分 ‖ 10時 ‖ (後)5分 (時計の表示)

(8) a.差5分 | 十点

b.十点 | 過5分

c.10時 | 5分前

d.10時 | 5分過ぎ

e.(It is) five minutes to | ten.

f.five minutes past | ten.

時間表現の副詞句も、中国語において、基本的に時間の流れの通り、動詞句の前後に結び付けられる。(9)aと(9)bのように、ある時点になってから「ねる」が始まり、「ねてから」時間が立つという実際の状況と語順関係とは、一致を保っている。英語と日本語は、語順的に固定化しており、副詞句の位置関係から類像性の動機付けを追究することができない。[6]

(9) a.他 三点 睡覚

b.他 睡了 三个小時

c.He sleeps at three o'clock

d.He slept for three hours

e.彼は三時に寝る

f.彼は三時間寝た

後で分析するように、空間動詞の文法化の語順移動(前置詞と接辞の両方)も、部分的にこの類像性から解釈できる。よく知られる例をあげておく。

(10) a.他 在卓子上 跳 (彼は机の上で跳ねる)

a'.他 跳在 卓子上 (彼は机に飛び上がった)

b.他 給李四 送一本書 (李四に本を1冊やる)

b'.他 送給李四 一本書 (彼は李四に本を1冊やった) [7]

1・5「文法化言語」

以上の観察から結論(極論かも知れない)を言うと、中国語は「文法化言語」だと言える。文法構造発展の四段階というフンボルト仮説(第2章3・1節を参照)からしても、中国語は正に構造化(文法化)に向かってスタートし、進んでいる最中にあると思われる。屈折が欠けているかわりに、派生のプロセスが活発的であり、屈折言語における文法化(主に形態化)の担う機能を果すように、語彙項目が機能語化(前置詞化)と並んで接辞化が起こってくる。存在動詞(第4章)、方向動詞(第5章)、GIVE動詞(第7章)の(後)接辞化が生起するのはその現れである。VO型とOV型の混在という統語類型論的特徴からして、動詞述語の前後に構文要素が遊離するのは、文法化に向かうプロセスの反映であると言える。これはまた、語用論的類型の特徴である「主題卓越」と認知文法論的類型の特徴である「類像性」と関連している。これらの類型的特徴から、中国語の文法化の動機付けを求めることができると同時に、文法化もこういう類型的特徴をもたらすのである。次で見ようとする中国語の文法化の実例が我々の結論を立証するものである。

2. 中国語の文法化

「文法化言語」という結論を付けたが、中国語の文法化は、実にバラエティに富んでおり、幾つかの側面から考察することができる。中国語における文法化は、中国語の類型的特徴を反映すると同時に、言語プロセスの相対的な普遍性を表すものである。文法化の観点から中国語を見ると、新しい事実の発掘も解釈も期待される。

第2章2節で触れたように、文法化は、入力の語彙項目から出力の文法形式への研究もできるし、文法形式の標識機能から語彙項目への追究も出来る。文法形式の動機付けを追究する立場から、語彙項目から文法形式への分析が一般的である。中国語の文法化への観察

の状況に似ているものである。方向補語の中から、意味の抽象化につれ、徐々に接辞化しつつあると思われる例を2つ取り出してみよう。

(20) a.雨下起来了（雨が降り始めた）
b.一定要写下去（どうしても書き続けたい）

(20)aの「起来」は「始発」の標識であり、(20)bの「下去」は「継続」の標識であり、アスペクトというような文法的意味を表しているので、形態化の接辞化としては妥当であろう。

上の状況と関連するものであるが、従来補語又は後置される前置詞句の標識と見なさた要素の一部も、我々の考えでは接尾辞と見直したい。[11] そして、これらを動詞の前置詞化と平行するプロセスと考えたい。本章の1・1節の(1)を再録するが、下線部を引いたのは、いずれも動詞の接辞化の例である。

(21) a.我們 走在 社会主義大道上
b.从勝利 走向 勝利
c.唱給 祖国 的 賛歌

日本語と関連して考えると、上で調べた中国語の動詞の接辞化が傍証される。

日本語において、複合動詞には連用形とテ形の2つのパターンがある。前者の場合、動詞の意味内容によって、述語性に度合があり、徐々に接辞化に向かっていく。下の(22)は接頭辞の例であり、(23)は接尾辞の例である(益岡・窪田 1991)。

(22) うち沈む;とり壊す;ぶち壊す(p.63)
(23) a.その話を聞いて、私は考え込んだ。(p.19)
b.この問題はもう研究しつくされた(p.18)
c.結果がよすぎるのも困るが、よくなさすぎるのはもっと困る(p.68)

一方、テ形の複合動詞であるが、これは伝統的に補助動詞と呼ばれるものである。それは意味的にも機能的にも動詞性の低いもので、しかも主動詞の後にくるので、接尾辞に似ている。[12]

(24) a.ている;てある:てしまう;ていく;てくる(アスペクト)
b.てもらう;てくれる;てやる(授受関係)
c.ておく;てみる;てみせる（益岡・窪田 1991:17)

ある事実があるだけでなく、fは「拿」と「用」が交替しても、何ら意味の差が生じないので、「用」は分離されるイベントを報告するという解釈には問題がある。

以上のように、Li & Thompsonは、類型論と歴史の点から問題を解釈しようとするにもかかわらず、依然として表面上の考察に偏り、統語範疇と標識機能の説明が不十分になってしまう。真の意味での機能主義から出発する文法化理論がそれを補うことが期待される。

4. 場所主義と「空間動詞」の文法化

第2節で動詞の範疇化と形態化を中心に、中国語の文法化を概観した。本研究は文法化体系の一角に焦点を当て、入力に着目し、「空間動詞」の一部の文法化を取り上げるものである。空間動詞の文法化をテーマに選択する理由は、中国語において、空間表現の動詞の文法化が活発的で体系的という特徴をもつという事実による一方、言語表現には空間表現から派生されたものが多いという普遍的な言語事実に基づいた場所主義のアイデアからヒントを得たからである。以下では、場所主義の考え方を検討し、その相対的な普遍性を立証するうえで、本研究の中心となる空間動詞の文法化の体系を提示しておく

4·1 場所主義の考え方

場所主義(localism)の考え方では、空間表現が最も基本的なものであり、ほかの言語表現は空間表現から派生されるものが多いと主張している。この考え方については、いろいろと説明されているが、Lyons(1977:718)が述べたのが代表的である。

(32) Spatial expressions are linguistically more basic, according to the localists, in that they serve as structural templates, as it were, for other expressions; ...spatial organization is of central importance in human cognition.

言語構造の成り立ちだけでなく、言語構造に現れてくる人間の認知の仕方にも関与するという意味では、空間表現の文法化は言語プロセスの典型的なケースであり、文法化に反映される認知転換のプロセスを解明する手掛かりであるとも言える。本研究で見る中国語の空間動詞の文法化は、場所主義を立証する好例である。

ところが、Heine et al(1991a:115;187)は、アフリカ諸言語の文法化の事実を踏まえ、文法化のPERSON>OBJECT>ACTIVITY>SPACE>TIME>QUALITYというchainの仮説を打ち出して、空間表現は必ずしも言語構造のtemplateではなく、場所主義に否定的な態度を示してい

る。これは、言語類型的特質と文法化の特徴に存在する相関関係に示したごとく(第2章4・3節を参照)、言語によって文法化の元が動詞か名詞かの選択に相違が現れるのと同様に、PERSONがSPACEに先立って、文法化が始まるのもあれば、PERSONを元としないのもあるので、絶対的なものではない。

実際、Heine et al(1991a:36)が提示している"source propositions"にも窺えるように、空間表現が命題の中の先立つ中心的な部分を占めており、空間的命題から派生される表現命題も多い。

(33) a.X is at Y: Locational proposition
b.X moves to /from Y: Motion proposition
c.X does Y: Action proposition
d.X is part of Y: Part-whole proposition
e.X is (like) a Y: Equational proposition
f.X is with Y: Comitative proposition

(33)のaとbは純粋な空間命題であり、dとfも空間との関連性が強い。cの行為命題にしても、行為に関与する参与者の位置変動も含まれる影響と被影響などの関係からして、抽象的な空間命題になるのであろう。そして、純粋な空間命題の表現は、例えば、空間関係の側置詞が時間関係などの表示になるように、言語表現のtemplateになることは、言語普遍の事実である。次の節でまとめる中国語の空間命題を表す動詞が文法化するのも、典型的な事例である。それに入る前に、英語と日本語の側置詞の空間意味が拡大する例を幾つか見よう。

周知の通り、英語の前置詞は複雑な意味関係の標識機能を果すものである。次に挙げるat,by,in,toが空間関係の標識から他の意味関係の標識へ拡大されていることは、直感的にも判断出来る(Quirk et al.,1985)。

(34) a.My car is at the cottage.
b.at ten o'clock
c.She smiled at me.
d.I was alarmed at his behaviour.
(35) a.He was standing by the door.
b.We preferred travelling by night.
c.I usually go to work by bus.
d.The window had been broken by a stone.
(36) a.There are only two beds in the cottage.

b.in the evening

c.We'll meet in three months' time

d.The job was done in a workmanlike manner.

(37) a.Is this the bus to Oxford?

b.a letter from Browning to his wife

c.We camped there from June to September.

d.To my regret, they rejected the offer.

日本語においても、格助詞の多くは、基本的に空間関係を示すものであり、空間関係から他の意味関係の標識に拡張されており、場所主義の相対的な普遍性を裏付けている。

(38) a.砂場に子供がいる

b.叔父は花子に小遣いを与えた

(39) a.太郎は駅からタクシーで行った

b.花子は叔父から小遣いをもらった

(40) a.結婚式はホテルで行われた

b.太郎は風邪で学校を休んだ

(41) a.かつて東京までバスで行ったものだ

b.3時まで待ちましょう　　(益岡・窪田 1991:76−79)

格助詞ばかりではなく、本研究で関連する複合格助詞の「にむかって」と「にむけて」、「を通じて」と「を通して」、補助動詞(又は接尾辞)の「ていく」と「てくる」、「てくれる」と「てやる」も、いずれも空間表現の動詞から派生されたものであり、多くの局面において、意味変化を経て、文法化が実現するのである。このほかに、「こちら」、「そちら」、「おたく」、「お前」、「おくさん」などのように、空間の指示から人間の指示へのプロセスも観察される。

上で見た英語と日本語と同様に、中国語においても、空間表現が文法標識に用いられる例が多く、本研究で体系的に取り扱っていない、空間動詞が格標識の機能を果すように文法化する例を幾つか挙げておく。

(42) a.别跟他開玩笑 Don't joke with him!

b.别冲着人打 Don't sneeze facing people!

c.病从口入、禍从口出 Sickness comes in by mouth, calamity comes out by (word of) mouth

d.現在離暑仮只一个月了It is now only one month to the summer vacation

e.别光順着我説話 Don't just say exactly as I say!

f.我就靠两只手過活I make my living just by the strength of my two hands (Chao,1968: 755-64)

(42)以外に空間動詞の文法化の例がまだあるが、これだけの中国語の事例からしても、場所主義の考え方の普遍的な意義が理解されるであろう。

4・2「空間動詞」の文法化

動詞の意味的な分類は、「一語一類」とも言えるほど、不可能に近い。現実世界の状況を表す記号として、動詞はその状況を細部に亙って語彙化されるものであって、異なる側面からそれを分類することができるのである。しかし、原型論的に考えて、共通の抽象的な意味合い(意味素)をもつ動詞をグループすることが可能である。ここでいう「空間動詞」はそのグループの1つである。

「空間動詞」(spatial verb)とは、具体的にも抽象的にも場所又は方向と関連性のある動詞のことである。[17] 即ち、統語的にはある程度、場所と方向を表す要素を構文の項(argument)として要求するものである。ここで取り扱うのは、中国語の文法化する空間動詞の全部ではなく、そのなかの5つの下位分類である。もち論、中には意味的に重複するものもある。

(1)存在動詞の「在」。存在動詞の「在」は状態動詞であり、存在する主体と場所が参与者になる。多項目文法化(polygrammaticalization)(Craig,1991)が起こるが、本研究ではその典型的な所格(locative)標識としての前置詞化と接辞化という文法化を見る。そして、「で」と「に」と対応するところがあり、英語の倒置法に類似する現象も観察され、日英との関連研究が必要とされる。

(2)方向動詞の「向」、「朝」、「往」。「往」は古典語では移動動詞だったが、単独に動詞述語としてほとんど使わなくなり、その方向指示の機能によって方向動詞の類に入れられる。この3つは、向格(allative)の標識として機能するほかに、また部分的に源泉格(source)、着点格(goal)、与格(dative)などをマークし、前置詞化と接辞化の文法化が現れる。「にむかって」と「にむけて」と似ているところがあり、その比較も研究課題となる。

(3)直示的移動動詞の「去」及び「来」。この2つは格関係ではなく、対人の文脈において、モダリティ標識などの機能を果していながらも、範疇化はまだ定着していない。ここで文末の「去」の機能を中心に、その状況を調べる。方向の項を要求するところでは、方向動詞と似ているが、なぜ一方では格関係の標識に、一方ではモダリティの表現に文法化するか

が興味深い問題である。「いく」と「くる」、そしてbe going toと関連付けられるプロセスである。

(4)GIVE動詞の「給」。これは所属関係の変動(移動)に人間が関与するという抽象的な空間動詞であり、複雑な文法化(多機能化)が行われ、与格の標識から受益格の標識へ、対格の標識から受動化の標識へと文法化する。本研究では、与格と受益格の標識機能に絞って、その文法化を考察する。「給」の前置詞化又は接辞化に対して、「てやる」と「てくれる」が受益構文を作るが、異なる範疇(補助動詞)になるのは、中日語の対照研究の問題となる。

(5)通過動詞の「通過」と「経過」。この2つは、経路を補語に要求する移動動詞だが、道具格に近い媒介又は仲介者をマークするプロセスが観察される。そして、前置詞化が起こるが、存在動詞、方向動詞、GIVE動詞に見られるような接辞化のプロセスがなく、その比較も問題である。更に、「通して」と「通じて」と部分的に似ており、日本語と関連付けられるテーマになる。

以下第4章から第8章において、順番通りこの5つのケース・スタディを進めていって、中国語の文法構造を分析し、特徴のあるプロセスをたどりながら、文法化理論の一般化の検証と修正を試みたい。

注:

1) Palmer(1994)は、ergative languageやaccausative languageの存在を否定し、そのかわりに、ergative systemやaccusative systemを打ち出したのも言語の類型の規定の問題を意識したのである。言語類型に対して、否定的な態度をもっているのは、Lightがいる。彼は中国語の言語事実によって、the statement that a language is SOV or OSV is by itself a nearly meaningless statementと述べている(1979:175)。
2) これについては、Tsao(1979:37)が、since Chinese allows a discourse element such as topic to play an important role in sentential organization, it would be better to call it a discourse-oriented languageと述べている。
3) 主題卓越言語の全体的な統語特徴については、Li & Thompson(1976)は、8項目に分けて述べており(p.466-71)、参照されたい。
4) 日本語も主題卓越言語だと言われているが、例(5)bの訳の通り、少なくとも、場所副詞句の場合、「には」、「では」などのように主題化が顕示されており、中国語に通じるところである。
5) これも相対的なことで、位置関係を示す語彙体系の場合、統語機能によって、「上、下、前、後」などに接辞のような「辺、面、頭」を付けたりすることで、中国語は細分化されていると言えるが、一方、現実世界の捕え方によって、「まえ、さき、おもて」と「うしろ、あ

と、うら」のように、中国語の前後関係の「前後」より、日本語のほうが細分化されている(盧、1991;1993b;1993cを参照)。

6) 中国語の類像性に関して、英語と比較して、Tai(1985)は、PTS(Principle of Temporal Sequence)を提示している。PTSについて、the relation word order between to syntactic units is determind by the temporal order of the states which they represent in the conceptual worldとTaiは述べており、そして、PTSを補って、PTSC(Principle of temporal Scope)を打ち出している。中川(1993)は中国語の類像性について、統語構造から分析して、PTSとPTSCの問題点を指摘し、words with strongest affinities are located closestというThe Principle of Affinity(PA)を提示しており、示唆的である。

7) (10)bとb'の分析は、第7章を参照されたいが、2つとも両義的である。bが未実現で、b'は実現の状況と一般的に考えられる。「給」もその語用機能に応じて、配置される。

8) 「動詞の言語」というのは、大阪外国語大学の大河内教授の教示によるものである。これは色々と解釈でき、動詞体系の細分化という語彙化のプロセスからも理解できる。類型的に「連動文言語」(serialising language)(Sebba,1987;Lord,1993)に認識される中国語としては、動詞が連動文(serial verb construction)又は複合動詞の形で文法標識につながる関係的表現に多用されるということが、その特徴の1つであると考えられよう。

9) 丁声樹等(1961:89)は、助動詞を単独に取り扱っているが、「動詞の1つ」と述べている。朱徳熙(1982:61)も助動詞の用語を使っているが、動詞と同様に「謂詞(用言)」の下位範疇としている。劉月華等(1983:105)は「能願動詞」と呼び、特殊な動詞とみている。

10) 日本語の「ーと思われる」又は「ーかと思う」なども、モダリティの標識機能を果しており、文法化の問題になると思われる。英語の思考動詞thinkが文法化することを分析したものには、Thompsou & Mulac(1991)がある。

11) 劉月華等(1983:330)は、下の(21)の「在」と「給」を補語と見たり、「向」を介詞としたりしている(386)

12) 高橋(1994)が、「(日本語において)動詞とは、(a語彙的意味)運動をあらわし、(b文中のはたらき)文の述語になることを第1の任務とし、(c文中での形のとりかたのシステム)そのこととむすびついて活用する単語グループである」と、定義付けている(p.9)。この定義に基づき、これらは活用するので、統語的に動詞の性格を完全に失っていない。ただ意味変化と位置分布及び統語機能の側面から考えると、接尾辞に類似する範疇と見てもよかろう。

13) Heine et al(1991a:5)が先行研究では元の周伯奇(1271－1368)が"argued that all empty symbols were formerly full symbols"という事を指摘していたことにふれている。周伯奇は「大抵古人製字多自事物始、後之修辞者毎借実字為虚字、用以達其意」

(周伯奇『六書正偽』)と述べている。Matisoff(1991)がTraditional Chinese grammar distinguishes between shi-ci "full/solid/real/true words" and xu-ci "empty words", so that good Chinese translation of grammaticalization is xu-hua("emptyizing, emptification,evacaution")(p.383)と述べているが、伝統的な「虚化」でもって文法化を理解するには問題がある。というのは、下の先行研究が示すように、「虚化」は専ら歴史のプロセスを指すものであり、共時的な研究も含めた「汎時的」(panchronic)な文法化研究と抵触するところがあるからである。

14) Li & Thompson(1981)では、最後の「得」を接辞と認めていない。これについては、深入りしないが、いずれにしても、この「得」はより抽象的であることは事実である。

15) 楊(1984(1930))は、「子在斉聞韶」(『論語』)という例の中の「在」を「介詞」としている。更に、徐(1992)は、「在V」と「V在」は違う語彙項目を元にして文法化したものという主旨の説明をしている。

16) この点については、Huaug(1978)も指摘している。

17) 我々のいう「空間動詞」は、Lord(1993:ch.2)のLocative verbと部分的に似ているが、ただそれは、物理的なmotionとlocationの意味範疇を表すものに限定され、抽象的な移動動詞としてのGIVE動詞が含まれていない。「空間動詞」がより包括的な概念になるのだろう。

第4章　存在動詞の文法化

....., most theoretical work has proceeded without fully taking into account the great diversity of systems that are to be found in the languages of the world, and, therefore, often forcing new data into an already established theory.　　[Palmer,1994: 240]

0. はじめに

場所動詞(locative verb)の1つである、存在動詞("be at")が連動文の文脈において、所格(locative case)をマークし、文法化するのは、「連動文言語」(serialising language)に最もよく観察される言語プロセスである(Lord,1993)(付録1・1を参照)。存在動詞は、存在する主体とその主体が存在する空間との関係を示し、関係的プロセスを表す動詞である。[1] X is at Y という基本的な存在命題の表現から、X is doing Yというアスペクトの表現へ変わったりするのも、言語普遍のプロセスであるということからして(Heine et al.,1991a:36-37)、存在命題を表す存在動詞は、一般性の高い意味範疇の表示として、抽象的な文法的意味の標識にシフトする傾向が強いという結論が導かれる。他の言語と同様に、「在」もアスペクトの表現になったりして多項目文法化(polygrammaticalization)が生起する。ここでは、場所指示としての所格標識(locative marker)の機能に絞って、存在動詞の「在」の文法化を分析する。

第1節では、「在」の構造を分析し、推論(inference)の結果として、存在状態に関連するプロセス又は状況を示した連動文という文脈のもとで、「在」が述語動詞から文法標識へ転換するプロセスを見る。第2節では、他動詞述語文と自動詞述語文を分けて、「在」の所格標識の機能を記述し、その文法化を詳しく分析する。第3節では、「在+場所+VP」という前置(preverbal)の構文パターン(「在V」と略す)と比較しながら、「VP+在+場所」という後置(postverbal)の構文パターン(「V在」と略す)の共起制約を分析し、「在」の接辞への形態化を分析する。更に第4節では、「在V」と「V在」の語用機能の相違を探りながら、「在」の文法化の語用的動機付けを考える。第5節では、日英語と関連づけ、「で」と「に」の役割分担及び英語の倒置法の意味機能と比較しながら、「在」の文法化の特質を傍証する。最後の第6節では、形式的な記述文法の問題点を指摘しながら、「在」の文法化をまとめる。

1. 動詞述語から文法標識へ

語彙項目から文法形式へのプロセスは、一般的にメタファーなどが伴う語彙項目の意

味変化を出発点とするものと考えられている(第2章4・1節を参照)。これに対して、「在」の所格標識の機能はある推論の結果であると思われる。そのプロセスの分析に入る前に、述語動詞としての「在」の構造を少し見てみよう。

1・1 動詞の構造

「在」は二項動詞として、次のような構造をもっている。[2)]

(1) NP1 + 在 + NP2

NP1は存在する主体を表す主語であり、NP2は存在する場所を表す場所目的語である。認知文法の概念で言うと、NP1は、「図(形)」(figure)であり、NP2は「地」(ground)である。[3)]
NP1をなすものは、基本的に人間と実体(entity)の2つである。

(2) 小李 在 家 (李君は家にいる)
(3) 書 在 椅子上 (本は椅子の上にある)

(2)と(3)は話し手が把握している状態を表している。この状態は発話時の眼前状況の可能性もあれば、話し手が判断したり思い出したりする脳裏にある状況の可能性もある。いずれにしても、「在」で表すのは話し手の認知可能な範囲内の持続状態でなければならない。状態表現であるので、一般的にアスペクトの標識の「了」などを付けることがない。

1・2 動詞述語から文法標識へ

現実の世界では、(2)の「小李」は何かをすることが決まっており、(3)の「書」も何かの働き掛けの結果としてそのように存在するのである。こういう論理関係に基づく話し手の推論と伝達の需要に応じて、関連するプロセス又は状況が連動文(serial verb construction)という形で表出されると、述語の「在」はそのプロセス又は状況にかかわっている二次的な要素になってきて、文法化が始まる。

(4) 小李 在家 看書 (李君は家で本を読む)
(5) 書 放在 椅子上 (本は椅子の上に置いてある)

(4)では存在の主体が行為の主体に変わり、存在の場所も行為の場所に変わっているが、「在」でマークされる場所は、主体の所在を示すという主体関連の性質は変わっていない。

次の分析に示すように、「在」は主体関連の所格標識が原型的なものであり、場所の「在」は存在の「在」から転換されていることを物語っている。(5)では存在の実体は被動者(theme)として捕えられ、時間の流れ(principle of temporal sequence)(第3章1・4節を参照)から、存在の因果関係を示していることが分かり、「在」は実質的に存在する実体の所在を表すことに変わりはない。連動文という統語構造において、「在」は前置詞と接辞になり、文法化している。次では、他動詞述語文と自動詞述語文を分けて、その統語構造を分析しながら、「在」の所格標識の機能を調べてみる。[1]

2.「在」の所格標識

2・1 他動詞述語文

所格標識の「在」は存在関係から推論した結果であり、所格標識に現れる存在の主体と行為の主体の同一性がこれを示している。後で見る自動詞述語文もそうであるが、他動詞述語文における所格標識の「在」は、基本的に存在の主体でも行為の主体でもあるという、主語関連(subject-related)の特性をもっているのである。

よく知られるように、他動詞述語文において、「在」と結合する動詞は意味的に選択の制約を受けず、場所を取ると考えられる一般的な他動詞はすべて共起できる。これは行為主体に関連する「在」が、主体の存在を表す「在」から来たということを端的に示している。

(6) a.小李 在家 写 信 (李君は家で手紙を書いている)
　　b.小李 在屋里 聴音楽 (李君は部屋の中で音楽を聞いている)
(7) a.小李 在家 看 書 = (4)
　　b.*小李 看 書 在家

(7)bに示したように、主語関連の場合、場所は動詞句の後に移動できない。出来事の時間的順序と語順が基本的に一致するという類像性の特徴により(第3章1・4節を参照)、(7)aのように、先立つ状況の「在家」が、後接する「看書」の場所として推論され、「在」で導入される場所は、所在の場所そのものである。(7)bが非文法的なのは、その出来事の時間順序を逆さまにしたからである。換言すれば、所格標識の「在」は存在関係の表示の「在」とは連続的であり、主語関連の所格標識は主体の所在を同時にに示している。従って、(6)のように、動詞の場所関連性の有無を問わず、主体関連の性格により、「在」はすべての他動詞述語文において場所を標識することができるのである。次の例のように、主語関連の優位性により、目的語に関連しない文が成立するのも当然のことである。

(8) a.(張三) 在飛机上 看 海 (飛行機で(から)海をみる) (朱 1982:183)

b.小李 在草坪上 放 風筝（李君は芝生で凧あげをしている）

ところで、「在」は、目的語関連(object-related)の場所をマークすることも可能である。

(9) a.小李 在黒板上 写字（李君は黒板に字を書いている）
b.小李 在卓子上 擺書（李君は机に本を並べている）

(9)では「在」で導かれた場所は「小李」の所在か「字」と「書」の所在かは両義的である。[5] (9)に出て来たのは、(6)－(8)のような一般的な他動詞でなく、いわゆる配置(placement)の他動詞に限られる。[6] そういう特別の動詞の意味特徴により、「在」は目的語関連の所格標識の機能が付与されるが、結合する動詞の制約から見れば、目的語関連の所格標識は「在」の一歩進んだ文法化であると理解できる。(9)は主語関連の場所とも解釈し得るのは、主語関連の所格標識が「在」の原型であることの証である。「在」は目的語関連の所格標識に伴い、統語制約が増え、文法化理論で一般化されたところの、意味機能の拡大と統語制約の対応関係と合致するものである。

問題は、なぜ主語関連から目的語関連への所格標識になったのか、である。(9)を細かく観察すると、その場所は「小李」の所在ではないものの、「小李」の指が接触する場所か「小李」が目を向ける場所であって、動作主の影響する領域(domain)であることが分かる。つまり、「黒板」も「机」も動作主が目指したり影響したりする場所であり、「在」でマークする場所は動作主の支配可能な領域内の範囲なのである。[7] (9)aは「小李写黒板」と言い換えられ、「黒板」の目的語化が可能なことが、場所としての「黒板」が主語の影響を受けていることを物語っている。このことは、更に次のような抽象的な所格標識の例からも理解でき、これは主語関連の領域表示の機能の拡大であるとみてよい。

(10) 小李 在心里 想（李君は心のなかで考えている）

(10)のように、目的語関連も主語関連も想定しにくい思考動詞の場合には、「在」で導入された「心里」は主語の身体部分であるが故に、主語の支配する又は働き掛ける領域のはずであり、主語関連の性質は変わっていない。

ところで、(9)のような配置の他動詞述語文において、「在」は動詞の後に移動できる。

(11) a.小李 把字 写在 黒板上（李君は黒板に字を書いた）
cf.小李 在黒板上 写 字 = (9)a（李君は黒板に字を書いている）
b.小李 把書 擺在 卓子上（李君は本を机の上に本を並べた）

cf.小李 在卓子上 擺 書 = (9)b (李君は机に本を並べている)

比較例が進行中の状況を示すのに対して、(11)aとbは結果を伴う完了表現と見なすことができる。ここで「在」でマークされるのは、比較例のように動作主の支配領域内の目的語関連の場所でなく、動作主の働き掛けの結果としての目的語の到着した着点である。着点(goal)標識の「到」に置き換えられるので、「在」の着点標識の機能が読み取れる。こういう語順移動により、「在」は着点標識になってきたが、語順移動の動機付けは何かが問われるのである。

(11)は動作主の意図性の強い状況を示している。現実的には、目的語の「字」も「書」もその行為に先立つ存在ではない。「把」でそれを動詞句の前に導入するのは、動作主の関心が寄せられる目標となった被動者が脳裏に先に浮かんでいるからである。一旦取り上げられた被動者はどうなったかという結果についての情報を提供し、その所在としての到達点をマークするのが「在」の役割である。このことは次の例にはっきり現れてくる。

(12) a.她拒絶 在訊問記録上 簽字(彼女は尋問調書にサインするのを拒否した)(死)
b.??她 拒絶 把字 簽在 訊問記録上
(13) a.你 把画 挂在 黒板上 (絵を黒板に掛けて下さい)
b.?? 你 在黒板上 挂画

(12)aでは「拒絶」の後に出て来る従属文がその目的語であり、中の「字」を特に取り上げる状況でもないので、(12)bは不自然なわけである。これに対して、(13)aのように、依頼表現の場合に、被動者が目標になっているので、中立叙述の(13)bが不向きである。こういう語用的要因によって、「在V」か「V在」を選択するのは、4節で見るその語用機能の相違にもっとはっきり現れてくる。

ところが、(11)において「在」でマークした着点は目的語の所在でありながらも、動作主の目指した場所であり、後置の「在」も存在関係の「在」と関連し、そこから更に分化されたものと言えよう。そして、(11)を言い換え、プロセスに関与する動作主を抜きにすると、主体との関連性がなくなり、1・2節に出た(5)のように被動者は主題化され、その存在状態を示すようになってくる。

(14) a.字 写在 黒板上 (字は黒板に書いてある)
b.書 擺在 卓子上 (本は机に置いてある)

(11)と(14)の「在」は前置詞の後方移動であり、前置詞であると見なされてきた。以上の分析に示したように、この「在」は意味的にも統語的にも変わってきたので、前置詞からさ

らに文法化された形態化としての接辞と見なすことができる。これについては、自動詞述語文の状況を見てから、3節の統語制約についての議論で詳しく分析するが、次に挙げた後置の「在」と共起できる配置の他動詞から見ても分かるように、普通2項動詞として使われる動詞が、「在」が添えられ、着点を義務的(obligatory)成分に要求する3項動詞になってきており、結合価増加(valency-increase)をもたらす機能からして、後置の「在」は接辞になっていると言える。

(15) 放、種、藏、挂、記、塗、貼、建、挿、鋪、倒、存、装、晒、印、含、

2·2 自動詞述語文

自動詞述語文の場合は、参与者が1つなので、当然「在」は主語関連の特性しかない。そして、他動詞述語文と異なるのは、「在V」と「V在」の交替が活発的であり、意味機能がより複雑になり、「在」の所格標識も拡大解釈できることである。問題は、基本的な「在V」はなぜ「V在」のように交替できるのか、である。この問題に関しては、異なる意味特徴をもつ動詞が深く関与するので、動詞を分類し、それぞれの状況を考察しなければならない。ここでは基本的に動的な自動詞と静的な自動詞とそのどちらでもない出現動詞の3つに分けて、「在」の分析を進めていく。

動的自動詞は基本的に移動の特徴をもっており、中には位置を取るものと、経路を取るものと、着点を取るものという3つに分けられる。位置を取る自動詞として、よく挙げられるのは「跳」である。

(16) a.小李 在沙灘上 跳 (李君は砂の上で跳びはねている)
b.小李 跳在 沙灘上 (李君は砂の上に跳んだ) (Teng,1975;Tai,1985)

(16)aは他動詞の場合と同様に、主体の所在から推論したものであり、主語関連の場所をマークしている。反対に、(16)bは「跳」という動作を経て、最終的に主語の所在を示す着点を標識している。「在」に着点標識の機能が付与されたのは、因果関係の表示によるものである。結局のところ、後置の「在」も主語の所在指示に変わりがなく、存在動詞の「在」から分化したものと言える。そして、1項動詞の「跳」を2項動詞のように振る舞わせる機能からみて、後置の「在」は接辞と見て取れる。

経路を取る自動詞の典型的な例として、「走」が挙げられる。

(17) a.小李 在 沙灘上 走 (李君が砂の上を歩いている)

b.?小李 走在 沙灘上

(18) a.我們 走在 社会主義大道上（我々は社会主義の道を歩んでいる）

b.日本 走在 世界経済的前列（日本は世界経済をリードする）

(17)aは眼前状況として、経路標識となる「在」は「小李」の所在も示され、存在の「在」から推論されたものである。しかし、(17)bに示すように、動いているところを捕える場合は、後置の「在」は不自然である。これは具体的な「走」には着点を伴う状況が生起しにくいからであろう。ただ(18)に示すように、同じ「走」でも抽象的な事柄のメタファーとして、後置の「在」と共起できる。このように、「V在」の一部が抽象的表現に制限されることからして、後置の「在」が一歩進んだ文法化であると考えられる。実際、「走」はいろいろと意味解釈出来るように、経路を取る移動動詞と言い切れない。(17)の文脈においてそう理解することができるが、単独に取り出してそれを指定することは無理である。従って、ある設定された場面においてしか意味しないと言うことができ(第2章4・2節を参照)、次の例の通り、実際の状況において、「在」も動詞も新しい解釈が得られる。

(19) 烏鴉 呱呱叫着在天空盤旋、盤旋在荒徑旁的孤墳上（烏はカーカーと空を舞い道のそばの墓に舞いおりた）(離婚:51)

(19)では前置の「在」は経路を示し、「盤旋」は経路を取る自動詞と見なしてよい。しかし、「盤旋在」となると、「盤旋」は着点を取る自動詞になり、「在」も着点と解釈できるのである。

ところで、着点を取る動詞は、直示的移動動詞の「来」や「去」なども含まれるが、ここでは垂直方向の変位を伴う非意志動詞を指す。非意志動詞である以上、着点の場所は改めて用意されたり、目指したりするものではなく、主体の存在する場所と関連性がないので、動作主関連が原型である前置の「在」と矛盾し、共起しないのも当然なことである。ただ行為の遂行に伴い最終的に「在」がその動作主の所在を示し、主体関連の「在」から派生したものと考えられる。

(20) a.*小李 在井里 掉

b.小李 掉在 井里（李君は井戸に落ちた）(朱 1982;Tai 1985)

c.小李 从地上 掉到井里（李君は上から井戸に落ちた）

(20)cのように、着点標識の「到」が同じ状況を表すので、「在」が着点を示すと読み取れる。この非意志動詞はほかには、「落」、「跌」、「陷」、「摔」などがあり、いずれも1項動詞だが、「在」が添えられ、2項動詞として機能するので、後置の「在」は接辞であると認定出来る。

一方、静的自動詞の状況であるが、静的と言いながらも、異なる文脈において異なる意味解釈が出来、絶対的なものではない。存在の状態又は身体の動きを伴う姿勢動詞であり、主に「蹲」、「站」、「靠」、「倚」、「躺」、「睡」、「跪」、「趴」、「停」などがある。これらの自動詞と共起する場合、「在V」と「V在」の交替が比較的自由であり、意味関係の相違がはっきりしない場合も多い。

(21) a.小李 在大阪 住（李君は大阪に住んでいる）
　　b.小李 住在 大阪
(22) a.小李 在沙発上 坐着（李君はソファーに座っている）
　　b.小李 坐在 沙発上

(22)から言うと、持続標識の「着」がついているので、(22)aは存在様態が示される状態表現であり、「在」は他の自動詞と同様に存在動詞から推論されたものであると思われる。(22)bは(22)aと同じ意味に解釈でき、状態表現としても無理はないが、「坐」の動きという側面からすると、後置の「在」は着点標識に解釈できないこともない。(21)の「住」は状態性が強く、「在」の前後位置の交替と関係せず、意味関係の差が薄い。しかし、4節で議論するように、語用機能において、その差が現れ、「在」の標識機能は広い意味機能に動機付けを求め理解しなければならない。[8)]

静的自動詞の状況と似ているものは、出現・消失を表す自動詞である。出現と消失は反対の意味関係であるが、統語的に同じ振る舞いをして、同類に見なされる。「出現」、「浮現」、「昇起」、「発生」などが出現動詞であり、「消失」、「死」などが消失動詞である。次の例に示すように、これも「在V」と「V在」の交替が比較的自由である。

(23) a 小李 在大阪 出生（李君は大阪に/で生まれた）
　　b 小李 出生在 大阪
(24) a.小李 在大阪 病死（李君は大阪でなくなった）
　　b.小李 病死在 大阪

上の前置の「在」も後置の「在」も、その主体の所在を表し、明らかに存在動詞から推論を経て派生されたものである。出現と消失の動詞は、上の静的自動詞と同様に、「在」の交替に伴って、命題意味が変化するということが読み取りにくい。ただそれぞれ複雑な語用機能が備えられ、それについては単純な文の構造を超えたテキストの構造においてしか説明出来ない。

3. 共起制約から見た後置の「在」の形態化

第2節で他動詞と自動詞を分け、「在V」と「V在」のパターンの交替から所格標識の機能を果す「在」の文法化を見てきた。「在V」はより一般的であり、非意志動詞以外のすべての動詞と結合できる。従って、前置の「在」で導入される前置詞句が動詞句の外側にある随意的(optional)要素と見なされるのである。これに対して、「V在」は異なる動詞と結合するにつれ、意味機能が多様化され、後置の「在」は接辞のように振る舞いをしている。この節では、「在V」と対比しながら、幾つかの側面から「V在」の共起制約を検討し、後置の「在」の形態化即ち接辞化について考えてみる。

3·1 モダリティとアスペクト

中国語のように、動詞(句)の外側にある迂言法としてのモダリティ標識は、アスペクトと比べ動詞(句)への関与はより間接的であり、動詞と共起する要素もモダリティからの制約を受けないのが普通である。「在」はモダリティの標識がついている動詞句と比較的自由に結合でき、「在V」と「在V」の交替が意味の差をもたらさない場合が多い。

(25) a.小李 在哪 住? (李君はどこに住んでいますか)
　　b.小李 住在 哪?
(26) a.在我家 住 吧 (私の家に泊まろう)[9]
　　b.住在 我家 吧
(27) a.小李 可能 在大阪 住 (李君は大阪に住んでいるかも知れない)
　　b.小李可能住在大阪
(28) a.小李 是在大阪 住 (李君は大阪に住んでいるのだよ)
　　b.小李 是 住在 大阪

(25)と(26)は義務的(deontic)モダリティであり、(27)と(28)は認知的(epistemic)モダリティであり、「在」の位置交替は自由である。2·1節ですでに触れたように、関心の高い目標となる目的語を前方へ移動させると、その顕著性(sailency)により、「V在」のパターンが選択される。対人関係の文脈において、例えば、依頼表現の場合には、「在V」は不向きである。

(29) a.你 把書 放在 卓子上 吧 (机に本を置いて下さい)
　　b.?你 在卓子上 放 書 吧

(29)では目的語の「書」をどう取り扱うかが問題であり、その結果である配置の到達点が新情報として提示され、新情報となる場所を前方へ移動するのは不自然である。しかし、(29)は統語制約というよりも語用的制約によるものであり、モダリティが「在V」と「V在」の交替に関与するのは統語制約以上の問題である(4節を参照)。

これに対して、アスペクトの標識は動詞の内側にある要素として、動詞(句)への関与はより直接的であり、動詞と共起する要素はアスペクトによる制約を受けることが多い。接辞とされる「過」と「着」及び「了」が付けられると後置の「在」は共起できないのである。

(30) a.小李 在大阪 住過 (李君は大阪に住んだことがある)
b.*小李 住過在 大阪
(31) a.小李 在家 待着 (李君は家にいる)
b.*小李 待着在 家
(32) a.小李 在大阪 住了 三年 (李君は大阪に3年住んだ)
b.*小李 住了在 大阪 三年
c.小李 住在了 日本人的家里 (李君は日本人の家に住んでいる)

(32)cのように、「住在了」が成立し、「在」はアスペクトの接辞である「了」よりも主動詞と近い関係にあり、主動詞と一体を構成しており、主動詞の接辞という性格のものである。従って、後置の「在」は前置詞句を後方へ移動させた前置詞という従来の見方が正しくないと判断出来る。もち論アスペクトの標識の後に「在」が付けられないのは、結果の着点という完了表現が更なるアスペクトの表現と抵触するという意味の問題でもあるが、そういう意味機能の対応としての統語機能の相違からも、後置の「在」の形態的特徴が窺える。アスペクト標識以外の動詞に後接する要素との共起制約からも、後置の「在」の接辞化が理解出来る。その後接する要素は次で見る補語又は複合動詞の状況である。

3・2 補語と複合動詞

第3章2節でみたように、補語と複合動詞の後項及び接辞は連続的なものであり、記述の便宜のためにそれらを一括して主動詞の後接する要素とみてよい。この後接要素が出て来る場合は、上で見たアスペクトの状況と同様に、「在V」は成り立つが、「V在」は共起できない。

(33) a.小李 在大阪 住 几年 了? (李君は大阪に何年住んでいるか)
b.*小李 住在 大阪 几年 了?

(34) a.讓 他 重新 在床頭 坐好（彼をベッドにもう一度体を起こさせた）
b.*讓 他 重新 坐好在 床頭
(35) a.在床沿上 落身 坐下（ベッドに腰をおろした）
b.*落身 坐下在 床沿
(36) a.小李 在床上 睡熟 了（李君はベッドでぐっすり眠っている）
b.*小李 睡熟在 床上
(37) a.小李 在紙上 写満了 字（李君は紙に字を一杯書いた）
b.*小李 把字 写満在 紙上

(33)－(37)はそれぞれ主動詞の後に広い意味での結果を表す時間、結果、方向、程度などの補足要素が添えられた文であり、後置の「在」はふさわしくない。これは結果が1つしかないという論理関係による制約であると同時に、後置の「在」が接辞として機能するのであって、他の要素の挿入ができないという統語制約でもある。

対照的に、様態などを示す前接要素の「状語」(連用修飾語)が出る場合、「在V」と「在V」の交替は制限を受けず、意味関係も変わらない。後置の「在」の接辞の性格を裏付けている。

(38) a.小李 仰臥在 床上（李君はベッドに横たわっている）
b.小李 在床上 仰臥 着
(39) a.慢慢地 坐在 台階上（ゆっくりと腰をおろした）
b.在台階上 慢慢地 坐下

3·3 関係節

関係節に内包される所格標識は、自動詞述語文において、「在V」と「V在」の交替が許される場合がある。次の(40)は主語(主題)を構成する関係節であり、(41)は目的語を構成する関係節である。いずれも「在V」と「V在」のその置き換えが可能である。

(40) a.在大阪 住 的 留学生 很多（大阪に住んでいる留学生が多い）
b.住在 大阪的 留学生 很多
(41) a.把 在美国 住 的 中国人 説成 是 特務（アメリカに住んでいる中国人のことをスパイだと言っている）
b.把 住在 美国 的 中国 人 説成 是 特務

しかし、「住」以外の動詞が出て来ると、「在V」と「V在」の交替に疑問符がついてしまうケースが見られる。

(42) a.小李 在大阪 出生 那年･･･（李君が大阪に生まれたその年）

b.?小李出生在大阪那年･･･

(43) a.擺在 我們面前的 困難/任務/問題是･･･（我々の前にある困難/任務/問題は）

b.??在我們面前 擺着的 困難/任務/問題是･･･

(42)も(43)も関係節の構文であり、主題を提示し、それについて述べようとする文脈であるが、「在V」と「V在」の選択に相違点が現れてくる。(42)bは主題についての評言が新しい情報として期待され、内包の「大阪」が新しい情報にならないので、「出生在」は不自然であり、この制約は4節で見る語用的なものである。一方、(43)bは抽象的な事柄を「在V」のパターンで眼前状況として示すことができず、「V在」しか許されない。2節で見ていた「V在」の抽象的な所格標識への機能拡大という特徴がこの関係節においても首尾一貫して保たれているのである。

以上幾つかの側面から「V在」の共起制約を見てきた。アスペクト標識も、補語などの後接要素も、「V在」の間に挿入できないことからして、「V在」は拘束形式(bound form)になってきており、「在」は文法機能を果す接辞であることが分かった。この点については、次で見る「在V」と「V在」の語用機能の食い違いからも理解出来る。

4. 「在V」と「V在」の語用機能

第3節で見ていた「在V」に対する「V在」の統語制約はその意味機能の反映である。意味機能は2節で見た狭い範囲の命題関係だけでなく、語用機能も含められるものである。語用機能は複雑な構造をなしており、上で部分的に見ていた依頼表現などの対人関係機能もその一部である。以下では、テキスト又は情報構造(information structure)の構成にかかわっている「在V」の背景化(backgrounding)機能と「V在」の前景化(foregrounding)機能をめぐってそれぞれの語用機能の相違を考察し、「在」の文法化を語用の側面から分析してみる。[10]

4･1 「在V」の背景化機能

「在」は所格標識の機能をもつ一方、特別の文脈において、場所を背景化するという発話機能を果している。これは場所を主題化(topicalization)する機能及び場所を出発点(starting point)として提示する機能に反映されている。

場所の主題化機能は、場所を取り上げ、それについて説明する文脈を構成する働きのことであり、次の例の通り、2つの場所を対照し主題化するのは、最も典型的である。

(44) 在舞台上演什麼角色、是由導演决定的;在生活中演什麼角色、是由自己選択的(舞台でどんな役を演じるかは、監督が決めるものであり、生活の中でどんな役を演じるかは自分で選択するものである)(離婚:96)

(44)では「在」は省略可能であり、場所の「舞台上」と「生活中」を主題化する必須的要素ではないものの、こういう主題化の文脈において前置の「在」が共起することから、そのテキスト構成の機能が窺える。後で議論するように、後置の「在」はこういう語用機能を持たない。

前置の「在」の主題化機能は統語的にも明らかである。主題の文脈によく出て来る副詞が共起するのがその例である。

(45) 在你晶亮的双眸中甚至閃現着泪光(あなたの明るい両眼には、涙の光も閃いている)(離婚:97)

出現動詞の「閃現」は後置の「在」を取ることも有り得るが、(45)では「甚至」という強意の副詞が用いられ、「涙光」に焦点が当てられ、場所は説明される主題になっているのであると読み取れる。

主題は1つに限らず、幾つかの主題を羅列する場合がある。「も」とも訳される次の「在」は主題を羅列する役割を果している。これは話し手の認知可能な領域内の存在関係の「地」となる場所の表示でもあるので、こういう主題提示の機能は主題化する文脈における「在」の機能の拡大であると言えよう。

(46) 在街上、在車站、在弁公室、在図書館、在食堂、在宿舎、到処都是人(町も、駅も、事務室も、図書館も、食堂も、宿舎も、至るところ人ばかり)(離婚:21)[11]

それから、主題化機能と関連するものであるが、テキストを構成する際、語りの出発点(starting point)を示すのも、前置の「在」の背景化という語用機能の1つである。

(47) 在這次的舞会上、我冲破了世俗観念的束縛、没有半点拘泥、勇敢地站在了你的面前、一次又一次邀你跳舞、抓住每一次机会同你交談(今回のダンスパーティーでは、私は世俗観念の束縛を破り、全くこだわらずに、勇気をもってあなたの前に立ち、何回もあなたを誘い、できる限りのチャンスを利用してあなたと話した)(離婚:94)

(47)では、文頭の「在」はその舞台となっている「舞会」を設定し、1つの場面を展開していく。対照的に、文中の「站在了」の後置の「在」はその出来事の一環を構成する場所しか示さない(下を参照)。(47)と同様に、物語りの始めに、「在一個小村子里(ある小さな村で)、・・・・」又は「在很久很久以前(昔昔大昔)、・・・・」などのように、場所又は時間の背景を設定し、物語を展開していくのも、語りの出発点を提示する機能の現れである。

主題化機能と出発点提示機能は、動詞述語の「在」が話し手の認知領域内の存在関係を表現するという基本的な意味機能が拡大したものである。それは実体の存在関係を前提に、その存在関係でもって出来事の存在関係を理解し捕えるという抽象化又はメタファー化に過ぎないからである。次の例のように、後接する文が前の文と意味的につながっている文脈において、前置の「在」が選ばれ、後置の「在」と対照をなしているが、根本的には「小李」が「大阪」にいるという存在の意味関係が変わっていないのである。

(48) a.在大阪 小李 住了八年、对大阪 非常了解 (大阪には李君は8年間も住んでいるので、大阪のことなら何でも知っている)

b.?小李 住在 大阪 八年、对大阪非常了解

4・2 「V在」の前景化機能

前置の「在」の主題化機能及び出発点提示機能に対して、後置の「在」は前景化の機能をもっている。これはこれまで見てきた結果表現と重ねており、新情報或は評言(comment)を提示するのがその機能の現れである。幾つかの例を見よう。

(48) 她 很瘦、很黄、三十歲的様子、普普通通、放在人海一点也不顕眼、・・・(彼女は痩せていて、顔色も悪い。30才ぐらいで、ごく普通の存在であって、人込みに入っていると全然目立たない、・・・) (離婚:59)

(49) 她的眼睛没盯在天花板上、而是盯在一本書上 (彼女の目は天井ではなく、1冊の本を見詰めた) (離婚:22)

(50) 每天擺在我面前的、不是原稿、不是鉛字、・・・(毎日私の前に並んでいるのは、原稿でもなく、活字でもなく、・・・) (離婚:41)

(51) 雪、落在我們的脚下、盖在我們的肩頭、打在我們的脸上、滴在我們的唇中 (雪は、我々の足元に、肩に、顔に、唇に落ちてきた) (離婚:97)

(48)−(51)は主題を取り上げ、それについて説明したり描写したりする文脈である。関連する情報の1つである場所を提示するのが後置の「在」の役割である。特に、(51)に示すように、場所を義務的要素として取ることのない動詞が、「在」の添加によって、場所補語

を要求する動詞になったという結合価増加(valency-increase)が起こり、前で見ていた後置の「在」の接辞化と合致している。

「V在」の語用機能とつながりのあることだが、後置の「在」を使用しない場所の目的語化という現象が観察される。目的語は新情報を提供する意味では、後置の「在」の新情報を提示するという語用機能と平行するものと考えることができる。

(52) a.住在 城市（都市に住んでいる）
b.住 城市
c.在 城市 住
d.??城市 住
(53) a.我們 走在 社会主義大道上 = (18)a（我々は社会主義の道を歩んでいる）
b.走 社会主義道路

(52)bと(53)bは元の中国語の構造である。(52)aと(53)aから分かるように、意味的に場所目的語の文とあまり変わらないことから見て、後置の「在」は新情報の提示につとめる役割が明らかである。(53)aのように、抽象化された事柄の表現には、前置の「在」が不向きであることから、「V在」は接辞化のプロセスとして、「在」の更なる文法化であると解釈出来る。

ところで、前置の「在」と後置の「在」は語用機能の差がはっきりしない例も観察される。

(54) 賈玲単身住在医院宿舎里、有時没事或電視里有好節目、她就到我家看電視。(賈玲は一人で病院の宿舎に住んでおり、暇な時或は良い番組があるとき、彼女は家にテレビを見に来る)（死）

(54)の「住在医院宿舎里」は「在医院宿舎里住」と言い換え、何ら相違点が見付からない。これは前後の文脈の意味的関連性が薄いので、場所の提示も中立的なものになってしまったからである。ところが、次の例に示すように、情報の流れとして事柄の成り行きを順次に述べる場合、「V在」のパターンが選ばれる。

(55) 他用両只手/抱着我那只手/放在胸前/孩子一様心満意足地睡了（彼は両手で私の手をつかんで胸において子供のように満足そうに眠ってしまった）（死）
(56) 我説着/走過去/把她从床上抱起来、摟在懐里（私はそう言いながら向こうへいって彼女をベッドから抱き上げ、懐に抱き締めた）（死）

(57) 夫妻同心協力、一致対外、站在一个戦壕里、這家庭的空気不就好多了吗（夫婦が心を合わせ、一致協力し行動を取り、同じ塹壕に立っているならば、家庭の雰囲気が良くなるのではないでしょうか）（離婚:44）

(57)に特に注目されたい。「站在一個戦壕里」はメタファーであり、抽象的な立場という意味で、前置の「在」に置き換えられない。これは2・2節の(18)aの「走在社会主義大道」と3・3節の(43)aの「擺在我們面前的困難」と同質のものであり、抽象化と更なる文法化の対応を示す典型的な例である。

次に挙げるのは、同じ「坐」という動詞で構成されたテキストであるが、「在V」と「V在」の交替により、場所の捕え方が異なってくる。

(58) a.男人遂過一杯茶、転身坐在対面那唯一的黒木椅子上（男はお茶を手渡してくれて、身を翻すと向こうのただ1つの黒い椅子に座った）（離婚:28）

b.我把盛着菜的飯盒擺好、盛了飯拿着箸子在飯卓旁坐下（私はおかずのはいった入れ物を並べ、ご飯を盛って、お箸をとって、テーブルのよこに座った)(死)

(58)aは幾つかの動作で構成される場面(scene)であり、つながっている一環の「座る」は時間的間隔を置かずに遂行し、「在」で導入される場所も結果としての新出する着点となる。これに対して、(58)bも1つのつながっている状況を描いているが、前置の「在」は場所をマークするだけでなく、「我」と「飯卓」の距離関係が示され、「飯卓」が目指した目標になったり、「座った」までの時間的間隔が置かれたりするというように、多くの意味が解釈できる。これまで見てきたように、後置の「在」よりも前置の「在」が動詞の特徴を保持し、動詞から前置詞へそして接辞へというプロセスの方向性という文法化の一般的な特性が窺える。

5. 日英語との関連で

「在」は動詞述語の機能と文法標識の機能が併存(coexist)している。このような中国語と違い、日本語と英語の所格標識の統語範疇は固定している。日本語においては、所格標識の「で」と「に」の役割が分担され、英語においては、前置詞句の位置関係により、意味の関連性が変わったり主題化が生じたりする。これらは「在V」と「V在」の交替で機能する「在」と性質が違うものと考えられる。これまで分析してきた「在」の文法化の特性を立証するために、日英語の所格標識の状況を少しばかり見よう。

5・1 「で」と「に」の役割分担

「で」と「に」の標識機能が複雑であり、所格標識の場合は、一般的に「に」は「固体」の位置を示し、「で」は「状況」の位置を示すと、その役割の分担について説明されている(中右 1995)。出来事(event)の参与者を示す主語又は目的語の関連性から言うと、「固体」の「に」も状況の「で」も関与するので、上で見て来た「在」とは事情が違う。ただ他動詞述語文においては、「で」が主語関連であり、「に」が目的語関連であるという特徴が顕著である。[12)]

(59) a.太郎は部屋で音楽を聞いている
　　b.太郎は黒板に字を書く
　　c.??太郎は黒板で字を書く
(60) a.太郎が東京でマンションを買う
　　b.太郎が東京にマンションを買う

(59)aは「太郎」の所在を言い、(59)bは「字」の所在を言うので、「で」が主体関連の所格標識として機能し、「に」は目的語関連の着点標識として機能しており、役割が分担されている。(60)のように、「で」と「に」の使い分けにより、同一の述語動詞が用いられていても、主語関連か目的語関連かがはっきりしており、文法標識の機能は述語動詞の意味によらない。統語範疇の固定化というのは、こういうことも意味するのである。従って、(59)cに示すように、中国語において主語関連も目的語関連も解釈可能な構文(例(9))は、日本語において目的語関連の解釈では成り立たないのである。

ところで、自動詞述語文になると、事情が複雑になってくる。(61)のような動的自動詞の場合は、位置、経路、着点に応じて、それぞれ「で」、「を」、「に」でもって場所をマークし、役割分担がはっきりする一方、(62)と(63)のように、静的自動詞又は出現動詞の一部は、「で」と「に」が交替され、その意味機能が「在V」と「V在」の交替と同じものかどうかが問題である。

(61) a.太郎が机の上で踊っている
　　b.太郎が道を歩いている
　　c.太郎が井戸に落ちた
(62) a.太郎がベッドに寝ている
　　b.太郎がベッドで寝ている
(63) a.太郎が旧家に生まれる
　　b.太郎が大連で生まれる

役割分担がはっきりするものである以上、(62)と(63)の「で」と「に」の交替に伴って、意

味解釈が変わるはずであり、中国語のように、テキスト構成などの語用機能から一歩離れるものと予想出来る。中右(1995)の分析を引用し、中国語の状況と比べてみよう。

中右によると、「で」と「に」を両方取る自動詞の場合は、「で」は物理的で偶然的(accidental)な場所の標識であるのに対して、「に」は抽象的で不可欠(essential)な場所の標識であって、従って、次の(64)cのように場所と必然的な関連性のない物理的状況では「で」しか選択されないという。

(64) a.福沢諭吉は下級武士の家に生まれた
b.福沢諭吉は下級武士の家で生まれた
c.太郎が大学病院で/*に生まれた

(65) a.福沢諭吉出生在下級武士家庭里
b.福沢諭吉在(一個)下級武士家庭里出生
c.小李在大学医院里出生
d.小李出生在大学医院里

ところが、逆に(65)aは、(64)aのように「福沢諭吉」と「下級武士の家」の必然性が読み取れず、(65)cとdの通り、必然的な場所か否かは関係せず、語用機能を考慮しない限り、前置の「在」も後置の「在」も共起でき、「で」と「に」とは本質的に異なっており、1対1の対応関係をもたない。

他動詞述語文の状況を合わせてまとめて言うと、「で」と「に」は固定している範疇として機能しており、その交替は内在的な論理関係に束縛され、「在V」と「V在」のような共起制約もなければ、語用機能を動機付けに分化しつつあるものでもない。逆に言うと、「在」は範疇的に固定せずに、「在V」と「V在」の交替に示すように、統語的に幾分制約を受けながらも、根本的に語用機能に制約されるものであり、中国語は「語用指向の言語」そして「文法化言語」であるという考え方を裏付けている(第3章1・5節)。

5・2 英語の倒置法

英語では、(66)aのように、動詞の意味により、所格標識は主語関連か目的語関連かはっきり判断出来る場合がある。(66)aではmetは主語と目的語の双方の存在を前提に成立する行為なので、on a busがその行為の参与者の同一の場所になるのは当然のことである。中国語の「我在汽車上遇見了小李」も同じケースである。一方、(66)bのように、意味の関連性の親疎関係と語順の位置関係が対応しており、on a busが一般的に目的語のJohnの所在であると理解される。(67)と(68)も語順と意味の関連性と対応する例である(Quirk et al., 1985)。

(66) a.I met John on a bus.

b.I saw John on a bus.(p.524)

(67) a.She saw my brother in the garden.

b.In the garden, she saw my brother.

(68) a.I heard a noise in the bathroom.

b.In the bathroom, I heard a noise.(p.513)

(69) a.我 在院子 看見 我哥哥 了

b.我 在浴室 聴見 了 噪音

英語とは異なり、「在」は主体関連の性格により、(69)のように主語の所在を示していると思われる。後置の「在」は目的語関連の所格標識として機能し、後置の前置詞句に似ているようだが、しかし、それは配置という意味の他動詞に限られ、英語のような一般性がない。従って、後置の「在」は目的語関連の場合でも、(67)と(68)のような文は成り立たない。ここからも、「在」が機能化しつつありながらも、統語範疇が固定していないという特徴が窺える。

ところで、(67)bと(68)bのような主語関連の前置詞句は場所の主題化として理解しやすい。これは前置詞句の前方移動という倒置法(inversion)と見なされているが、中国語の前置の「在」とは異なるものと思われる。

(70) In your house who does the cooking ? (Halliday,1985:48)

(71) a.I was waiting on the shore.

b.On the shore I was waiting all day.(p.143)

前置詞句が動詞句の後にくるのは、英語の基本的な語順である。(70)のin your houseはテーマ(theme)であり、これは、what is at the moment uppermost in the speaker's mind tends to be the first expressedという語用的動機付けによるものである(第2章4・3節を参照)。(71)bでは前置詞句が主題提示の機能を果しているのは、all dayという付加説明からも窺える。上の例を中国語に直してみると、次のようになる。

(72) 在你們家 誰 做 飯?

(73) a.??我 一直 等在 海辺

cf.我 一直 在海辺 等

b.在海辺 我 一直 等了 一整天

(72)から見ると、中国語は英語に似ているという印象を受けるが、(73)aが示すように、後置の「在」は「等」と共起できず、前置詞句を構成するものでなく、範疇的にonとは同質のものではない。そして、(73)bも(71)bと対応するように見えるが、しかし、(73)bの「在」は後置の「在」の前方移動でなく、述語動詞から推論したものとして、現実的にも想像的にも時間的に先立つ状況であれば、「在」でその場所を導入することができる。従って、次の例のように、英語では前置詞句の前方移動が不自然な文でも、中国語では受け入れられる。

(74) a.A violent demonstration took place in the main square.
b.?In the main square took place a violent demonstration.
(Liven,1993:93)

(75) a.一場 暴力示威 発生在 主広場
b.在主広場 発生了 一場 暴力示威.

(74)bに対して、(75)bが成立するのは、4・1節で分析してみたように、実体の存在関係を示す「在」でもって出来事の存在関係を捕え、理解するというメタファーのプロセスが伴われるからである。言い換えると、所格標識の「在」は述語動詞とつながっているものであり、inのような固定した文法標識の範疇ではない。これは「に」と「で」との関連付けで得た結論と同じことである。

6. おわりに

伝統的な記述文法において、「在」を取り扱うものが多かった。そのほとんどは、「在」が行為の場所を表すというおおざっぱな記述にとどまり、[13]「知其然、而不知其所以然」(そうであることを知っているが、なぜそうなのか知らない)という結果になり、その「知其然」にも疑問を抱かずにはいられない。形式主義のアプローチを模倣し、生成文法の変換関係でもって、「在」の標識機能を説明しようとする傾向が見られるが、納得の行く解釈は得られない。次に挙げる深層構造と表層構造の変換関係による「在」の説明のモデルは形式主義のアプローチの代表である。

(76) D-structure: { N agent } + { V } + { 在・N }
S-structure: 1) N agent + 在・N + V
↓
2) 在・N + N agent + V
↓
3) N agent + V + 在・N (李臨定 1988:33)[14]

(76)のモデルは言語事実の説明の簡明を図って、言語構造を規定しながら提示したものであり、文法化研究から見ると、幾つかの問題が残っている。

まず、D-structureを設定する根拠が不明である。「V」と「在・N」の順序関係は何によってそう認定できるかが問題の中心である。もしこのD-structureは「在」が古典語の「於」の代用であるという通説によるのならば、[15]、S-structureの3)に示すように、3)が1)から転換したものであるという説明と矛盾してしまう。本研究で指摘したように、S-structureの1)の「在」は述語動詞の「在」が推論のプロセスを経て、所在の場所から行為の場所の標識へシフトされたものである。行為の場所とは不明確な概念であり、本質的には行為の参与者を示す主語か目的語かの所在である。前置の「在」が主体関連の所格標識が原型であるということが存在動詞の「在」がその元(source)となる語彙項目であることを示唆している。

それから、いわゆるS-structureの1)、2)、3)の意味機能の相違について、(76)のモデルから何の情報も求められない。これまでの分析の通り、この3つの変換は恣意的なものでなく、複雑な意味機能を動機付けに生起するものである。異なる構文パターンの交替に伴い、「在」は複雑な語用機能を果しながら、所格標識の機能を果すのである。その動機付けを追究しない限り、「在」はなぜ所格標識の機能が付与されたのかはさておき、どのように機能するかの説明も充分なものにならない。

さらに、意味構造と統語構造が部分的に対応するものである以上、統語構造の特徴については、複雑な意味機能をめぐって分析しなければならない。にもかかわらず、意味機能の分析が欠けているので、統語構造の分析が局部に限られ、統語単位の範疇も一律化され、連続性のある範疇への認識が不十分であり、統語範疇という基本的な問題の解決は出来ていない。

以上の分析に示すように、文法化の最中にある「在」は述語動詞として機能する一方、個別の文脈においてそれなりの標識機能を果しながらも、結合する要素に頼って意味解釈できるので範疇的に固定していない。日本語と英語と比べて見るとこの点がはっきりしている。結論を繰り返し言うと、「在」は範疇化と形態化に向かいつつあり、範疇化は前置の「在」の前置詞化であり、形態化は後置の「在」の接辞化である(付録1・2を参照)。

我々は意味機能を中心に、「在」の文法標識の機能を分析してきたが、述語動詞と区別できる形式的な特徴にはほとんど触れていない。文法化理論において、語彙項目から文法形式へのシフトをdecategorializationと呼び、構造上幾つかの側面から証明できるとされる(Hopper,1991)。中国語のような孤立言語においても、例えば、文法形式がほとんど「軽声」で読まれるという音韻的特徴も有するが、しかし、それは限られるものであり、範疇転換の形式的な記し(token)が少ない。これは他の空間動詞の文法化にも見られる共通点であり、中国語の類型的特性の表れでもあると言える(第9章を参照)。

注:

1) Halliday(1985:112-)によると、関係的プロセス(relational process)は、BE, BE AT, HAVEなどで表現されるものという。『分類語彙表』(1964)において、「用の類」の「抽象的関係」のところには数十項目を分け、動詞をリストアップしているが、「存在」は出現、成立、発生、仕上げ、残存・消滅、保有、除去の上位概念として取り扱っている(120－121頁)。「存在動詞」はより抽象的でより関係的であると言えよう。

2) 項構造は絶対的なものではない。「老師健在」のような状態描写や、「他不在了(彼がなくなった)」のような否定表現などでは、「在」の状態に関する説明になるので、「在」は1項動詞として働くことがある。日本語の「先生は元気でいる」と「彼はもういなくなる」の「いる」についても、同じことが言える。

3) 「図」と「地」の概念については、Talmy(1983)とLangacker(1987)を参照している。「在」と似ている動詞は「有」がある。「在」とは反対に、「有」は「地」を捕え、「地」から「図」への視点の移行が伴われるものである。場所は「図」の行為又は状況の空間的条件を表示するものであり、「図」を取り上げる「在」の所格標識への文法化は実に「有」と対立する認知プロセスの反映であるとも言える。

4) 伝統的な記述文法では、例えば、呂等(1980)やLi & Thompson(1981)などが、自他動詞を区別せず、「在」の意味機能を描写しているが、以下の分析の通り、「在」の標識機能の動機付けを求めるために、2つを分ける必要がある。

5) Li & Thomposon(1978:229)が「他在卓子上画」を、He is drawing at the tableと訳し、「他画在卓子上」を、He is drawing (something) on the tableと訳しているが、前の文に主語の関連性しか認めないのが受け入れがたい。

6) 本研究において動詞の分類は基本的にLi & Thompson(1981:398-406)が分けた、変位(displacement)、姿勢(posture)、出現(appearing)、配置(placement)の4つを参考にしている。ただその構成メンバーを議論する余地があり、以下の分析に示すように、その下位分類の必要もある。

7) 李(1988:13)が主語関連の「我在岸上釣魚(私は岸で(から)魚を釣る)」と、目的語関連の「我在桶里捉魚(私は桶の魚を捕まえる)」と、主語・目的語関連の「我在河里摸魚(私は川で魚をてさぐりで捕まえる)」という例を挙げ、「在」を分析しているが、3つを支配可能な領域内の範囲で総括できる。

8) Li & Thompson(1981)が、With verbs of posture, both preverbal and postverbal locative phrases can be used. ....., there is essentially no difference between the meanings of the preverbal and postverbal locative phrases with verbs of this classと述べているが(p.401)、そのmeaningには語用的意味が入っていない。言語事実からして、語用的意味(語用機能)を考慮に入れるべきである。

9) 日本語から考えると、「住」は「住む」と「泊まる」の2つとして解釈出来る。統語的に似通った振る舞いをするので、ここで特に2つを区別しない。

10) テキスト構成機能について主にHalliday(1985)を参照し、情報構造についての理解は主にFoley & Valin(1985)及びFoley(1994)を参照している。

11) new information need not (although it usually does) correspond only to the focused constituentとFoley(1994:1682)が述べているように、主題が新情報を提供する場合があり、この羅列された主題は新情報と理解出来る。

12) 歴史的に「で」は「にありて」などから「にて」へのプロセスを経て範疇化されたものであり(『広辞苑(第4版)』)、「在」と類似するところがある。そして、対照分析では「在V」は「で」と、「V在」は「に」と対応する場合が多いと分析している(水野 1986)。

13) 一般の文法参考書或は中国語に関する概説書では、例えば、Norman,J(1988:162)が、「在」は、used to indicate where an action takes placeというような記述が多い。

14) このモデルを試しに英語に還元してみたが、NP、VPと示す生成文法とは違い、N、Vで示すように、これは徹底した生成文法の枠組でもない。D-structureとS-structureはそれぞれ「基礎模式」と「使用模式」と呼んでいる。そして提示された「N agent + V + N patient + N」(例:父親先去了留下他在那里(父が先に立ち、彼をそこに残した)というモデルは本研究では扱っていないので、省くことにした。

15) 王力(1958:483)とLi(1975)は「在」は古典語の「於」の代用であるといった主旨の説明をしているが、S+VP+PPという「於」の語順がなぜS+PP+VPという「在」の原型的な語順になるかの動機付けは説明されていない。もち論これはさらなる通時的研究を否定することではない。

第5章　方向動詞の文法化

0. はじめに

方向動詞は方向(direction)を補語に取る関係的プロセスの動詞であり、「向[xiàng]」、「朝[cháo]」、「往[wǎng]」の3つで構成される。[1] 存在動詞から所格標識への文法化と同様に、方向動詞から方向指示としての向格標識(allative marker)への文法化は、空間動詞の文法化体系を形作る重要な部分である。というのは、第4章で分析した場所関係と共に、方向関係が空間関係を構成する基本的な意味関係だからである。実際、この2つは補い合う関係にあり、統語的に交替(alternation)現象も観察され、場所関係と方向関係を1つにまとめ議論されることもある(Schiller,1991;Lord,1993)。場所と同様に、方向は抽象度の高い意味範疇であり、結合される述語動詞と結ばれる意味関係により、方向の意味がいろいろと解釈され、方向動詞の標識機能も拡大されていく。

中国語の方向動詞の文法化は孤立した現象ではない。日本語の「向かう」と「向ける」も動詞述語として機能する一方、連動文の文脈において方向関係を示している。そのプロセスは、中国語の方向動詞の文法化と部分的に類似しており、方向動詞の文法化の立証になる。[2] 第5章では、「向」を中心に方向動詞の文法化を考察する。第1節では、動詞の「向」の意味・統語の構造を分析し、文法化する内在的条件を探りだす。第2節では、移動動詞などの方向指示へのプロセスをたどりながら、向格標識の基本的な機能を記述する。第3節では、方向指示の拡大解釈をめぐって、対象と目標の指示機能を述べると同時に、機能拡大の動機付けを説明する。第4節では、方向動詞の更なる文法化とされる接辞化を分析する。第5節では、「むかう」と「むける」を検討するが、動詞の構造を分析する上で、方向指示への機能拡大のプロセスを調べる。第6節では、中日語のプロセスのそれぞれの特徴をまとめ、普遍的に観察される向格標識の機能拡大と関連付けながら、方向動詞の文法化の特性を分析する。

1. 動詞の分析

「向」は「AとBが相対する」という意味を表し、2つの参与者で構成される2項動詞として、次のような構造をなしている。

(1) NP1 + 向 + NP2

統語的に、NP1は主語であり、NP2は補語である。意味的には、それぞれ存在物と方向参照(物)であって、「向」はある方向という空間状況の元でのNP1の存在を表し、第4章で分析した存在動詞の「在」と同様に、関係的プロセスを表す状態動詞である。

(2) 他 面向 着/*了/*過 我 (彼は僕に向かっている)

(3) a.?他 向着 我 [3]

b.?教室 向着 図書館 (教室は図書館に向かっている)

アスペクト標識の「着」しか付けられないのは、「向」が状態動詞であることを示している。ところが、例(2)から「面」を削除し、(3)のように単に人間と人間、あるいは存在物と存在物だけにすると、(1)のパターンはとれなくなる。(3)のような物理的状況を表す作例をインフォーマントに見せると、「意味が不明だ」というのが一般的な反応である。ところが、「向」の代わりに、その類義語とされる「朝」を用いると容認可能になる。つまり、「向」は(1)のような構造をもつにもかかわらず、それだけでは具体的な状況を示すことができないということである。例(2)のように、熟語化された「面向」でもってはじめて、人間どうしが相対する状況を表現することができる。実際のデータには、「向」は単独に使われる例が殆どなく、意味的に希薄で、述語の機能が弱まっている動詞といえる。[4]

述語機能が弱いばかりでなく、「向」はNP1とNP2の換喩(metonymy)の用法によって、意味的に抽象化している。(4)aは物理的状況も考えられるが、(4)cと同じく、「文革時代」に生まれた決まり文句であり、NP2の「太陽」が「毛沢東」を指し、「向」は物理的状況から心理的状況の描写に変わったメタファーの表現になっている。

(4) a.朶朶葵花 向 太陽 (向日葵が皆太陽に向かっている)

b.他的心 執着地 向着 生活 (彼は生活を愛している) (灯)

c.世界人民 心向 紅太陽 (世界の人々が赤い太陽を愛している) (灯)

(4)bとcでは「心向」は「愛する」と解釈され、「向」は意味的に抽象化されている。「向」の意味的抽象化は動詞述語だけでなく、語構成にも現れる。「(天天)向上」、「(欣欣)向栄」、「向学」などがその例である。類義語とされる「往」と「朝」にはこのような意味的抽象化は起こっていない(後述)。

このように、状態動詞の「向」は意味的に抽象化され、統語的には述語の機能が弱化している。以下の分析に示すように、「向」は連動文の文脈において、後項述語で述べる出来事の方向関係を示す役割を果す一方、意味の抽象化に伴って、更なる抽象的な関係標識の役割を果すようになっていく。

2. 向格標識への文法化

(1)に示したように、「向」は参与者の方向関係という関係的プロセスを表し、具体的な作用関係を示していない。コミュニケーションの必要に応じて、その関係的プロセスに付随される状況を表すため、文法化の経路(pathway)の1つであるとされる動詞述語の連結化(serialization)即ち連動文により、「向」は後接する動詞述語の方向などを指示し、向格標識の役割を果すようになってくる。このプロセスの根本的な動機付けは、「どこかにいれば、何かをする」という「在」の推論と同様に、「どこかに或は誰かに向かえば、何かをする」という推論にあると思われる。

向格標識は一般的に"toward"又は"to"のような標識を指し、方向指示が原型的な機能である。方向指示の場合は、方向という意味の領域(domain)から離れておらず、使用頻度又は母国語者の内省からして、「向」は第4章で触れた姿勢(posture)動詞と変位(displacement)を表す移動動詞の方向をマークするのがその機能の原型(prototype)である。[5)]

例(2)の「他面向我」では、参与者が静止した状態にあり、その作用関係を表すための動詞述語の連結化に伴って、「向」は(5)aのように、方向指示になる。「向」の標識機能は表層的に具体的な文脈において共演する動詞述語に付与されるように受け止められるが、連結化は推論に動機付けられるものである。

(5) a.他 (面)向 我 站着 (彼は私に向かって立っている)
b.他 向東 走 来/去 (彼は東に向かって歩いて来た/いった)
c.部隊 向東方 撤退 (部隊は東のほうへ向かって撤退した) (夢)

(5)aは姿勢動詞の例であり、(5)bは移動動詞の例である。移動動詞の場合、文末に「去」と「来」という直示的方向補語を付けることができる。これは、「向」でその方向がマークされる出来事が、起点と着点と両方かかわっているのみならず、結果として、話者(観察者)との遠近の距離関係も示されることを意味する。言い換えると、「向」の方向指示には視点が移動可能という双方向性があるということである。(5)cも移動動詞の例であるが、複合動詞であって、「去」と「来」のどちらも添えられない。複合動詞の場合は、音韻的、文体的要因も考えられるが、焦点が移動のプロセス自体に当てられ、結果的な「来」と「去」は共演できないのであろう。(5)と対応する動詞として、次のようなものが挙げられる。

(6) a.坐 跪 蹲 躺 趴
b.奔 飛 爬 跑 扑
c.攀登 沖鋒 挺進

方向指示の役割を果す「向」の類義語として、「往」がある。「向」と比べると、「往」は統語的に制約されることが分かる。

(7) a.他 往東辺 走去/*来（彼は東のほうへ歩いていった）
b.*他 往東辺 站着（彼は東の方へ立っている）
b'他 往東 站（彼は東のほうに立つ）
c.往東 撤退（東のほうへ撤退する）

(7)aと(7)cのごとく、「往」も移動動詞の方向を示すが、方向補語の「来」とは共起できない。これは、動詞としての「往」(下の例(8)を参照)には「外向き」(outward)という方向性が備えられ、「内向き」(inward)の「来」とは逆方向だからである。[6] 例(2)にもどるが、「他面向我(彼は私に向かっている)」を、「我面向他(私は彼にむかっている)」と言うことができ、参与者の「我」と「他」は互換可能であり、意味関係は変わっていない。これは「向」に双方向性があることを示している。これに対して、「往」はNP1からNP2へという一方向性しか持たないのである。(7)bが成立しないのは、「站着」が状態として、「在」による場所指示を要求するが、一方向性で着点指示の「往」とは意味的に矛盾するからである。(7)b'のように、その方向を目指して、これから移動しようとする状況になると成立する。これらの特徴は動詞の「往」と合致している。

(8) 我 没管、還 往前（私は気にせずに、先へ歩いていく）（灯）
(9) a.*往/向他 走去（彼へ歩いて行く）
b.往他那児 走去（彼の所へ歩いて行く）

(8)では「往」は動詞述語として用いられ、その方向補語は「上、下、前、後、里、外、左、右」のような方位詞に制限される。場所性のない実体名詞或は人間名詞は共起できない。この特徴は(9)の方向指示の例に反映されている。(9)bに示すように、「那児」をつけて、「他」を場所化してはじめて、(8)aの不適格文を修正できるのである。逆に、「向」を用いると、(9)aの場合でも適格文になる。

一方、「朝」も方向指示として用いられ、例(5)の「向」を代用でき、上で見た「往」のような制約はない。

(10) a.大模大様地 朝檐下 飛来（大袈裟に屋根の下のほうへ飛んで来た）（鼻）
b.他 朝東 站着（彼は東に向かって立っている）
c.朝女人 走去（女のほうへ歩いていく）（灯）

上の例を見る限りでは、「朝」は方向を示す場合は、「向」と同じで、直示的方向補語の「来」と「去」も共演出来るし、状態述語の方向指示にもなるし、人間名詞も方向補語になるである。しかし、動詞として機能する「朝」の状況を調べると、その相違点が表れてくる。

(11) a.他 朝着 我 (=3a) (彼は私に向かっている)
b.教室 朝着 図書館 (=3b) (教室は図書館に向かっている)

「朝」は「着」しか付かないという点では、「向」と同様に、状態動詞である。しかし、物理的で同質のものが互いに方向補語になることが、「朝」と「向」の違うところである。「向」とは異なり、「朝」は意味的には具体性をもち、統語的には完全な述語として機能するということである。逆に、「朝」には「向」のような抽象化された用法はない。

(12) *世界人民 心朝 紅太陽 (=(4)c) (世界人民は赤い太陽に向かっている)

「朝」の具体性という意味特徴は、文法化にあたって、「向」と対立する動機付けの1つであると考えられる(後述)。

「向」、「往」、「朝」は共に方向を指示し、類義語の意味関係にある。方向補語が方位詞という物理的状況では、その互換性が強く、同じ文脈では3つが交替する例が観察される。

(13) a.今天 从南 向北 跑,明天 又 由東 往西 奔 (今日南から北へ、明日また東から西へ) (灯)
b.一会 朝前 走、一会 向後 退 (前へ進んだり、後へ下がったり)

同じ状況を意味のつながりのある要素でもって、同一の文脈において表現するのは、重複を避けるという修辞法の語用的効果があるものであり、文法化も部分的にそれに動機付けられるものである。そして、「向」、「朝」、「往」は次のような換喩表現においては、(15)のような慣用句化されたものを除いて、置き換えできる。

(14) 覚得自己往/朝/向世界的深処走(自分が世界の深いところへ進む気がする)(灯)
(15) 明知山有虎、偏向虎山行 (山に虎がいると知りながらも、虎のいる山へ行く)

(14)では、「深処」のような場所語でもって、ある状態を指すが、換喩的なものであって、方向補語の性格は変わっていない。逆に、ある状態を目指す抽象的な方向、即ち目標とし

ところで、「向」の目標指示には「往」も「朝」も代用出来ない例がある。

(36) a.向銭看（お金に目を向ける）
b.向他看齊（彼に見習う）

(36)aは拝金主義の風潮をメタファー的に言うものであり、「向前(銭)[qián]看」の「音韻の類推」だと思われるが、[9]人間行為の領域という抽象的な空間状況の中の1つ(「金儲け」)を一点張りの目標として、取り立てるという問題解決(problem solving)のために、このメタファーが生まれたのである。(36)bは物理的状況では、「他」を目標(基準)に列を整えるという意味を表すが、「他」をモデル(抽象的目標)にして、行動を取るというメタファーとして解釈され、「看齊」は「見習う」という意味になり、次の「学」と意味的につながっている。

一方、「学」は情報の獲得という意味で、交流動詞に似ており、「問」などのような方向性のある「内向き」の動詞である。そのプロセス自体は抽象的であって、具体的な「往」と「朝」が「学」の源泉格の標識にならない。

(37) a*往他学習
b??朝他学習
(38) a.向雷鋒学習（雷鋒に学ぶ）
a'.*向精神学習（精神に学ぶ）
b.向日本学習（日本に学ぶ）
b'.*向技術学習（技術に学ぶ）

「往」が着点しか示さないので、(37)aのような文はもち論成立しない。(37)bのように、「朝」も成立しがたい。何故だろう。交流動詞の状況と同様に、これは行為の抽象度が高いほど、「朝」が結びにくくなり、「学」の抽象性と「朝」の具体性が会い容れないからである。逆に、「向」は(38)のように自然である。動詞としての「向」の例を見て分かるように、方向参照(物)は方位か人間である。「学」の主体は人間である以上、(38)aのように、その目標も人間でなければならない。(38)bの「日本」は人間の組織で、人間としてとらえられている。これに対して、(38)a'とb'が成立しないのは、「学」の主体である人間からみれば、それらが対等の「目標」にならないからである。「精神」も「技術」もそれぞれの所属物であって、「雷鋒」と「精神」、「日本」と「技術」は、全体と部分(whole-part)の関係を構成している。この全体と部分の関係は下の例のように、「向」でもって全体を目標として示すのと、「向」を抜きにして全体と部分を1つの目的語に一括して表現するのと、2つの構文パターンがある。

(39) a.向雷鋒学習勤倹節約的精神（雷鋒から節約の精神を学ぶ）
a'学習雷鋒勤倹節約的精神（雷鋒の節約の精神を学ぶ）
b.向日本学習先進的技術（日本から進んだ技術を習う）
b'学習日本先進的技術（日本の進んだ技術を習う）
c.向雷鋒同志学習（雷鋒同志に学ぼう）（毛沢東）

(39)a'とb'では、「精神」と「技術」を新情報(焦点)として伝えており、旧情報の「雷鋒」と「日本」を取り立てることはない。つまり、「向」による目標指示を抜かすと、全体としての「雷鋒」と「日本」に対する話者の関心を示さない。これに対して、(39)aとbでは、「向」の目標指示により、全体としての「雷鋒」と「日本」を目的語から取り出して、全体と部分の両方を平均的に捉え、中立的な表現になり、そのどちらを強意するかは具体的な状況からしか判断できない。ところが、(39)cの通り、部分としての「精神」を切り捨て、全体としての「雷鋒」だけを取り立てるパターンもある。実際、「学習雷鋒」というように、全体の「雷鋒」を直接目的語にする表現も可能である。そういう場合には、全体を特に取り上げることがなく、一般的な中立叙述になる。例えば、「学習雷鋒小組(雷鋒を学ぶグループ)」という関係節において、「学習雷鋒」は「小組」に対する内容の解釈に過ぎず、「学習雷鋒」に対して話者の主観的な態度は示していない。これに対して、「向雷鋒学習」は「向雷鋒学習小組」にならないように、「向雷鋒」と一旦取り立てると、どうするかのメッセージを伝えなければならない。そのメッセージが呼び掛けやスローガンの形で強く訴えられる場合に、(39)cの「向雷鋒同志学習」というように生まれて来たのである。即ち、(39)cの表現パターンの出現は、話者の表現意図というコミュニケーションの需要に起因するものであると考えられる。しかも、話者の念頭においては、目標としての「雷鋒」が先立っているので、目標指示も前置の語順でしかならない(第2章4・3節(42)を参照)。ただし、「把」のような目的語前置のパターンと異なるのは、「向」は目標だけを問題としており、働き掛けの結果に言及しない点である。例(32)と(33)の「往」と「朝」も同じことであり、そこの「看」の後に結果補語の「清楚(はっきり)」などを付けることができない。逆に、働き掛けの結果を常に問題とする「把」は、「把雷鋒学習」にならないのである。

4. 方向動詞の接辞化

従来、動詞の後に置かれる「向」は、上で検討した前置の「向」と同じ統語範疇として「介詞」とされる。[10] しかし、「走向勝利(勝利へ向かう)」は、「走向/勝利」の構造をなすと考えられ(後述)、「向」は動詞の付属形式である以上、派生的接辞と認めるべきである。[11] 2節と3節で検討した前置詞化に対して、この「向」は「在」と同じような接辞化(affixation)のプロセスと見なしてよい。以下では、上の前置詞の機能と対比しながら、接辞としての「向」

の振る舞いを中心に、方向動詞の文法化のもう1つの側面を調べてみる。

「向」の接辞化には構文的に2つの経路があると考えられる。1つは、(40)のようにある行為の結果を表すため、「向」がその連動文の後接する動詞述語として機能する場合である。もう1つは、(40)と関連して、目的語を取り立てる「把」構文と共に、プロセスと結果を一体化させた、動詞句から複合動詞への緊縮化(reduction)である。

(40) 上半部分傾斜/向外（上半身は傾け外側に向かっている）
(41) 伸出頭向着窓外（頭を出して窓の外側へ向かっている）
　　> 把頭伸向窓外（頭を窓の外側へ出している）

連結化及び緊縮化はこれまでの分析の通り、「向」の意味特徴と話者の状況把握の仕方に動機付けられるものである。

これまで説明したように、「往」、「朝」、「向」は、それぞれ文法化の度合があり、均一的なものではない。接辞化の場合も同じである。まず「往」の例をみよう。

(42) 開往北京的列車（北京ゆきの列車）

「開」は方向性のない2項目動詞であり、「往」の付加によって、着点を明示することが要求され、結合価の変更をもたらすということにより、「往」は接辞と見て取れる。「往」と結合する動詞は、「去往」、「通往」、「飛往」などのように、限られたもので、接辞化が非開放的だという文法化の一般的な傾向を表している。

一方、「朝」は「向」が動詞述語として用いられる(40)と(41)のような構文が成立しない。つまり、「朝」は結果の表現が出来ず、連動文の後項述語にならないのである。そういう接辞化の経路がないので、結果表現の接辞として機能することが出来ないのも当然のことである。[12]

(43) *走朝 奔朝 飛朝 駛朝 ....

ところで、前置詞化の「向」は、すべての動詞の後に添え、接辞化することはない。動詞の意味内容によって、方向性のない結果、或は結果を問題にするか否かの対立があるからである。姿勢動詞や交流動詞、二重目的語動詞や「学」などは接辞の「向」と共起出来ない。

(44) a.*他站向我（彼は私へ立っている）
　　b.*他説向我（彼は私へ話している）
　　c.*他売向我（彼は私へ売っている）

d.*我們学向雷鋒（我々は雷鋒へ学ぶ）

既に指摘したように、(44)はそれぞれ方向、対象、目標を、時間的に先立つ前提要素として、「向」で導く状況を表しており、結果とは関係しない。これも事柄の時間的順序と統語構造の一致を意味する類像性という中国語の類型的特徴の表れである。

前置詞の「向」と体系的に対応するのは、移動動詞の場合だけである。それについての分析は、後にまわし、まず「看」類の動詞の状況を見よう。

(45) a.朝這病人看一眼（この患者を一目見た）(=(33)b)。這一眼瞧向病人的胸口部位（目線は患者の胸に着いた）(灯)

b.目光釘向閻医生（目はじっと閻先生を見詰めている）(灯)

「看」類の動詞は方向などを前提要素としない。(45)では、「向」の後に導入されるのは、その視線の行き着く部分であり、「見る」の完了状態を示している。(45)aは、「朝」と「向」における語順の前後順序の対立に見られる、それぞれ構造上の特徴を裏付ける好例である。(45)とは対照的に、3・3節の(34)では、前置の「向」は目指す目標を示し、視線の及ぶ到達点(結果)は表していない。目指す目標は先であって前置の「向」でマークし、到達の目標は後であって後置の「向」(接辞)でマークする、という対応関係も、中国語における統語構造の類像性を反映している。

ところで、移動動詞になると、接辞の「向」は方向の結果を表すが、その結果は2つある。1つは、(46)のように、ある方向に向かって移動を始めたか、移動中というアスペクト的な表現の場合である。もう一つは、(47)aのように移動の到達を示す場合である。

(46) 飛机飛向日本（飛行機は日本へ飛んでいる）

(47) a.奔向矿井井口的時候（炭鉱の入り口に駆け付けたとき）(鼻)

b.向矿井井口奔跑的時候（炭鉱の入り口へ走るとき）

(46)は、「日本」に到着していないが、始動し、その方向に向かっている状態を示している。「走、跑,奔、沖、移」などの移動動詞が同じような文を構成することができる。(47)aは動作が完了し、目的地に到達している状態を示すのに対して、(47)bは動作進行中の状態を示している。「向」が前置か後置かという統語構造上の順序関係と、その状況の時間的前後関係とは、対応するわけである。

2節で議論した方向指示のメタファーと対応するものとして、接辞化の「向」にもメタファーの用法が観察される。

(48) a.走向中年（中年に向かっている）（女）
b.公司由混乱走向正軌（会社は混乱から秩序へ向かっている）（女）

(48)aは時間であり、(48)bは状態であって、いずれも達成したある結果を表している。「走向」は慣用句化され、移動動詞の場合の「向....走」というパターンには変換出来ない。これも接辞化が非開放的だという文法化の一般的な特徴を示すものである。

後置の「向」を動詞の付属形式の接辞として認定するのは、上で議論した意味関係の標識機能に加え、構造上の理由が3つある。1つは、(48)では、「向」は軽声で読まれるか、名詞句の前にポーズをおいて読まれるかという音韻的特徴がある。もう1つは、統語的に、アスペクト標識の「了」は動詞の後ではなく、「向」の後に付け、「V向」は1つの構文単位として機能している。更に、「走向」は1つの単位として、「山的走向」というように、新しい範疇化即ち名詞化が起こっている。この範疇化は名詞化と動詞化の2つに表れる。

(49) a.去向 流向 趨向 指向 航向 傾向（名詞）
b.傾向 偏向 帰向 転向（動詞）

接辞化から名詞化又は動詞化へのプロセスは、動詞の文法化に見られる普遍的なシフトのモデルを提示している。

(50) 動詞(向) > 前置詞(向N) > 接辞(V向)（･･･> 名詞か動詞）[13]

5.「にむかって」と「にむけて」の標識機能

日本語において、向格標識には「へ」と「に」があり、厳格(rigid)な機能語として、その統語範疇は固定している。一方、方向動詞の「向かう」と「向ける」は特別の文脈において「にむかって」と「にむけて」の形で方向指示などの役割を果している。[14]そのプロセスは、以上検討してきた中国語の状況とは全く対応するものではない。それにしても、それは部分的に方向動詞の文法化の特性を示し、「向」をよく理解するためにも、日本語との関連付けが必要である。

5･1「向かう」と「向ける」の分析

方向動詞として、「むかう」は基本的に2つの意味を表す。(51)と(52)に示すように、1つは移動するということであり、もう1つは相対するということである。状態動詞の「向」より「向かう」は行為が1つ加えられているが、行為にせよ、状態にせよ物理的空間関係を示

す点では、「向かう」と「向」は似ている。

(51) a.(飛行機が)ジャカルタに向かっていた (読売(以下同)8/10/夕)
b.「新大臣」は初閣議のあとさっそく担当省庁に向かった (8/10朝)
(52) a.美矢子は鏡にむかい、そのなかの自分に笑いかけようとしている (国家)
b.原稿用紙に向かうと、登場人物が独り歩きを始める (7/16/夕)
(53) 幸兵衛は課長の机に向かう (国家)

(53)のごとく、移動しているか相対しているかは、文脈でしか判断出来ない場合もあるが、いずれにしても、参与者の空間関係を示すことに変わりがない。

典型的な移動動詞として「行く」がある。移動を表す「むかう」と「いく」の相違は次の通りである。

(54) a.??どこかへむかった
b.どこかへ行ってしまった
(55) a.隊員たちはそれに従い、歩いて村へとむかった (国家)
b.*かれは城へと行った
(56) a.こちらにむかった (=「くる」)
b.「エルフ」を出て、家に向かう途中 (=「帰る」) (国家)
(57) 福建の反乱軍に向かう途中 (人物)

(54)が示すように、「行く」は「か」で示される不確かな「行方」も方向補語になる。逆に、「向かう」は移動主と移動先の空間関係を表しており、決まった方向が要求され、「か」による不明確な方向指示の状況が想像しにくい。特に(55)に示すように、「向かう」のほうは、方向をしめす格助詞「へ」の後に「と」が添えられ、その方向が限定される場合もあるが、「行く」は「と」と共起できない。「向かう」はある方向を目指して、そこへ移動することを表すのだが、移動主とその方向の位置関係を明示するのが特徴的である。そして、「いく」は話し手のいる場所と視点と深くかかわっており、いわゆる直示的表現を構成するが(第6章を参照)、(56)のように、「むかう」はそういう主観性がなく、「いく」に対して、「くる」と「帰る」のような逆方向を示すものの代用もできる。さらに、(57)の通り、人間か組織も「向かう」の方向補語になるのに対して、「行く」の方向補語は必ず場所性のあるものでなければならない。空間内の存在と存在の位置関係を示すものではないので、(57)は「いく」に置き換えられないのである。(57)のような抽象化された方向と共演できることが、下でみる「向かう」のメタファー用法、及び5・2節で分析する「向かう」の文法化を引き起こす意味的な条件の一つである。

「むかう」の意味的な抽象化は時間、状態などのメタファーの用法からも理解出来る。

(58) 日本は連合の時代、連立の時代に向かっている (8/4/夕)
(59) その報告によれば依然として快方に向かっていない (国家)
(60) 学問もしだいに統一に向かうことになる (人物)

(58)では、「時代」は時間の流れとして、空間のような連続性のあるものである。ある時点がその出発点になり、「流れ先」を物事の進行する方向又は目標のように捉えて表現するのは、空間から時間へのメタファーに表れる認知プロセスそのものである。(58)の時間へのメタファーが、「むかう」の多様な文法化の意味的条件の一つである。(59)の「快方」は無形の抽象的な状態であり、方向として示されている。この方向は、動きの抽象的な着点であり、漠然とした方向よりも、動きの目標になっている。このような表現によって、目標指示の文法化が可能と予測される。(60)の「統一」で示されるのは、あるプロセスを経た、状態変化である。ある状態からある状態への変化は、時間の流れを捕えるのと同様に、起点から着点への動きであり、着点が動きの目標になるのである。「むかう」の文法化もこの方向にむかって展開していく。

「むかう」に対して、「むける」は3項目動詞として、「AがBをCに向かわせる」という意味を表し、Aは使役者(causer)であり、Bは被動者であり、Cは方向参照である。

(61) a.二人はカメラを円盤にむけて、何回もシャッターを切った (国家)
b.デール氏は立ち止まり、からだをそちらのほうにむけた (国家)
c.望遠鏡をそれにむけた (国家)

他動性の観点からいうと、使役者Aが共演するので、「むける」は意図と結果を伴う出来事を述べるわけである。「にむけて」という形で現れる場合には、その前後の出来事も意図性と結果性、即ち他動性のあるものが一般的である。後で見るように、この特性によって、その文法化も「むかう」と異なる様子を呈している。「向ける」の意図性は、「目を向ける」という慣用句にはっきり現れてくる。

(62) 永田町に目を向ける内閣ではなく、国民の方へ常に目を向けていく内閣でありたい (8/7/朝)

「目を向ける」は単純な「見る」ではなく、「むける」の方向性により、ある方向に注目しているという「見方」が示される。かなり関心をもっている、又は努力を要する行為であるだ

けに、「向ける」の意図性が窺える。

5・2「にむかって」と「にむけて」

述語と述語の前後関係は、論理的にはいろいろな意味関係として解釈できる。「にむかって」も参与者の空間関係を示すという元の特性により、後接する動詞句の方向指示として用いられ、標識の機能を果している。

(63) a.夕日に向かって浜辺を駆けて行く（7/31/夕）
b.ゴールのテープにむかって身を踊らせる（国家）

「むかう」は、移動と言っても、移動者と移動先の方向関係を示すのが実質的な意味機能である。(63)では「むかって」は言い切りの形で言うと、述語として出来事を報告し、文法関係を示さない。「身を踊らせる」という述語句を付け加えると、方向関係を示す「にむかって」は行為の方向指示になるのである。言い換えると、「にむかって」が標識機能を果すようになるのは、後項述語の共起に付与されたものである。言うまでもなく、「むかう」自体は方向性という特徴がなければ、このような標識機能を果すこともない。

方向指示と言うと、格助詞の「へ」が思い出される。上の「にむかって」のかわりに、「へ」を入れ換えることが出来るかというと、そうでもない。どこそこへ行くという場合は、その方向指示は明示されてもされなくても、着点が必須要素とされる。(63)の述語から見ても分かるように、その方向指示は必須的なものではなく、むしろ「浜辺を駆けていく」も、「身を踊らせる」も、「にむかって」との共演により、方向性が付与されるのである。つまり、「にむかって」はそれなりの描写性があり、参与者のいる状態を示すものとして、述語性が残っている。逆に、「へ」は単なる方向をマークし、描写性がない。こういう意味では、「にむかって」は完全な文法形式ではなく、語彙項目と文法形式の中間物とも言える。下で見る「にむかって」の相手指示という機能を果す状況においても、この特徴が見られる。

「向」と同様に、「AがBに向かう」とでは、状態を示しているが、何も作用関係を言っていない。付随している状況を表してはじめて、その作用関係が示される。「むかって」で示されるものには、交流行為の対象がある。

(64) a.刑事にむかってはこう告げた（国家）
b.この君主に向かって利益を説けば（人物）
(65) a.ついにトラにむかってこう申し出た（国家）
b.我国にむかって無礼な言葉をはくと（国家）

(66) a.男は消えたあとにむかって呼び掛ける（国家）
b.空気にむかってそれだけをつぶやく（国家）
(67) a.映画の美女は踊り、こちらにむかってウインクをする（国家）
b.一頭のゾウが彼にむかって鼻をあげてみせた（国家）

(64)の述語は、人間どうしの交流行為を表す動詞であり、交流対象のマークが要求される。発話行為の対象を示すには、格助詞の「に」が用いられる。上の例が示すように、「にむかって」は、話し手と聞き手が互いに顔を合わせている状態を示すのに対して、「に」は単に対象を導入する働きしかなく、その状態を描写することはできない。これは上の方向指示の場合と同じことで、元の動詞の意味機能が完全に失われず、文法形式と語彙項目の連続性を示すものである。(65)のように、人間のように捉えられる動物や組織なども対象としてマークされる。発話行為としては、(64)とは変わらないが、対象の性質が異なっている。これは、一方ではメタファー化で、一方では「むかう」の方向性に動機付けられるものと言えよう。(66)の通り、人間と直接関係のない対象も、「にむかって」で導入される。「むかう」の参与者のAとBには、人間・非人間の対立がない。その基本的な意味特徴は方向性にある。発話行為は必ずしも相手を必要せず(例えば独り言の場合)、方向内の存在(物)も、関係指示の場合には、対象になるのである。交流行為は発話行為に限らず、表情やジェスチャーも交流行為である。(67)のように、その対象も「にむかって」によって示される。

「にむかって」は、物理的な方向をマークすることに止まらない。方向のメタファーとして、ある状態も「にむかって」で導入され、方向指示として表現する場合がある。これは「むかう」の抽象化とかかわりをもっている。

(68) 諸子百家は、その主張はさまざまであったが、大きな流れとしては、専制王朝体勢へ向かって動いていたといえる（人物）
cf,時代が戦国七雄から秦による天下統一へ大きく動いていた（人物）

「体勢」は無形のものである。そういう抽象的な存在・状態を具体的な存在としてイメージし、理解するのは認知プロセスの一般的な傾向である。(68)では、その比較例からも分かるように、「むかって」はかなり説明的で、「体勢」と「動く」の関係を説明するのが特徴的である。

「にむかって」の抽象化は限られるものである。統計から見ても、その使用頻度は高くない。ごく限られた文脈で使われるのは、「むかう」の文法化が程度のある不完全なものであることを物語っている。「にむかって」と区別される「にむけて」の状況を見ると、それぞれの文法化の度合が分かる。

動詞の分析で分かるように、「むける」は「むかう」より構造が複雑であり、意図性と結果性が含意される。文法化された「にむけて」も、それに動機付けられ、機能的に多様化している。

「にむけて」も方向指示の役割を果している。ただ「にむかって」と区別されるのは、元の「向ける」に意図性があるため、「にむけて」も意図性が含められた出来事の方向指示でなければならない。

(69) a.その軍隊の一部は、五月に天京を出発して一路北京にむけて進撃をはじめていた（人物）

b.メキシコ当局は17日、二百九十人を同じく航空機で中国に向けて出発させており（7/21/朝）

「北京」と「中国」のような場所を示す固有名詞と共起することから見れば、「にむけて」の方向指示という機能が分かる。「にむかって」の後に現れる動詞句は移動性のあるものでなければならない。(69)aの「進撃をはじめていた」には移動性がない。(69)bの「出発」は移動性のあるものだが、使役の形で出て来るだけに、意図性が強い。

「にむかって」と同様に、「にむけて」も対象をマークすることができる。

(70) a.外国人記者に向けて配布した（7/22/夕）

b.暴力団事務所に向けて、シュプレヒコールを上げる住民（7/21/朝）

(71) 走っている自分にむけて催眠術をかけているのだろうかとも考えた（国家）

「にむかって」は方向性が強く、対象の場合においても、AとBが相対する状態を示すわけである。これに対して、「にむけて」はその着点を明示し、(70)aに示されるように、対象は受け手でもある。そして(71)に示されるように、「にむけて」で導入される対象は、直接働き掛けを受け、「にむかって」の対象は直接働き掛けを受けていない。

物理的な方向から一歩進んで、抽象的な方向指示に拡大するのが「にむけて」の更なる文法化である。そして、この文法化はメタファー化の結果であると言える。

(72) a.ECは今年一月、市場統合を発足させ、次なる目標である通貨統合に向けて進んでいる（8/15/朝）

b.「細川政権」に向けて、連立与党となる各党は人事構想の調整を急ピッチで進めている（8/1/朝）

(72)の「すすむ」も「すすめる」も、ここでは移動性のある行為とは考えられず、状態性のある抽象的な出来事を表している。特に(72)aが示したように、「目標」が修飾語になるだけに、物理的な方向指示から抽象的な目標指示への文法化が起こっていると判断できる。(73)のように、目標指示の特質は移動性と関係ない動詞述語文の場合において、一層はっきり現れてくる。(73)は動的なイメージのある出来事だが、移動という具体的なプロセスではない。「開始」という意味では、起点から着点への意図性のある動きとして、着点も動きの目標として、「にむけて」でマークされる。

このほかに、空間性のない状態を表す動詞と形容(動)詞が共起する例が観察される。

(74) a.地球はいま、21世紀に向けて、多くの問題を抱えています(8/2/朝)
b.自民党政権の維持に向けて、新党さきがけの協力は不可欠だ(7/16/朝)

(74)aは時間的状況を示すものであり、bは「ため」にも置き換えられるように、目的を示している。方向から目標そして目的へという標識機能の拡大は意味の抽象化の方向でもあり、複合格助詞として機能する「にむけて」の文法化の方向でもである。

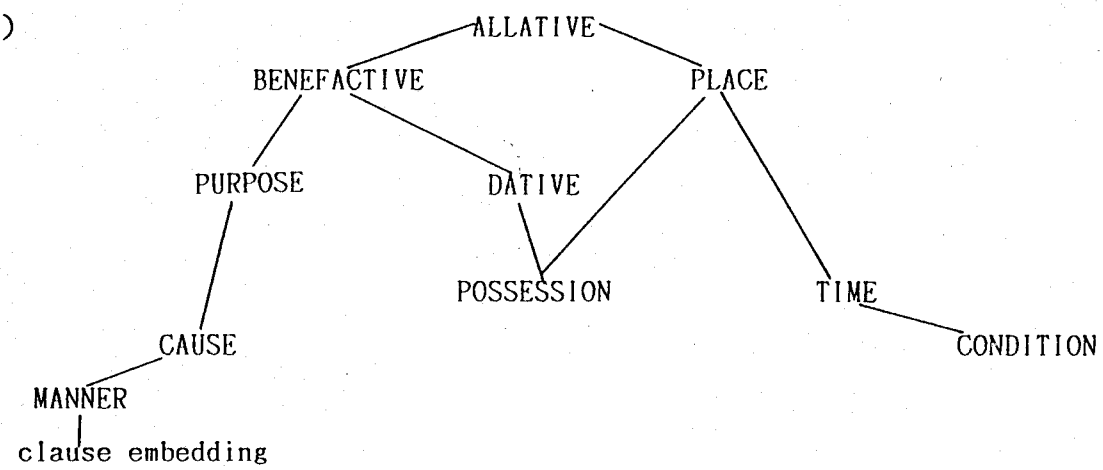
6. おわりに

5節で「むかう」と「むける」の標識機能のプロセスを分析してみた。「にむかって」と「にむけて」の標識機能に目が向けられ、格助詞相当句又は複合格助詞という統語範疇として認定されるのは、最近のことである(益岡・田窪1992;塚本1991を参照)。向格をマークする「へ」と「に」の格助詞という範疇の存在からいうと、「にむかって」と「にむけて」は副次的な範疇に過ぎない。これに対して、中国語の「向」などは、動詞からシフトされつつあり、動詞に近いところも見せているが、意味関係を有標化する文法形式として、範疇的に固定化していく。無標の意味関係を有標化する働きと、有標の意味関係を部分的に補足する働きが、中国語と日本語の方向動詞の文法化の最も対照的なところである。従って、「むかう」と「むける」は結合する格助詞の「に」又は「へ」の機能に引きずられ、後接する述語の性格により、「向」などに見られない目的の標識機能を果すように(例(74b))、より広い又は不確定な意味機能として解釈できるのである。しかも、類像性などの類型的特徴により、存在動詞と同様に、「向」などの方向動詞も、接辞化のプロセスが起こっているが、「むかう」と「むける」は格助詞との共起を前提に、それなりの機能を果すものとして、動詞の接辞にならない。接辞化の有無も、「向」などの方向動詞の有標化する機能と、「むかう」と「むける」の補足する機能の対立との表れである。

以上の分析に示したように、中国語にしても日本語にしても、方向動詞の方向指示の機能は、特別の文脈において拡大される。それは向格標識の機能拡大に等しいプロセスでは

ないにしても、方向指示から対象指示への機能拡大は類似するものと言ってよい。向格標識が多くの言語において様々な標識機能に拡大されるという報告があり、普遍的なプロセスであると認識される(Lichtenberk,1991a,b;Bybee,1988;Bybee et al.,1991)。Heine et al(1991a:151)が、アフリカのIkとKanuriという言語において、向格標識の機能拡大を分析し、その機能拡大を次のように図式している。

(75)



上の機能拡大のネットワークについて、Heine et alが"family resemblance category"という用語を用いて説明し、英語の"for"の多機能化も類似するプロセスとしている。

(76) a.Mary left <u>for</u> Paris.
b.Mary worked <u>for</u> her children.
c.Mary worked hard <u>for</u> her exam.
d.Mary couldn't sleep <u>for</u> pain. (Heine et al.,1991a:152)

中国語の「向」などは、(75)のような多機能化のネットワークになっていない。しかも、"for"で示される意味関係を異なる意味範疇として捕え、表現する。(76)aは「馬麗去巴黎」というように無標の形で表し、(76)bの受益格と(76)cの目的は「為」で、(76)dの原因は「因為」で別々マークするのである。

(76)aのforを向格標識とされているが、「向」などの方向指示の機能からして、一般的に向格の原型的な標識の1つとされる"toward"を、その対応語と見なすのが妥当であろう。それにしても、"toward"は物理的空間関係を示す場合に限り、方向動詞の標識機能と対応し、「向」による抽象的な指示機能と対応しない。

(77) a.Go <u>toward</u> the river.
b.??A baby is smiling <u>toward</u> the mother. (at)

c.??Mary gave some books toward John. (to)

d.??There is nothing to be learned toward them. (from)

(77)は第2節と第3節で見たような述語で構成された文ではあるが、「向」と対応するように受け止められる(77)aの物理的空間関係を除き、"toward"は「向」で示される意味関係の標識機能をもたない。[15](77)を観察してみると、方向動詞の文法化の特性が一層明らかになる。つまり、「向」などは述語動詞から文法形式にシフトしつつありながらも、方向という基本的な意味特徴が失われていない。方向指示から他の標識機能への拡大は、あくまでも個別の文脈において、意味的に拡大解釈された結果であり、"toward"などのような厳格(rigid)な統語範疇ではなく、範疇化又は形態化のプロセスの最中にあるものである。これは他の空間動詞にも見られる共通の特徴である。

注:

1) 動詞の意味的な分類は重複するものである。「往」は移動動詞に近い。そして第6章で分析する「去」及び「来」のような直示的移動動詞もその方向関連の特性からいうと、方向動詞の一類になる。ただ「去」及び「来」は方向(着点)だけでなく、目的(行為)とも関連しており、しかも直示的である点では異なっている。下で分析する「向かう」も方向としかかかわりをもたないのが「行く」と「来る」と異なるところである。

2) 「むかう」と「むける」の文法化については、盧(1995b)では詳しく分析しており、本章5節はそれをもとにしたものである。

3) これは「彼は私の肩を持つ」という意味に解釈するなら通じるが、以下の「向」の抽象化の表現の例になる。

4) 呂主編(1980:506)では、動詞の例を3つしか挙げていないが、前の2つは熟語化されたもので、3番目の例も我々の述べようとする動詞述語の連結化のようなもので、動詞とは認めがたい。

5) 原型非原型の判断は一部は主観的なものであり、運用者の反応しやすいもの、使用頻度の高いものが原型になる傾向が強い。

6) 「外向き(outward)」と「内向き(inward)」については、Teng(1975a:29)は「売」と「買」、「教」と「学」を例に説明している。第6章に示すように、「去」と「来」もその典型的なペアである。

7) 呂主編(1980:506)と李(1988:107)では、「向」の標識機能について、方向と対象に分けて記述しているが、その関連性に言及していない。「対象」というのは、目的語に解釈される場合もあり、極めて曖昧な用語で、本研究のごとく、それを明確にするには、共起する述語による下位分類の作業をする必要がある。

8) 呂主編(1980:93)も、「向」と「朝」の抽象と具体の対立に触れ、「朝」が「身体動作、姿態」

を表す具体的な動詞の人間名詞しか導入しないと指摘し、「向老師借了一本書」の「向」が「朝」に言い換えられないと断定している。「我朝張老師借了一本書」というのも、実は日常的会話において通じる文であり、その抽象と具体の意味を検討する余地がある。

9) 「向銭看」自体も「前向き」という意味では、メタファーである。

10) 例えば、呂主編(1980:506)では「介詞」と指定している。

11) 朱(1982:175)では「走/向勝利」と分析されているが、以下の分析に示すように、それは適切ではない。李(1988:109)も「N+V+向・N」というように「向N」を1つの単位としている。

12) 呂主編(1980:93)では、「向」と「朝」の相違点の1つとして、「V朝」がないという事実も指摘したが、なぜそうなのかの問題に触れる余裕がなかった。

13) 似ているモデルとしては、Heine et al(1991a:167)では、lexical > (adverbs>) adpositions > case affixes > zeroというのがある。

14) 記述の便宜のため、「に」のわかりに用いられる「へ」を省くことにする。

15) もち論"toward"もそれなりの抽象的な意味関係の標識機能を果すことがあるが、それは方向動詞と異なるプロセスであると思われる。

第6章　直示的移動動詞の文法化

0. はじめに

第5章において、方向動詞の文法化を分析していた。既に指摘したように、方向動詞と移動動詞とは重複するものであり、特に移動動詞の中の方向移動動詞(direction-motion verb)は、着点(goal)を補語に取り、方向と関連している。[1] ただ方向移動動詞の「去[qù]」と「来[lái]」又は日本語の「行く」と「来る」は、方向動詞の「向」、「朝」、「往」又は日本語の「向かう」と異なり、目的の行為とも関連するものである。そして、方向移動動詞は、話し手の視点に左右される、主観性の強い直示的(deictic)なものであり、発話時の話し手の事態の捕え方と対人関係などが関与してくる。こういう意味構造上の特徴に基づき、ここでは方向移動動詞を直示的移動動詞(deictic-motion verb)と呼ぶことにする。

方向動詞は名詞類(nominal)関連の項標識(argument marker)へ文法化するのに対して、直示的移動動詞は、動詞類(verbal)関連の文法範疇の標識へ文法化する。直示的移動動詞の連結化(deictic serialization)はよく観察される言語事実だが(付録3·1を参照)、中国語において、それは出来事の方向を直示的に表現する場合と、出来事に対する話者の心的態度即ちモダリティを表現する場合との2つの局面に現れてくる。この2つの局面はつながりのあるものであるが、伝統の記述文法の用語を用いていうと、前者は第5章2節で触れた方向補語(中国語でいう「趨向補語」)であり、後者は「連結詞」(呂1956)又は「不変化詞」(particle)(Chao,1968)と呼ばれている。本研究では後者を取り扱い、特に(1)bの文末の「去」を中心に、直示的移動動詞の文法化を分析する。

(1) a.下定决心、不怕犧牲、排出万難、去争取勝利（心を定め、犠牲を恐れずに、万難を乗り越えて、勝利を勝ち取ろう）（毛沢東）

b.愛想你想去!新媳婦有想法、有本事勾搭去（思いたいように思いなさい。新しい嫁さんが考えがあるから、誘惑してみなさい）（離婚）

(1)の「去」は、「軽声」で読まれ、本動詞ではないこと(いわゆる「虚化」)はよく指摘された。だが、「去」、特に(1)bの文末の「去」は何を表すのかについての記述・分析はあまりされていない[2]。本章では文末の「去」をめぐって、それが共起する個別の文脈に表れる対人的機能(モダリティ)及びその機能をもたらす動機付けを中心に検討していく。第1節では、文末の「去」は、意志表明、反語文、命令文、揶揄といった文脈において、意志、反語、命令、揶揄というモダリティの標識のように機能する現象を考察する[3]。第2節では移動動詞とし

て「去」はどのような意味・統語の構造を持つかを分析し、モダリティの機能を働く内在的条件を究明する。そして第3節では、話し手の伝達意図と対人関係の状況に左右される、「去」の語順変動というモダリティ機能へシフトする経路を説明する。第4節と第5節では、文末の「去」の特性を傍証して、文中の「去」と「来」、そし日本語の「いく」と「くる」を取り上げる。最後の第6節では、文法化理論においてよく取り上げられる方向移動動詞、特に英語の“go”が“be going to”というパターンで、テンスの標識として機能することと関連付け、文末の「去」のプロセスを文法化理論の枠組に当て嵌め、その問題提起の意義を考える。

1. 文末の「去」のモダリティ機能

1・1 意志表明

言うまでもなく、文は命題的な情報を伝えるだけでなく、話す人の伝達意図や判断などの主観性にかかわる情報、即ちモダリティも伝えられる。いわゆる平叙文でも、聞き手と話し手で構成される対人関係が絡んでくる状況のもとで、それなりのモダリティが表される。意志表明がその典型的な例である。

(2) 明天 我 去商場 給你 買件 睡衣（あすスーパーへ行って、パジャマを買ってあげよう）

(3) 明天 我 陪你（去商場）買件 睡衣 去（あす付き添って(スーパーへ行って)パジャマを買おう）（離婚）

(2)では動作主が予定する行為(命題)が伝えられているが、動作主でもある話し手(「我」)と受益者である聞き手(「你」)の対人関係のもとでは、話し手の何かをしようという意志も、その命題的表現に付随している。場所目的語の「商場」が示されているため、「去」は述語動詞として機能していることが明らかである。ところが、(2)のような意志表明が無標の文は、(3)の通り文末に「去」を添えることによって、有標的になってくる。場所目的語を(3)に入れることができない。括弧内に示すように、本動詞の「去」を入れると、場所目的語の共起が可能なことから、文末の「去」は述語ではなく、話し手の意志を表す標識のようなものと見なされる。意志表明は話し手指向の特性をもっており、話し手が同時に動作主でなければならない。例(3)の場合、動作主を第3人称の「他」に変えると、文末の「去」は直接的な意志表明として共起できない。

(4) ??他 陪你 買件 睡衣 去（彼は付き添ってパジャマを買おう）

(5) 他 説 他 陪你 買件 睡衣 去（付き添ってパジャマを買おうと彼は言った）

(6) 我 叫他 陪你 買件 睡衣 去（彼を付き添ってパジャマを買いに行かせよう）

例(4)を修正し、(5)のような引用文にしたり、(6)のような使役文にしたりすると、「去」を付け加えることができる。(5)は間接話法であり、「他」の発話を代弁して、「去」は依然として話し手の「他」の意志を表示するものである。(6)では、「去」は埋め込まれた文、「他陪你買件睡衣」ではなく、「我」を主語とする使役文全体にかかっているもので、使役主の「我」の意志を表明する役割を果している。このように、意志表明の場合、「我」という第1人称に制限される構文の制約から「去」のモダリティ的役割の性質が窺える。もう二、三の例を挙げ、文末の「去」の意志表明の役割を理解しよう。

(7) 好、我 去 跟陳姨太 説 去（OK、陳二号さんのところへ行って話してみよう）(家)
(8) 我 找人 説理 去（人を探して黒白をはっきりさせよう）（茶館）
(9) 我 出去 溜溜 去（ちょっと出掛けてぶらぶらしてくるわ）（茶館）

(7)には「去」が2つ出ており、SVOという基本的な文構造からしても、文中の「去」しか述語と認められず、文末の「去」は意志表明の標識として機能していると見てよい。

以上の例の通り、文末の「去」が共起するのは、いずれも移動を意味する動詞であり、場所の関連性のない文脈には用いられない。そういう意味では、意志表明の標識のような「去」は、本動詞から派生して来たものとして、部分的に述語動詞に似ており、コンテキスト依存性の高い、不完全なものであると言うことができる。

1･2 反語

疑問文は情報の提供を求めるだけではなく、聞き手の判断や意見を聞き返す形で、それを否定したり自己主張をしたりすることもある。反語文というのは、一部は疑問文の形を取っている。文末の「去」は反語文において反語の標識のように働くことができる。

(10) 这 上哪兒 報銷 去?（これはどこへいって帳消しできるのか）（離婚）
(11) 換 新的?上哪兒 買 去?（新しいのに変えるの?どこへ行って買うの）（離婚）

(10)は単に場所を問い掛けるのなら、「去」を述語動詞として、「報銷」の前にもっていくのが普通の構文である。文末の「去」の形で、単なる場所の情報を求めるのではなく、聞き手が提案したことを、聞き手に聞き返す形で、それが実現不可能な判断や、提案者としての聞き手を非難したりすることが表される。(11)に示すように、聞き手の提案を引用し、それを直ちに否定する文脈においては、文末の「去」を落とすのはそぐわない。

(10)と(11)では、疑問詞の「哪兒」は述語動詞の「上」の場所目的語として用いられ、「去」とはかかわらないように見えるが、しかし、「上」を削除しても文が成り立つように、その疑問詞が共演するからこそ、「去」の反語機能が顕示されるのである[4]。「誰」と共起する例も、反語の標識みたいな「去」が疑問詞を共演要素とする事実を示している。

(12) 你 不求 劉経理 求誰 去? (劉に頼まなければ誰に頼めるのか) (離婚)

(13) 説得 軽巧,一輛車,少説 几十万,搶 去? 尽説 那 没用的 (あっさり言うなよ。車一台、何十万元のもの、奪う?ししょうもないことを言うな) (離婚)

ところが、(13)のように疑問詞が抜けていも、「去」は反語の機能を果す例も観察される。(13)は、あがる調子という音韻的な要因で、反語機能が付与されたのは、確かなことである。しかし、テストをして見ると、語順を変え、「去搶」としては、文頭の「説得軽巧」と、後接する「尽説那没用的」という話し手の否定的な態度が示される文脈にふさわしくない。「去搶」は単独に抽出してみれば、不定でありながらも、場所の指示が暗示され、動詞句として働き、反語のモダリティが喚起されないのである。(10)の例に戻るが、文末の「去」を落せば、場所についての質問も、反語の表示も、読み取れるが、逆に、文末の「去」を付け加えると、場所の質問にはならないのである。比喩などより抽象的な表現の場合、文末の「去」が共起できることが、「去」の相対的な文法機能を裏付ける。

(14) 叫我們喝西北風去? (腹ぺこでいろというの) (家)

「喝西北風」は何も飲まず食べずという状態表現であり、「去」の結合が可能なことからして、反語を表す場合、「去」の文法化が一歩進んでいると言うことができる。意志表明の場合、「去」は比喩表現と共起できないのである。

(15) *我 开开 眼界 去 (視野を広げてみよう)

1・3 命令

命令は意志表明と反対で、聞き手指向のものである。ある行為を実現させる参与者の変動という意味では、意志表明と命令とは裏表の関係にあるものだと言える。文末の「去」は命令文において、命令のモダリティの標識のように機能するのも、よく観察される現象である[5]。

(16) 你 上 后頭 去 看看 小花 去吧 (裏へ行って、小花の様子を見てきて) (茶館)

(17) 你 還 带回去 呀? 給 那辺 五床 喝去（持ち帰るの?5番ベッドの人に飲ませよう）（離婚）

(16)の「你」と(17)の「你還带回去呀?」がなければ、文末の「去」は意志表明なのか、命令なのか両義的である。「去」の機能のコンテキスト依存性の表れである。(16)は(7)と同様、「去」が2つ出ており、文中の本動詞の「去」に対して、文末の「去」は命令のモダリテイの標識であると受け止めたほうが妥当である。

「去」による命令表現は、通常先に述べた反語につながっており、聞き手を否定したり責めたりする状況によく出て来る。

(18) 我 衣服 多?你 調査調査 去!誰 不説 我 穿得 像个 老太婆（服が多いというの?人に聞いてみなさい。お婆さんみたいな服着ていると言われるのよ）（離婚）

(19) 照照鏡子去,你看你都成什么了（鏡を映してみ、そのありさま）（死）

(20) 少廃話,不讓你走你就別走,該到呷兒呆着呷兒呆着去（黙れ、居るべきところに居なさい）（死）

(18)は必ずしも移動という行為の遂行を要求するものではない。(19)と(20)は述語となる文中の「去」を挿入し成立しはするが、それでも文末の「去」の共演が欲しい。特に(20)については、「去」を移動させ、「去+VP」の構文にすることができず、文末の「去」は語順的に固定化している。意志表明と反語の場合と同様、命令文においては、「去+VP」のような本動詞の構文パターンを取らないのは、VPの部分を強意するという話し手の伝達意図によるもので、それに伴って「去」も意味的に弱化されたのだと思われる(3節を参照)。次の例の通り、抽象度の高い行為、例えば、心理活動を表す動詞の場合、「去」が命令のモダリティを表す標識として機能するとしか見て取れない。

(21) 愛想你想去!新 媳婦有想法,有本事勾搭去（=(1)b）

「想」という動詞は物理的な場所との関連性がない。文末の「去」は「想」を移動の目的とすることは考えられず、動詞とは認められない。

以上の観察から分かるように、文末の「去」が命令の標識のように機能するのは、あくまでも聞き手と話し手で構成される特別の対人関係が絡んでいる状況のもとで、実現可能なもので、完全に範疇化されたものではない。従って、そのモダリティの機能も互いに関連し、未分化の連続的な意味体系をなすのも不思議ではない。次で調べる揶揄の表現は、事実反語と命令の機能とつながっており、その延長線上のものと言ってよい。

1·4 揶揄

呂主編(1980:401)では、「去」を「趨向補語」として、話し手の「任凭」という意味を表すと指摘している。次に挙げるのはその分析で使っていた例である。

(22) 随他説去、別理他（奴に言わせておけ、かまうな）
(23) 讓他玩去（奴に遊ばせておけ）

我々の考えでは、この「去」は以上で検討してきた、意志表明、反語、命令を表す機能と平行するものとして、「趨向補語」ではなく、文末の「去」と見なし、揶揄のモダリティを表すものと思う。[6)]

(24) 叫他們反去吧（奴らに対抗させよう）（茶館）

(24)では、「去」は「他們」に対する話し手の「任凭」の態度を示しているが、「他們」をからかったり、「反」の行為を皮肉したりしており、話し手が揶揄しているという複雑な裏の意味が潜んでいる。文頭の「叫」と文末の「去」が呼応し、「去」は主動詞の「反」とは直接かかわらず、その趨向補語として解釈するのも無理がある。例(6)を思い出してほしいが、そこの意志表明とこの揶揄表現は、文構造が同じであり、意味的に互いに関連している。文末の「去」は、モダリティ機能を果すように範疇化しつつありながら、その機能はコンテキスト依存の性質のものであると裏付けられている。

(23)と(24)では第3人称の例しか挙がっていないが、実際の調査では、揶揄は直接聞き手に向けられるものとして、第2人称と共起する例が多い。そして、意志表明、反語、命令と同様に、揶揄の標識はその前後の文脈に基づいてしか理解出来ない。次の文では、後接する「吃死你」がなければ、「去」を命令の標識に解釈しても差し支えない。

(25) 你吃你的去吧、吃死你！（お好きなように食べ。死んでも知らないよ）（死）
(26) 你就活受着去吧（ひどい目に遭っても知らないよ）（離婚）

(25)は具体的な行為(「吃」)を示すもので、「去」を主動詞の前に移動させると、本動詞の移動の読みも得られるが、(26)が示すように、もっと抽象的な行為を示す文脈において、「去」は前方移動が不可能で本動詞として理解できない。

(24)−(26)では、もともと命令や勧誘などのモダリテイの標識である、「吧」が共起している点に注目されたい。「去」はそのコンテキストだけでなく、「去吧」というように、拘束

形式でそれなりの意味機能が実現できるわけである。このことは、「去」が終助詞のような完全に範疇化されたものではないことを端的に示している。次の例も「吧」が落とせない。

(27) 你就 喂去吧,還有完吗? (やってみ。きりがあるもんか) (離婚)
(28) 活該你現眼去吧! (いい加減にしなさい。人に笑われるよ) (離婚)

(27)は話し手が聞き手の「喂」(賄賂のような行為の比喩)を堅持する意見に反対する状況を示しており、付け加えられている反問の「還有完吗?」から、話し手の不満そして観念の気持ちが窺える。(28)では「活該」(いい気味だ)で聞き手に厭味を与え、「現眼」(恥をかく)の結果を招くぞ、という話し手の揶揄を表している。「喂」も「現眼」も、比喩表現として、極めて抽象的であり、こういう意味的な抽象性からして、揶揄を表す文末の「去」がもっとも文法化されたものと言えよう。最初の段階としての意志表明とは対照的に、揶揄を表す場合、文末の「去」は限られた文脈に現れ、殆ど「去吧」というように、拘束形式で機能するのもその証拠になっており、「去」の前方移動も不可能なのである。

2. 「去」の構造

「去」はなぜ文末に来ると、上のようにモダリティ機能をもつようになるのだろうか。結論から言うと、それは一方では本動詞の「去」の意味・統語構造をその内在的条件とするのであり、一方では個別の文脈に表れた話し手の事態の捕え方及び対人関係によっていると考えられる。まず、本動詞の「去」の構造を考えてみよう。

移動動詞として、「去」は直示的なもので、話し手のいる場所或はその視点のなかの一点を出発点として、もう一点へ「外向き」(outward)に移動することを表すと一般的に解釈できる。「NP(動作主)±从NP(出発点)+去+NP(目的地)」という構文構造から分かるように、「去」は起点を付加詞とし、着点を補語としており、目的地関連というのが特徴の1つである。

(29) 先説好你去哪児? (どこへ行くのか、言って)

しかし、「去」は(29)のような単純な文を作ることに止まらない。何かをしようと思って、どこかへ行くのであると解釈できるように、「去」は何かの目的を達成するための移動であって、目的地だけでなく、目的(行為)と関連するのがその本質的な特徴である。構文的に場所目的語と目的動詞句と共演するのも、目的動詞句とだけ共演するのも、「去」の目的関連の本質を反映している。

(30) 我太太和老板去上海出差了 (妻が社長と上海へ出張に行った) (死)

(31) 他熱得睡不着、邀我一起去游泳（暑くて眠れないので、泳ぎに行くのを誘った）

(30)では、目的地と目的が両方かかわっており、どちらに焦点を当てるかは、具体的な語用条件のもとでしか判定出来ないので、中立叙述になる。ところが、(31)のように、目的とだけ関連させると、目的地はもち論、移動の行為も問題にならず、新情報としての目的(「游泳」)に焦点が絞られる。(31)において「游泳」に強勢を置いて読まれるのがこうした特徴を示している。言い換えると、(31)のように目的の行為と関連する場合、「去」の「虚化」は既に始まっているということである。「去」は実質的に目的と関連するという特性を、目的地についての質問に目的でもって答える次の会話から一層理解出来るだろう。

(32) A:你到底打算上哪児呀这么深更半夜的?（こんな夜中どこへ行くつまりなの）
B:去死（死に行く）（死）

(32)Bの答えは、特に目的地を指定することもなければ、移動の行為も問題にならない。目的の「死」がポイントである。後述することだが、「去」はもっと抽象的な述語動詞と結合するにつれ、意味的弱化が進み、文法的意味を表す一方(4節を参照)、「死去」というように、目的動詞(句)の前方移動によって、「去」は述語性が失われ、その場に見合ったモダリティのような副次的意を持ち得るように至るのである。

一方、「上」、「到」なども移動動詞ではあるが、「去」と対照的に、次の例のとおり、目的の行為と直接関連しないので、目的動詞句と直接結ぶこともできない。従って、以上見てきた「去」のようなモダリティ機能も付与されていない。「去」はある行為との関連性があるからこそ、その行為に関するモダリティの表現になることを保証するのである。[7]

(33) *a.小李上吃飯
*b.小李吃飯上（李君は食事にでかける）
(34) *a.小李到吃飯
*b.小李吃飯到（李君は食事に着く）

3.「去」の文末シフト

2節で見たように、移動動詞としての「去」は、「NP(主語)+去+NP(場所目的語)/VP(目的動詞句)」という基本的な統語構造を持つが、場所目的語と目的動詞句が前方移動する場合がある。場所目的語の前方移動とは、移動動詞の「上」や「到」などで場所目的語を導入し、「去」が文末に残るというパターンである。[8]

(35) 我説一会児到他那児去（しばらくして彼のところへいくと言った）（死）
(36) 躲開、我要上厠所去（どけ、トイレへいくのよ）（死）

(35)と(36)の「去」は主動詞とは認め難い。なぜなら、「去」は軽声で読まれ、削除しても文が成立するので、前の移動動詞が述語を担うからである。場所目的語の前方移動は、その場所に関心を寄せる話し手の伝達意図に動機付けられるものである。例えば、歩いている聞き手に、移動の事実が自明の眼前状況では、その行為を再確認することがなく、その移動先の場所しか問題にならないので、「你上哪児去(どこへいくの)」という場所目的語の前方移動の形で問い掛けるのが自然なわけである。このことは反復疑問文でテスト出来る。

(37) a.你去不去美国?（アメリカへ行くのか）
b.*你到美国去不去？
c.你到美国去吗?
d.你到不到美国去?

行為全体に関心をもつ場合、(37)aのように「NP+去+NP」という元来の場所目的語後置の構文が成り立つ。これに対して、bのように、一旦場所目的語を前方移動させると、場所を確認しなければならないので、移動の行為自体の成否を反復疑問の形で追究することはできなく、cとdのような文しか容認できない。言い換えると、場所目的語の前方移動及び「去」の弱化は、場所目的語を問題にする話し手の事態のとらえ方に動機づけられるものにほかならない。実際の例として、(36)のように、移動が実行している眼前状況では、「厠所」が話し手の目指すターゲットになるので、それを前方移動させるのが自然なわけである。場所目的語の前方移動に伴って、(36)の文末の「去」は削除可能な付随的な要素になっており、話し手の気持ちに見合った、その意志を表明する二次的な要素にシフトされている。
更に、目的動詞句の前方移動の文脈においては、「去」は動詞述語の性格が一層弱まり、モダリティの標識のようなものになっていくのである。その状況を調べて見よう。

(38) (他)讓杜梅以后找他玩去（杜梅に彼のところへ遊びに行って欲しかった）（死）
(39) "你媳妇呢？"潘佑軍問。"上班去了?"（奥さんは?仕事に行ったの?）（死）

(38)は目的動詞句(「找他玩」)の前方移動により、使役させるのは移動でなく、その目的の行為(「找他玩」)になり、使役主の「他」とその行為がより直接的な関係に結ばれ、「去」が付随的な要素になってしまう。「他讓杜梅以后去找他玩」と言い換え、「去」を主動詞にすると、使役させる行為は移動の「去」になり、目的動詞句の「找他玩」という行為と使役主との

関係はより間接的になる。例(6)に示したように、対人関係が絡んでいる文脈において、(38)のような使役文も意志表明が有標化され、「去」は述語性がなくなり、モダリティの標識のようなものとして機能するようになってくる。(39)の例だが、当事者が「いない」ということを既知の事実として、「去」でもって再確認することがなくて、「去上班了」にならないのも当然のことである。目的動詞句の前方移動により、目的の「上班」を取り立てることになってしまい、「去」は付随的なものとして削除可能になる。目的の行為が話し手の関心のターゲットになっている会話の例を見よう。

(40) A:誰知道你干嘛去了（何をしにいったか知るもんか）
B:你説我干嘛去了、你説我干嘛去了（私、何をしにいったか、言ってみや）
A:我不知道你干嘛去了、也許是干革命去了吧（そんなこと知らないぜ。革命を起こしにに行った違うか）（死）

(40)はAとBが口論する場面の会話であり、Bの行為を追究するAの念頭に「干嘛」が先に出て選択の優先順位を占めており、語順的な優位性と照応している。「去」を「干嘛」の前に入れても文が成立するが、そうすると移動と目的の行為を羅列するだけで、目的を際立たせることがないため、Aの意図と合致しない。このように、(40)の「去」は目的動詞句の前方移動により、付随的なものになってきて、1節の議論でみたように、それは様々な文脈と状況において様々なモダリティ機能が実現できることになるのである。意志表明につながっている会話の例を1つ見よう。

(41) A:你干什麼去?（何をしにいくの）
B: a.我去接人（人を迎えに行く）
b.我去接人去（人を迎えに行くのよ）
c.我接人去（人を迎えに行くのよ）

先に述べたように、聞き手が歩いている眼前状況では、移動の「去」を確認することがない。従って、「你去干什么」はAに選ばれないのである。問題はBの答えである。論理的に考えると、Bの答えはa,b,cの通り、少なくとも3つの選択肢がある。文末の「去」が抜けたaは、Aの問い掛けのパターン(「VP+去」)から外れ、相手の意図を無視し、命題的情報を伝えてはいるが、対人的機能が薄いので、好まれない。逆に、bとcのように、Aの問い掛けのパターンを取ると、相手の意図にそって、Aの関心のある命題情報だけでなく、話し手の意志などの感情も聞き手に伝わっているので、対人的機能が働いており、話し手と聞き手の間には一体感、親近感が感じられる。言い換えると、文末の「去」は、ここの文脈において意志表明の機能が付随されているので、そういう対人的機能が作用するのだということである。aの

ような文末の「去」の抜けた文が、命題的な情報しか伝えないということは、次の例から見ると、一目瞭然である。

(42) a.我們説好了要去吃的地方（食事にいくところを約束した）（死）
b.*我們説好了要吃去的地方
(43) a.他看小花要去上学、忙叫住（小花が学校へ行こうとするのを見て、さっそく呼んで）（茶館）
b.*他看小花要上学去、忙叫住
(44) a.(王立發)站起来去拿碗（立って碗をとりにいく）（茶館）
b.*站起来拿碗去

(42)－(44)はそれぞれ関係節、補足節、並列節という複文であり、いずれも対人関係と話し手の伝達意図が関与しない、平叙文である。そういう文脈には文中の「去」しか出て来ないということから、文中の「去」は命題的な情報を伝達する役割を果すのに対して、文末の「去」は対人関係が絡んでいる特定の文脈において、何らかのモダリティを表現するということが見て取れる。2節から5節までの分析で見たのがそれである。

ところで、陸(1986)が「VP+去」(一部はここの文末の「去」)の「去」を動詞と見て、その意味関係について、「去」が目的語指向の結果、VPが「去」のマナー、VPが「去」のゴール指示、動作の継続、使役などの「遞系構造」(埋め込み文)、VPが「去」の目的という6つの分類で説明している。

(45) a.茶叶我已経寄了1斤去了（お茶はもう1キロ送ってやった）
b.我們都騎自行車去（みんな自転車でいく）
c.前天我上他們那児去了（一昨日彼達のところへ行って来た）
d.我想吃了飯去（食事が済んだら行くつもり）
e.最後決定派他去（結局彼を派遣することに決めた）
f.你找个地方睡会兒去（どこかを探してちょっと寝て）

(45)は表層的な分類で、「VP+去」は同じレベルのものではない。(45)aはよく知られる「寄去」から「寄・・・去」へのシフトであり、「去」にまつわるもう一つの局面の文法化現象である。[9] 話し手が歩いている眼前状況のもとでは、(45)bは「みんな自転車に乗りにいくのよ」と理解できるように、「去」は移動だけでなく、話し手の意志にも通じる。[10]。(45)cは先に分析したように、目的地前方移動のパターンで「去」が省略可能で付随的な要素として述語性が薄い。(45)dは「VP+VP(去)」のような並列構造であり、真正の「VP+去」構造ではない。

(45)eは埋め込み文であり、例(6)と(23)bと(24)の通り、「去」はモダリティの機能を果す場合があり、両義的である。最後の(45)fになるが、陸の分析ではコンテキストの要素を考慮せず、文末の「去」の対人的機能に触れなかった。従って、「VP+去」のほうが「去」の移動自体に重きがあり、「去+VP」のほうが目的に重きがあると解釈する一方、次の「VP+去」の例が目的の「上学」に重きにあると説明し、自己矛盾に陥っている。

(46) ･･･,我想上学去、你同意吗? (学校に通いたいが、いいのか)

シナリオ『茶館』を調査したところ、描写文のト書きには、文中の「去」は10回出たが、文末の「去」は1回も出なかったのに対して、会話のセリフになると、文中の「去」は7回出たが、文末の「去」は35回も出たことが分かった。これは我々が分析したことを立証してくれた。つまり、描写文のような平叙文の場合、事柄の論理的な意味関係を述べるのが一般的で、文末の「去」のような対人的機能をもつ要素を挿入する余地がない。逆に、セリフになると、その場その場の対人関係によって、「去」は文末に現れ、付随的な要素としながらも、その場に見合ったモダリティ機能を持ち得るのである。結論を繰り返すことになるが、文末の「去」はモダリティのような機能が付与されるのは、ほかではなく、話し手の伝達意図と対人関係に起因するものである。

4. 文中の「去」と「来」

第3節では、「NP+去+VP」のパターンで目的のVPを導入する場合に、「去」は既に文法化が始まっていることに言及した。文中の「去」と「来」も特別の文脈において、述語の機能が失われ、それなりの標識機能を果しているわけである。そのプロセスは文末の「去」と多くの面において異なっており、文末の「去」のプロセスの特性を理解するためにも、直示的移動動詞の文法化の全体像を把握するためにも、文中の「去」及び「来」のプロセスを見る必要がある。文中の「去」からみていこう

4･1 文中の「去」

冒頭の(1)aの通り、文中の「去」も文法語として機能する。それは後接する動詞句の意味的な抽象性や場所性のなさなどによるもので、「NP+去+VP」という元来の文構造は変わっていない。意味的に抽象度の高い動詞句ほど、「去」は移動という意味が薄くなり、述語性がなくなっていく。次の例に示すように、場所との関連がない場合、文中の「去」は文法語としか解釈できない。

(47) 我从来没見過一个人那么全力以赴不顧死活地去哭（あんなに一生懸命に泣く人を見たこともない）（死）

(48) 有人可以不愛誰了、或人家不愛他了、再去愛一个、我不行（愛しなくなったり、愛されなくなったりすると、新しい相手を作っても平気な人がいるが、私にはできない）（死）

(47)と(48)の「去」の後に場所目的語を挿入することができない。動詞述語として機能する場合には、場所の関連性が持たれることからして、上の「去」は述語ではないことが明らかである。文中の「去」と反対に、上で検討していたように、文末の「去」は伝達意図と対人関係の状況に応じた場所目的語と目的動詞句の前方移動というプロセスを経ている。この語順変動につれて、文末の「去」がそれなりの機能を果すようになったという結論が導かれている。[11]

(47)と(48)は後項述語で述べられる出来事を「去」で導入するが、その出来事の実現にかかわっている原因、手段、条件、様態などを示す要素が「去」の前に来るのが多く、後項述語とその要素を結ぶ機能に基づいて、「連結詞」又は不変化詞(particle)と認定されるのであろう。その役割を示す例をもう少し見てみよう。

(49) a.以頑強的意志去戦勝困難（強い意志でもって困難を克服する）
b.通過写信去交流感情（文通を通して感情を交わす）

(47)－(49)のように、句と句ないし節と節を結び付ける役割ばかりでなく、文中の「去」は文末の「去」と同様に、対人関係が絡んでいる状況の元で機能するケースも見られる。それは話し手の意志表明と依頼・命令の2つに現れ、反語と揶揄を表すことがなく、文末の「去」ほど複雑な意味機能をもっていない。

(50) a.我 去 想想（ちょっと考えてみる）
b.你 去 想想（考えてみて）

(51) 下定決心、不怕犠牲、排出万難、去争取勝利（=(1a)）

(50)は意志表明と依頼の文脈において文中の「去」が意志表明と依頼のモダリティを表す例である。文中の「去」の意志表明と依頼は文末の「去」と違うのは、導入される事柄よりも、聞き手又は話し手指向の性格が強いという特徴をもっている点である。つまり、後接する出来事よりも、その出来事の主体におもきがおかれているわけである。そして、(51)のように、呼び掛けとしてのスローガンにも文中の「去」が現れ、直接的な対人関係を構成しない場合があることが特徴的である。 文中の「去」と対照的に、文末の「去」は必ず聞き

手と構成する会話の場面でなければならない。

4·2 文中の「来」

「V+来」から変わってきた「V･･･来」のような分裂方向補語を除いて、「来」が文末に来て文法機能を果す例は観察されない。文中の「去」と同様に、文中の「来」も「連結詞」又はモダリティの標識として用いられる。その状況が「去」と異なる様子を呈しており、元の直示的移動動詞の特徴を反映している

上の(49)の「去」の代わりに、反対語とされる「来」に置き換えられる。

(52) a.以頑強的意志戦勝来困難 (=49a)
b.通過写信来交流感情 (=49b)

(52)に示すように、統語的に文中の「去」と「来」の交替が可能である。しかし、その選択によって、状況の把握の仕方が異なっており、元の述語動詞の性格と合致するものである。

(53) a.我来談談我的想法 (私の考えを言ってみよう)
b.我去談談我的想法 (私の考えを言ってみる)
(54) a.我来自我介紹一下 (ちょっと自己紹介します)
b.我去自我介紹一下 (ちょっと自己紹介してくる)

(53)aと(54)aが示すように、「来」を用いる場合は、話し手と聞き手が会話する場面に限られ、話し手の意志を表しているが、聞き手がその行為の影響を直接受けたりするのが、文中の「去」そして文末の「去」と異なるところである。文中の「去」も文末の「去」も、聞き手が直接影響を受けない事柄を導入する。「去」のこの特徴は、その「外向き」(outward)の特性によるものである。「去」は発話時の場面を共感する空間としており、それによって導入される事柄を、「外向き」に移動する目的のように捕えられるわけである。これは聞き手指向の依頼表現にも言えることである。

(55) a.你来談談你的想法 (自分の考えを言って下さい)
b.你去談談你的想法 (自分の考えを話しに行ってください)
(56) a.你来自我介紹一下 (自己紹介してください)
b.你去自我介紹一下 (自己紹介をしてきてください)

述語動詞として機能する場合、「来」は「外向き」の「去」とは逆に、「内向き」の特性をもっている。(55)aと(56)aでは話し手の依頼を表しているが、話し手がその行為の影響を受ける「受け手」でもあると理解され、文法化される「来」もその意味特徴が保持され、「内向き」の状況を示している。反対に、(55)bと(56)bのように、「去」を使うと、話し手と聞き手の働き掛けの関係が変わり、導入される行為は第三者向けのものになってしまう。文中の「去」の(51)の例に戻るが、呼び掛け人として、その行為の遂行に必ずしも参与しないので、「去」が適切なのである。上の例に場所目的語を挿入することができるように、「去」は移動という元の動詞の読みが強い。

文中の「去」と「来」の文法化する動機付けについては、日本語の「行く」と「来る」のプロセスによって立証できる。そして、それは文末の「去」のような語順移動を伴うプロセスとは異なる側面を表しており、中国語の直示的移動動詞の文法化を理解するためには、「いく」と「くる」のプロセスと関連付けることが必要とされる。

5.「いく」と「くる」

「いく」と「くる」は助動詞(auxiliary)の下位範疇である補助動詞と認定され、統語範疇が固定化しており、文末の「去」のような未分化のものではなく、整然たる意味体系をもっている。そして、「いく」と「くる」の文法化は、文末の「去」のような語順移動ではなく、文中の「去」と「来」と同様に、意味の抽象化の結果である。つまり、結合される動詞述語の意味合いによって、「いく」と「くる」が移動という意味が失われるプロセスである。言うまでもなく、「去」と「来」とは逆に、この抽象化は連動文の前項動詞でなく、後項動詞として機能するのを経路とするものである。

(57) a.田中は急いでいった/きた
　　b.田中は帰っていった/きた
(58) a.田中は本を借りて、急いでいった/きた
　　b.田中は本を借りていった/きた
(59) a.本は借りられていった
　　b.*本は借りられてきた

(57)aと(58)aでは、「いく」と「くる」は主動詞として機能しており、間違いなく本動詞である。(57)bになると、「帰る」が主動詞として機能し、「いく」と「くる」は直示的方向を示しており、移動の意味が弱まってきており、抽象的な意味機能を果す要素と見て取れる。(58)bであるが、「いく」と「くる」は動作主の「田中」の移動を表す述語と理解することもできるが、目的語の「本」にかかるのならば、「借りる」の結果を説明する要素として主動詞ではな

く、補助動詞として解釈できる。(59)のように、themeの「本」だけを取り扱うと、その両義性がなくなり、機能語の性格が一段と明らかになってくる。そして、(59)bに示すように、受け身の場合は、その「外向き」の特性と照応し、「外向き」の「いく」としか共起できない。このように、「いく」と「くる」は補助動詞として機能する場合において、元の動詞の特性に束縛され、「外向き」と「内向き」の状況に応じて、「外向き」の要素と「内向き」の要素に分化され、文中の「去」と「来」のプロセスと似ており、言語プロセスの相対的な普遍性を示している。「いく」と「くる」のプロセスはその意味特徴に動機付けられるものではあるが、その使い分けは根本的には話し手の状況の把握の仕方に支配されるものであると考えられる。2つの選択の相違が幾つかの面に現れる。

(60) a.生きていく
　　b.暮らして来た

(60)では「いく」と「くる」はアスペクトとされる「継続」の標識として機能しており、話している時点を基準に、過去には「くる」が用いられ、未来には「いく」が用いられている。過去から現在までの時間的な流れを「くる」で示すのは、時間を空間への認識でもって理解し、表現する認知プロセスの反映である。これは英語の"be going to"の未来標識の解釈に通じるものである(後述)。一方、現在から未来へは「いく」で表現するのは、未体験、未認知の時間的状態を「外向き」の空間的状態と同じように認識するからである。もち論、過去を「いく」で表現するケースもある。それは動詞述語の述べる状況が話し手から物理的にも心理的にも離れていく状況でなければならない。

(61) a.金魚は次々に死んでいった
　　b.??金魚は次々に死んできた
(62) a.船はだんだん小さくなっていった
　　b.??船はだんだん小さくなってきた

(61)と(62)は、実際のところ、主語で示される主体としての話し手から、抽象的な視点からも所在する位置からも、遠ざかっていく状況を示しており、「内向き」の「くる」がそぐわないのも当然のことである。ところが、話し手が直接経験したりする状況になると、時間と関係なく、「くる」が選択される。

(63) a.疲れてくると、能率が下がります (外国人:308)
　　b.??疲れていくと、能率が下がります

「くる」と「いく」のこういう意味機能の相違から、同じ文脈においても、その選択によって話し手の関与の仕方が異なっていることが窺える。

(64) a.おもしろくなってこないうちにやめたのは残念でしたね（外国人:308）
b.この小説はこれからだんだんおもしろくなっていく（外国人:62）
(65) a.これから寒くなっていく
b.これから寒くなってくる
(66) a.水がどんどん増えていく
b.水がどんどん増えてくる
(67) a.移動経路について仮説が提案されてきた
b.内陸に多くの地方都市が建設されていった（アフリカ）

(64)では、「小説」と話し手のかかわり方が「いく」と「くる」の選択によって異なっている。「くる」ではその小説を読んだりすることが含意されるのに対して、「いく」になると、その小説を説明することにとどまっている。(65)と(66)は自然現象を述べており、話し手が感情移入し、その自然現象が自分の身に及ぶものとする場合は、「くる」であり、客観的事実として捕えるなら、「いく」となる。(67)は2つとも歴史の事実を述べている文である。(67)aの「くる」はその事実が話し手が直接調べた結果や、話し手が望んでいる状況など、話し手の関心事になっている、という裏の意味が含まれている。これに対して、(67)bの「いく」は、話し手が語り手としてその事実の情報を提出するだけであって、話し手の関与に支配される範囲外の事柄と受け止められる。

本章の冒頭で触れたように、中国語において、直示的移動動詞の文法化は、直示的方向を示す方向補語と、モダリティなどの標識と、2つの局面に表れている。補助動詞の「いく」と「くる」の機能は方向補語に似通ったものである。ただ方向補語のほうは、基本的には物理的方向を示す機能しかなく、アスペクトの標識はより複雑な複合形式に担われたり、主体の関与は表面化しなかったりして、「いく」と「くる」とは対応しない。意味的にも統語的にも対応するとされる語彙項目が、異なったプロセスをたどることが、文法化は様々な要素に動機付けられる複雑な言語現象として、相対的な普遍性しかない、ということを物語っている。

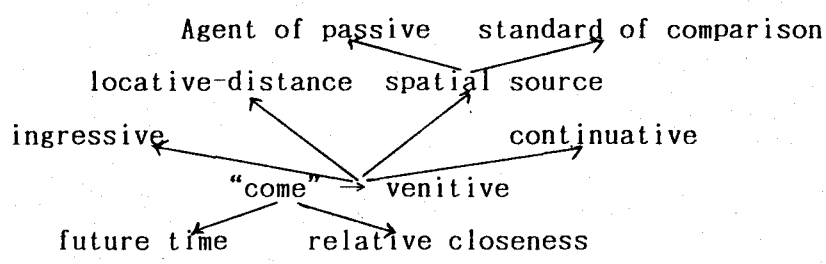
(68) a.張三 回<u>来</u>/<u>去</u> 了（張三が帰ってきた/いった）
b.張三 借<u>来</u>/<u>去</u> 了 一本 書（張三が本を借りてきた/いった）
(69) a.活 <u>下去</u>（生きていく）
b.冷 <u>起来</u>（寒くなっていく/くる）
(70) a.*累 <u>来</u>（疲れてくる）

b.*有意思 去（おもしろくなっていく）

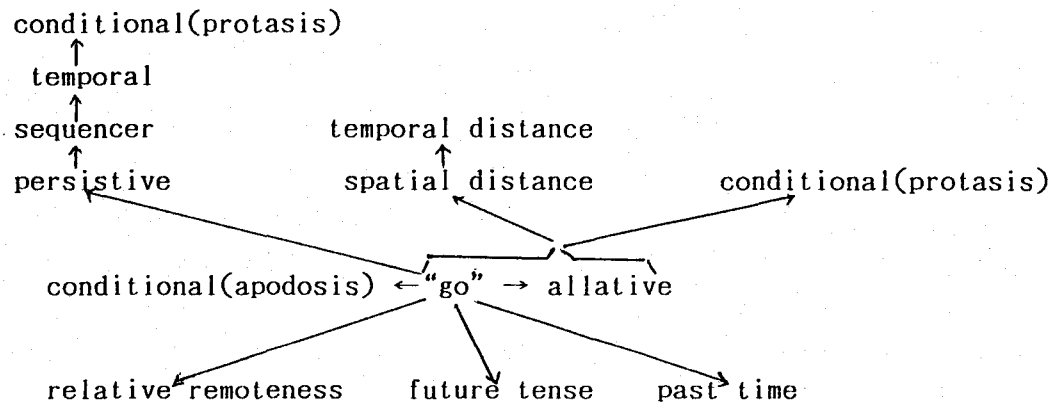
6. おわりに

直示的移動動詞の文法化は普遍的なプロセスである。Lichtenberk(1991a)が大洋州の諸言語に見られる“go”と“come”のような語彙項目が様々な文法機能を果す文法化のプロセスを分析し、その相関関係を次のように図式している。

(71) Grammaticalizations of COME forms



(72) Grammaticalizations of GO forms



文法化を分析する際、(71)と(72)のようなネットワークに注目され、その事例から文法化について,いろいろな説明が試みられている。中には最も多く挙げられるのは,英語の“go”が“be going to”という形で未来を表すプロセスである。

(73) a.Henry is going to town.

b.Are you going to the library?

c.No, I am going to eat.

d.I am going to do my very best to make you happy.

e.The rain is going to come. (Heine et al.,1991a:70)

Heine et alの解釈によると、(73)eのような純粋なテンス標識として機能する助動詞は、(73)aのような物理的移動を表す動詞のメタファーの結果であるとしている(1991a:46-47)。一方、Hopper & Traugottは、"be going to"の標識機能は"go"だけの問題ではなく、"go(ing)"と"to"で構成される文脈により、未来は目的から(futurity from purposives)という会話的推論の意味化(semanticization of converzational inferences)に動機付けられるものとしている(1993:84)。いずれにしても、(73)が示すように、文法化は語彙項目の意味変化が伴い、発話機能を果しながら、統語範疇の連続性を呈するプロセスであるということは間違いない。

ところが、"be going to"というのはパターン化され、範疇化されたもの(助動詞)である以上、それだけに限られた議論は網羅的とは言えない。文中の「去」と「来」そして「(て)いく」と「(て)くる」は、範疇化しているものであるとは言え、本章の中心となっている文末の「去」のように、完全に範疇化されていないにもかかわらず、あるコンテキストにおいて、それなりのモダリティの機能を果すという事象が中国語に見出されている。このプロセスは、文法化とは何かという問題だけでなく、文法化研究はどういう方向にそって展開すべきかという方法論の問題も提起される。この問題について、Hopper(1991:32)の発言には我々が直感的にも共鳴を覚えているが、文末の「去」のプロセスによってその理解を深めることができるのであろう。

(74) ...the linguist would not necessarily begin with already grammaticized forms and ask about their previous history, but would be able to select from among the rhetorical resources of texts those recurrent collocations that were candidates for being, at least marginally, " in " the grammar of the language.

注:

1) 一般的には移動動詞は方向移動動詞と様態移動動詞(manner-motion verb)の2つに分けられているが、第8章で議論する経路を取る通過動詞も移動動詞の下位分類になるのであろう。

2) 先行研究として主には、文末の「去」と「来」をparticle of purposeと主張するChao(1968:479-80)、連述構造における「来」と「去」の「虚化」を指摘する朱(1982:165－66)、動詞として文中の「去」と文末の「去」を比較する陸(1986)、「虚化」の文中の「来」と「去」を記述する郭(1988)などがある。

3) モダリティは基本的に義務的(deontic)なものと認識的(epistemic)なものの2類に分

かれ議論されているが(Palmer1986を参照)、本研究で議論しようとする反語や揶揄などがその範疇に収まっていないので、モダリティとは何かの再検討が必要かも知れない。

4) 例(3)の議論では、移動を表す述語動詞がなければ場所目的語の挿入ができないと述べたが、疑問詞のような場所の指示性(referentiality)がない場合、又「我后辺看看去」(私は裏へ行ってみる)(茶館)というように、場所が定(definite)の場合、その場所目的語の挿入が可能である。こういう意味でも、文法性は連続的なもので、度合の問題であると言えよう。

5) 勧誘表現は話し手指向でも聞き手指向でもある意味では、意志表明と命令の中間にあるものと言える。そして「走!找个地方喝两盅去!」(行こう。いっぱい飲もう)(茶館)というように、勧誘表現にも「去」が関与するが、分析の簡明を図ってそれを省くことにする。

6) 「任凭」は「任せる」と訳すように、狭い意味範疇として、上位概念を示すモダリテイの用語には不向きである。そして、以下の議論に示すように、「趨向補語」の別ものとするのが適切である。

7) 日本語において同じことが観察される。5節で分析するように、「いく」又は「くる」は補助動詞として働くのは、行為との関連性に起因するものであり、「向かう」は場所としか関連しないので、「にむかって」のような複合格助詞を構成するが、「てむかう」のような補助動詞にならないのである(第5章を参照)。

8) 「到」は前置詞か動詞かは複雑な問題で、ここに限って便宜的に動詞とする立場を取る。

9) これは方向補語と分裂方向補語のことであり、「V去」と「V・・・去」の意味・統語の相違については、Kimura(1984)に詳しい。

10) 朱(1982:166)は「騎馬去」という例に基づき、すでにその両義性を指摘している。

11) 陸(1986)は「去」が文末に来るのは、北京語の原型といった趣旨の説明をしているが北京語においても平叙文の場合、「NP(場所)+去」が成立しないという事実からも窺えるように、その分析には議論の余地がある。意味の差に着目するこの研究では、語用条件によって語順変動のプロセスが起こっていると考えている。もち論これは更なる歴史的調査研究を否定する意味ではない。

第7章　GIVE動詞の文法化

0. はじめに

GIVE動詞(授与動詞)の「給[gěi]」は、第4章の「在」と第5章の「向」などと第6章の「去」と「来」及び第8章で分析する「通過」と「経過」とは異なり、純粋な3項動詞である。所有関係の変化をもたらすという意味では、人間起点(human source)と人間着点(human goal)で構成される抽象的な移動という関係的プロセスを表すものとして、空間動詞の範疇に入れ考察するべきである。他の空間動詞と同様に、「給」は与格標識(dative marker)や受益格標識(benefactive marker)として機能するプロセスを呈しており、GIVE動詞が受益構文に関与するという文法化の普遍性を立証するものになる。[1)]

GIVE動詞を空間動詞とするのは、その意味機能だけでなく、文法化の結果として、それが他の文法形式と共起したり交替したりする統語上の特徴からの考慮でもある。中日語のデータを調べると、第6章で検討していた直示的移動動詞又は第5章で調べた方向動詞とかかわっている統語現象が観察される。

(1) a.太郎がお土産をもって<u>きた</u>
　　b.太郎がお土産をもって<u>くれた</u>
　　c.太郎がお土産をもって<u>きてくれた</u>
(2) a.他 <u>給</u>我 帯<u>来</u> 一件礼物 (彼は私にお土産をもってきてくれた)
　　b.張三 <u>向</u> 李四 介紹 王二 (張三が李四に王二を紹介する)
　　c.張三 <u>給</u> 李四 介紹 王二 (張三が李四に王二を紹介する)

GIVE動詞の文法化は活発的で、多様性のある普遍現象ではあるが、中国語と日本語に限って言えば、(1)と(2)のごとく、一方では補助動詞として機能し、一方では前置詞として機能しており、それぞれ異なる統語範疇になっている。第7章では、日本語の受益構文と関連付け、中国語の「給」の文法化を分析していく。第1節では、述語動詞として機能する「給」を調べ、文法化する内在的条件となるその意味的抽象性、関係性という特性を説明する。第2節では、「NP1+<u>V+給</u>+NP2+NP3」というパターンにおける「給」の接辞化を分析し、それを複合動詞の後項動詞とする従来の記述の問題点を指摘する。3節では、「NP1+VP+NP3+<u>給+NP2</u>」の構文において、「給」が述語動詞から文法標識の前置詞へシフトするプロセスをたどりながら、前置詞から2節で議論した接辞への動機付けを解明する。4節では、「NP1+<u>給+NP2</u>+VP+

NP3」というように、「給」は前方移動に伴って、与格標識から受益格標識への機能拡大を取り上げ、受益格標識の機能を細かく分析し、文法化される「給」の原型を提示する。5節では「給」の分析をまとめ、6節では、日本語及び英語と関連付け、「給」のプロセスの特性を立証する。

1. 動詞の「給」

「給」はGIVEとの関連で言えば、"A CAUSES B TO HAVE C"("A使B有C")という意味を基本的な意味としてもつものと解釈される。それはいわゆる3項動詞(three place verb)であり、構成された文は次の例のように、「NP1+給+NP2+NP3」という構造になる。

(3) a.張三 給 李四 一本書 (張三が李四に本を1冊やる)
b.企業 給 学校 許多書 (企業側が学校のほうに本をたくさんやった)

構造的に見れば、NP1は主語であり、NP2は第一目的語(primary object)であって、NP3は第二目的語(secondary object)である。[2] 意味的にはそれぞれ、動作主(agent)、受け手(recipient)、被動者(patient)を指す。元々、人間どうしの行為なので、NP1とNP2を担うものは、共に人間名詞(human noun)でなければならない。ただ、メタファーとして、(3)bのようにそれと関連のある組織などを表す名詞も用いられる。後述する文法化された「給」もたいてい人間名詞を導入するのだが、そのことは動詞の「給」の意味特徴によって規制されているものと考えられる。

次の(4)bに示されるように、補語(complement)として、NP2(受け手)は、英語のようにNP3(被動者)と自由に位置が変更出来ない。この構文上の制約は「給」とNP2の隣接性と言うが(第1章2節を参照)、「給」がNP2に対して直接働き掛けるという意味的緊密性とも理解できる(下を参照)。また、NP2は日本語のように、人称の選定によって動詞を選択することがない。言い換えると、「給」に含まれる方向性は、日本語のような話し手と聞き手の関与による直示的なものではなく、客観的なものであって、動作主から受け手への働き掛けが一方的である。「給」が受益構文の場合でも、「(て)やる」、「(て)くれる」のように常に恩恵表現には限らないのは、これに因るのだろうと考えられる(後述)。

(4) a.John gave Mary a book.
a' John gave a book to Mary.
b.張三 給 李四 一本書
b' *張三 給 一本書 李四
c.太郎が(僕に)本をくれた

c' 僕は太郎に本をやった

「給」及びその文の意味特徴を規定する要はNP3である。例(3)に示したように、NP3にはまず具体的なもの(entity)がある。そういう実物以外に、次の例のような抽象的なものもある。

(5) a.給 李四 一点時間 (李四に時間を与える)
b.給 她 一条活路 吧 (彼女に生きる道を与えよう)

(5)aはメタファー表現であり、場合によって、「(時間を与えて)考えさせる」という解釈が得られるように、与え手の受け手に対するある影響・働き掛けを表すものである。(5)bも同じことで、実際の意味として、「彼女を生きさせよう」ということである。上述の緊密性は、このように、NP2が被動者として意味解釈できる点に表れている。行為名詞(action noun)がNP3を担う例を見ると、「給」に含まれる関係表示の特性が一層明瞭になってくる。

(6) a.我們 給 敵人 以 厳重 的 打撃 (我々は敵に容赦ない打撃を与えた)
b.給 我們 以 太難堪 而可怕 的 暗示(我々は決まり悪いかつ恐ろしい暗示が与えられた) (小説)

(6)を言い換えると、(6)aは「打撃敵人」になり、(6)bは「暗示我們」になるが、「給」は、「敵人」と「打撃」、「我們」と「暗示」にある元のVO関係を結び付ける。注目すべきは、ここの「以」である。例(6)のような行為名詞の場合、「NP1+給+NP2+以+NP3」というのがほとんど書き言葉においてパターン化され、「以NP3」の「以(以て)」は影響・働き掛けの内容を導入する道具格(instrumental)的なもので、NP3は被動者よりも「給」という出来事の手段と理解すべきである。

「給」は上の関係性と関連して、次のように、使役表現にも関与している。

(7) a.張三 給李四 一本書 看 (張三が李四に本を見せた)
b.給 口水 喝 吧 (水を飲ませて下さい)
c.我 可 不再 白 送 你 茶 喝 (ただでお茶を飲ませることはもうないよ)

(7)aと(7)bの「給」は、使役のような意味を表しており、文法化された要素に近い。しかし、それは付加されたVPに付与されたもので、独立した機能語とは言えない。意味的に考えて、(7)aと(7)bはいずれもNP1が具体的なNP2(ここでは「書」と「水」)をもってきて、NP3に渡すというプロセスが想像出来る。(7)cの中の「送」が具体的な動作を表す動詞で、文法

化された要素と認められないのと同様に、(7)aと(7)bの中の「給」も全く同じ構文である以上、動詞と見なすべきである。このようなVPの付加は、いわゆる連動文になるが、この種の構文は、後接するVPが前のVPの目的などを表すのが一般的である。「給」の場合も、(7)や下の(8)の会話が示すように、後接するVPがその目的を表している。

(8) "我想把你的右手給我･･･"（君の右手を貰いたいが）
"你做甚(什)麼?"（(貰って)何をするの）
"給我･･･親吻"（貰ってキスする）（家）

使役標識である「讓」と比べると、この「給」の非機能語の性格が分かる。

(9) a.張三 讓 李四 看 一本書 （張三は李四に本を見させた）
a'*張三 讓李四 一本書 看
b.張三 讓李四 去 （張三は李四を行かせた）
b'*張三 給李四 去
c.把 書 給 我 看看（本を(渡して)見せて下さい）
c'*把 書 讓 我 看看

(9)aは「給」と同じ構文のように見えるが、「讓」は「李四看一本書」という埋め込まれた文全体にかかっており、「給」のような渡すというプロセスが必ずしも含まれるわけではない。(9)a'が「給」のような連動文にならないことがその左証になる。そして、(9)bに示すように、「讓」は自動詞構文も作れるが、「給」はあくまでも、あるものを与えてからのことで、自動詞のような被動者(他動性)のない表現とは対立している。この点は文法化された「給」にも基本的な傾向として見られる。(9)cの通り、目的語の前方移動をさせる「把」と共起する場合に、「給」は動詞述語として機能するからこそ文が成立するが、機能語として機能する「讓」がくると許容できなくなってしまう。

「給」が動作性が乏しく、関係性が強いという基本的な性格は、以上見た抽象性、使役性のほかに、統語的にも現れてくる。「給」の後に補語が出て来ないのがその1つである。

(10) a.*張三 給完 李四 一本書（張三が李四に本をやり終わった）
b.*張三 給好 李四 一本書（張三が李四に本をやっておいた）
c.張三 喫完 飯（張三が食事を食べ終わった）
d.張三 写好 信（張三が手紙を書き終わった）

「吃」や「写」と違って、「給」の結果がNP3にあるのではなく、受け手のNP2における状況の

変化(通常は行為)に現れる。従って、NP3を説明する部分(結果)が出て来ないのは当然なことである。

ここまでの議論をまとめてみると、次のようなことが言える。「給」には3つの階層がある。1つ目は「A使B有C(AがBにCを所有させる)」であって、原型的なものである。2つ目はNP3が抽象(行為)名詞であって、NP2が単純な受け手ではなく、「給」がNP2とNP3の間にあるOV関係をメタフアーとして結ぶ場合である。3つ目は、NP3と共起関係のある動詞句が付加され、「給」の働きを受けてNP2にある行為が起こるという状態変化の場合である。後になるほど、「給」の関係性が強くなり、文法化された「給」も部分的にその延長線にあるものと思われる。

2.「給」の接辞化

例(3)aは「給」の替わりに、「送」を使うことが出来る。そして、「送」の後にまた「給」を入れることができる。

(11) a.張三 給 李四 一本書 (=3a)
b.張三 送 李四 一本書
c.張三 送 給 李四 一本書 (張三は李四に本を一冊やった)

(11)cの「送給」は(11)aと(11)bと同じ意味機能を果しているように見え、単なる複合動詞とみなされてきたが、この種の「給」は第4章でみた「在」と第6章でみた「向」と同様に、接辞化されたものであると主張したい。形態化としての接辞化は一般的に範疇化を経たプロセスと認識されるが、伝統的な記述文法の問題点を強く意識し、「給」の文法化分析の突破口として、まず接辞化を分析し、その経路としての範疇化の分析は3節に回すことにする。

例(11)bで見たように、方向を補語に取る3項動詞としての「送」は、「給」と結合したその複合形式とほぼ同じ意味を表しており、(11)cの「給」は随意的な要素のようにも見える。だが、次の例が示すように、方向性が暗示される動詞の場合、その状況に応じて、「給」は必須要素として付加されなければならない。

(12) 現在 先 写 両封 信、一封 給 琴表妹、一封 留給 爺爺 (手紙を2通書いておこう。1通は琴従妹にやり、もう1通はお爺さんに残す) (家)

「留」は「送」と違って、その受け手も予想されるが、表現上動作主と被動者の2項で構成される述語であって、例(11)bの「送」のように、直接2項目的語を取ることが出来ない。「給」

を付けて始めて、「留」の着点(受け手)がマークされるのである。即ち、「給」には出来事の着点(受け手)をマークする働きがあるのである。(11)cの場合は、「送」自体が受け手を無標に表示する機能をもつが、「給」の付加によって、「送」の受け手を説明する働きがある。このことは目的語の前方移動を可能にする「把構文」でテストできる。

(13) a.張三 把書 送 給 李四 了 (張三が本を李四にやった)
b.*張三 把書 送 李四 了

「把構文」は既知の目的語を取り立てて、それにどのような働き掛けを加えて、位置変動なども含まれた状態変化が起こっているのかを説明するものである。3項動詞として使われる「送」でも、(13)bに示されたように、「給」を落とすと、不適格文になる。つまり、出来事の着点という作用指向の説明に応じて、それを明確にするには「給」が用いられるわけである。

ある出来事の動作主、相手、時間、空間といった関連要素を説明する場合、「是・・・・・・的」(emphasis)という構文が用いられる。次の例に示すに、受け手を説明する場合、そういう埋め込み文の中の「給」は動詞の後に付けなければならない。この「給」が省略出来ないことも受け手を示す「給」の標識機能の特徴を物語っている。

(14) a.信 是 読者 寄給我 的 (手紙は読者が私に送ってくれたの)
b.*信 是 読者 寄我 的

この「給」を複合動詞の後項動詞と認定するのは、上で分析していた標識機能を無視して、表層上の特徴を根拠にするものである。Li(1990)が「V+GEI(給)+NP2+NP3」の中の「給」は、" is not simple a goal marker "と明確に指摘している。その理由の1つとして、完了アスペクトの標識「了」が「給」の後にくることを挙げ、" the aspect marker Le cannot follow the verb Song ' send ' immediately; instead, it occurs after verb+Gei. This suggests that Song Gei should be treated as a compound verb "と結論付けている。[3] この意見には部分的に賛成出来る。確かに、「了」については、動詞の接尾語とまで見なす意見もあり(陸志韋等、1975(1957);Li & Thompson,1981)、これを動詞か否かのテストに用いることも有効かも知れない。しかし、それは接辞化された「給」が動詞の「給」と統語上の連続性をもつことを示すものにほかならず、それに基づいて、「給」の統語範疇を認定出来ない。我々がここの「給」を動詞から切り離して別範疇と認定するのは前述の標識機能に加えて、以下の統語上の理由にもよる。

1.完了アスペクトの「了」は「給」を落として「送」の後に付けても、或は文末(名詞)に付

けても、基本的な意味が変わらない。

(15) a.張三 送了 李四 一本書 (張三は李四に本を一冊やった)
b.張三 送 給 李四 一本書 了
c.張三 把書 送 給 李四了

「了」は文中の位置が移動できるので、それを手掛かりに、統語範疇を断定することには無理がある。

2.反復疑問の場合、「給」が「枠外」になる。Li(1990)でも用いられるV+NOT+Vという反復疑問の形によって、動詞か非動詞かテスト出来る。

(16) a.張三 送不送 給 李四 一本書? (張三は李四に本をやるのか)
a'.??張三 送給 不送給 李四 一本書
b.知 不 知道? (知っているか)
b'知道 不 知道

単純な複合動詞であれば、(16)bのように、疑問文を作る場合、2つの形があるが、(16)a'のように、「給」は「V+NOT+V」に内包されない。着点という標識機能がこの形式上の独立性を備えさせていると考えられる。

3.「給」はNP2と共に移動し、Vと分離出来る。

(17) a.張三 送給 李四 一本書 (=(11c))
a'張三 送 一本書 給李四
b.張三 打開 箱子 (張三が箱を開けた)
b'*張三 打 箱子 開

(17)a'では、「給」は「送」と切離れ、「李四」と一つのPPを作るが(3節を参照)、意味関係は変わっていない。単純な複合動詞なら、このような構造的な分離が許されない((17b'))。構文上単位間の分離ができるのは、その相対的な文法機能の独立性を備えているからである。

動詞の後に付けられる「給」は出来事の参与者の一つである受け手を導入する機能から見れば、それは文法的意味を表す要素であり、接辞であると認められる。ただ、この接辞化は例(17)a'に示されたように、連動文の中において、「給」が前置詞化するというプロセス

を経路とするものである。動詞から前置詞へそして前置詞からこの接辞へのプロセスの動機付けについての分析は次の節に移す。

3. 述語動詞から前置詞へ

第4章で分析したように、存在動詞の文法化は、述語動詞の「在」が「在(VP1)+VP2」という連動文の中で実現したプロセスである。「どこかにいれば、何かをする」という推論がその動機付けになっている。第5章の「向」も同じことである。ところが、「給」はそれらとは異なり、「VP1+給(VP2)」というように、前項述語動詞でなく、後項動詞として機能しながら、標識機能を果すようになってきたと思われる。それはつまり、「何かをして、誰かにやる」という状況から、「何かをして、誰かのためになる」という推論に動機付けられると考えられる。「VP1+給(VP2)」における「給」が、述語動詞としても文法標識としても、解釈しうるという両義性がこのことを物語っている。例を見てみよう。

(18) a.張三 买 書 給 了 李四 (張三が本を買って来て、李四にやった)
b.張三 买 書 給 李四 看 (張三が本を買って、李四に(渡して)読ませる)
c.張三 买 書 給 李四 (張三が本を買って李四にやる/張三が李四に本を買ってやる)
d.張三 送 一本書 給 李四 (張三が李四に本を1冊送る) (=17a')

(18)aは、2つの出来事を報告し、「給」は後項動詞として機能している。アスペクト標識の「了」が「給」の後についているのがその証である。だ2節では複合動詞の後項か接辞かの議論では、「了」によるテストの有効性を否定したが、それとこれとは矛盾しない。というのは、「張三买了書給李四」が成立しないように、連動文の場合、アスペクトをマークすると、それはほとんど後項述語に付けられるからである。(18)bの「給」は第1節に示した通り、使役に関与するものではあるが、より抽象的な述語動詞と見なしてよい。(18)cになると、その「給」は相変わらず述語動詞と思われるが、未実現の状況として、「李四にやる」という授与の意味から「李四のため」という目的の意味に拡大解釈されうる場合がある(下の(24)と(25)の分析を参照)。(18)dのように、「送」のような3項動詞が述語になる場合には、第1節で触れた隣接性により、受け手を第1目的語として要求するにもかかわらず、「給」でもって第1目的語を後方移動させ、「送」が主動詞(main verb)として第2目的語の被動者を導入するので、「給」は述語動詞よりも文法標識として読み取れる。これは" John gave Mary a book "と" John gave a book to Mary"との変換関係(dative shift)とは同質のものではないにしても、「給」がtoのような役割を果すのが明らかである。

ところで、(11)bの「張三送李四一本書」と、(18)dの「張三送一本書給李四」とでは、何が

違うのか。つまり、無標の文法関係が有標化される動機付けが何かが問われるのである。実例を見ながら、この問題を考えて見よう。

(19) a.又悄悄遞過一朶絨花給蕭蕭（こっそりと蕭蕭に花をわたした）（蕭蕭）
b.*又悄悄遞過給蕭蕭一朶絨花
c.??又悄悄遞蕭蕭一朶絨花
d.又悄悄遞給蕭蕭一朶絨花

(19)の述語動詞の「遞」は(12)の「留(残す)」と同様に、明確な3項動詞ではないので、(19)cのように裸の形では受け手と直接結ぶことが適切ではない。(19)dが示すように、「給」をつけて受け手を示すことが一般的である。(19)bが示したように、「遞」の後に「過」を付け、更に「給」を付け加えることができない。「過」は「遞」の物理的移動性を示すもので、受け手とは関係しない。「又(また)」は出来事の重複を意味し、「給NP2」の部分と関連しない。従って、(19)aのように、動詞句の後に直ちに受け手を導入せず、受け手(NP2)の後方移動によって、譲渡物(NP3)が優位に立たされて、何をやったかの「何」を目立たせる(highlight)ようになってくる。つまり、(11)bと(18)dが異なるのは、(18)のほうが「給」でもって第1目的語を後方移動させ、第2目的語を強意することは、話し手の状況を把握する仕方が変わってきたということほかならない。言い換えると、(18)dにおいて、「給」は受け手を標識ると理解されるのは、「送」が第2目的語(被動者)指向であり、「給」が第1目的語指向であるという役割分担の拡大解釈に過ぎない。これは「何かをして、誰かのためになる」という推論の表れでもある。「送」ではなく、上の「遞」と同じような述語動詞が出る例をもう1つ見て、このことを理解してみよう。

(20) "他児子出門了一年多、寄了几个銭給他了!"（彼の息子は1年も家を離れていたのに、彼にどれぐらい送金してきたか）（小説）

(20)ではNP3(「几个銭」)が問題になって、直ちにVP(「寄」)の後に付けられるが、逆にNP2が既知の受け手としてフォーカスにならない。NP2が問題になるのなら、上の「NP1+V+給+NP2+NP3」のパターンで表現したほうが自然である。つまり、受け手を強意することによって、後置している前置詞の「給」が前方移動され、接辞化されるのである。次の例がこの点を裏付けている。

(21) a.張三 寄 給 誰 那筆銭 了?（張三が誰にそのお金を送ったのか）
b.張三 (把)那筆銭 寄 給 誰 了?（張三がそのお金を誰に送ったのか）
c.??張三 寄 那筆銭 給誰 了?

(21)aでは、受け手が問題になって、「給」で直ちに受け手を導入するのである。(21)bの場合、NP3が主題化され、動詞句の前に移動され、優位に立つのだが、それは主題化の前方移動という原則の問題で、説明される部分の「誰」がやはり、「給」の後に置かなければならない。対照的に、(21)cは、設定された状況のもとでは、aとbがまず選択される。先程触れた隣接性と優位性の一致という原則が部分的にここに現れている。「給NP2」はさらに動詞句の前に移動されるのが一般的で、4節で検討する「給」の一歩進んだ文法化である前置の前置詞化になる。

例(18)の議論では、「給」の両義性に言及したが、文法化の経路を理解するために、「VP1+VP2(給)」の状況をもう1度見てみよう。

(22) a.他順手拿起蜂王漿給気功師(彼は無造作にロイヤルゼリーを手に取って気功の先生にあげた)(愛)

b.他遞一張名片給我(彼は私に名刺を1枚くれた)(愛)

(22)aでは「給」が継起的な動作を示しており、その場面(scene)の一環をなすが、文法機能を果さない。前の「拿」には方向性の問題が問われなくて、「給」も受け手をマークする機能が付与されていない。しかし、方向性のある動詞の場合、(22)bのように、「給」は一つのプロセスの一環としての行為とは考えられず、上で見た標識機能を果している。

「送」などと違って、ある利害関係にあることを示す動詞を見れば、「給」の後置の標識機能がもっとはっきり分かる。

(23) a.張三 売 給 李四 一本書 (張三は李四に本を一冊売った)

b.?張三 売 一本書 給 李四

c.張三 売 李四 一本書

「売」はどちらかというと、「送」と同じでNP1(agent)からNP2(recipient)へ金銭関係を伴うNP3(patient)の移動であって、方向性が付随してる。にもかかわらず、(23)bでは「送」のように、「給」を「送」から切り離しては不自然である。これは何を意味するのだろうか。「売」は売り手(動作主)と買い手(受け手)が共に関与して、達成できる出来事であり、(23)cのように、主語と第1目的語をつなぐのが普通の構文である。この構文上の隣接性がその関連性の緊密さを裏付けている。(23)aのように「給」をつけて、その受け手をマークするが、共演する受け手が出来事と直接かかわっていることに変わりがない。つまり、ここでは売り物(NP3)の優位性を目立たせることがないので、(23)bが成立しにくいのである。「輸(負ける)」や「租(貸す)」なども同じ例である。これは(19)の説明の反証になる。「送」は

NP2にもNP3にもかかわるが、「給」の語順移動によって、そのどちらかを優位に立たせることになる。言い換えると、「給」の後置がNP2を弱化する働きがあるということである。[4]

「売」の反対の「买」は同じ金銭関係を伴うNP3の移動だが、逆方向、つまり出所(source)が補語であり、動作主が受け手である。こういう場合、例(24)aに示すように、当然「买給」は成立しない。しかし、(24)bのように「送」の例と同様に、「給」が付けられている。

(24) a.*張三 买 給 李四 一本書 (張三が李四に本を買う)
b.張三 买 一本書 給李四 (張三が李四に本を買ってやる)

(24)bの「給NP」はVPかPPかは両義的(ambiguous)なものである。一つは「買ってから」「給」をするという動作の継起の意味であり、連動文の後項述語として機能すると理解される。もう一つは、文全体は一つの出来事で、「給NP」は「买」の受益者(beneficiary)を示す付加詞(adjunct)である。この違いは具体的な文脈において区別される。「給」の使役性を思い出して欲しいが、その「給」を動詞だけと認めるのは、「給」がその前に現れる動詞句とその後に現れる動詞句を意味(使役)的に連結する働きがあるからである。同様に、(24)bも「給李四」の後にまた「看」という動詞句を付けると、その「給」を動詞と認めるべきである。ところが、(24)bの「給」は、前の「买」の受益者をマークするとも考えられる。これは音声的根拠がある。動詞の場合、「給」の前にポーズをおいて、変調なしに読まれるが、ポーズをおかずにそれ全体弱く読んだら、受益者を示す「給」になる。そして、構文上の特徴から考えても、ここの「給」を前置詞とみてもよい理由がある。それについては、「画(描く)」のような「生産性」のある動詞の例を見た後で詳述することにしよう。

(25) a.張三 画 給 李四 一張画 (張三が李四に絵を1枚書いてやった)
b.張三 画一張画 給李四 (張三が李四に絵を一枚書いてやる/やった)

「画」は2項動詞であり、普通受け手の存在が問われない。しかし、これも受け手が暗示されるものであって、「給」によって受け手がマークされる。それは「V給」と後置の「給NP」の2つである。(25)bは(24)bと同様に、両義的なものであり、その動詞としての状況は(24)bと同じだが、標識機能を果すことも考えられる。例えば、友人が結婚することで、Aが"李四結婚張三送什麼給他?(李四が結婚するので、張三は彼に何をやるか)"と聞いたら、Bが"張三画張画給他(張三が絵を1枚書いてやる)"と(25)bの形で答えるとき、その「給」は「李四のため」と理解出来る。次の例がその実際の状況を示している。

(26) 請医院的医生来、必須喊轎子給他 (病院の先生に来てもらうにはかごを雇ってあげなければ) (小説)

(26)では「給」は渡すというような具体的な行為とは考えられず、「他」のために、なにかをするという受益表現しか理解出来ない。この受益表現は、4節のところで見るような前方移動のパターンが一般化される。

Chao(1968)は動詞とpresupositionの相違点を3つに分けて述べている。ここではそれを引用しながら、(24)bと(25)bの「給」が非動詞であることの統語上の根拠を列挙しよう。

1.前置詞が" As to the lack of aspects "とChaoが指摘しているように、(24)b(25)bの「給」にはアスペクトの標識がつかない。例えば、「給過李四」にはならない。「給了李四」とも言うが、これは第2節で述べた「給」の両義性による動詞の表現であって、「給」の非動詞の特徴の説明にならない。

2." prepositions do not normally serve as centers of predicates "と指摘されるように、「給李四」の前に「不」を付けて否定したり、「想」という助動詞を付けたり、或は「給」の後に「不給」を付けて疑問を表したりはしない。(24)bと(25)bでは、「买」と「画」がそれぞれ主動詞(main verb)になるわけである。

3." A preposition does not usually omit its object "と分析しているように、(24)bと(25)bでは「李四」が省略出来ない。これは第2節の分析で分かったように、意味的にも「給」がいつも受け手の表出と共に現れるという事実に合致している。もち論ここでは、「給」は既に受け手の範囲を超えて、具体的な移動という物理関係ではなく、動作作用の受け身(作用指向)という抽象関係を示すようになる。Hallidayの言い方を借りて言えば、同じBeneficiaryだが、もはやRecipinentの"to"からclientの"for"へと拡大されている。[5]

「給」はこのように、特別の状況に合わせて、語順が変動され、語結合力も増大し、動詞句の意味内容によって付与される文法機能も多様化される。受け手指示(与格標識)から受益者指示(受益格標識)へ変わるのは「給」の文法化の躍進である。後置の受益格標識が更に動詞句の前に移動され、機能語としての「給」の原型になるが、それについては次の節で分析する。

4.「給」の前方移動

4·1 前方移動の動機付け

「送」が述語になる場合、第2節に示したように、「NP1+V+給+NP2+NP3」という構造になったり、第3節に示したように、「NP1+V+NP3+給+NP2」という構造になったりして、「給」の標識

機能は変わらず、共に受け手標識である。第3節でみたように、方向性と関連のない述語動詞の「画」が来る場合、後置の前置詞の「給」が受け手から受益者を示すようになる。この「給」を更に動詞句の前に移動させたら、どうなるか。まず、同じ「送」の例を見よう。

(27) 張三 給李四 送一本書（張三が李四に本を送る/張三が李四のかわりに(誰かに)本を送る）

ここでは「給+NP2」の前方移動に伴って、「給」は2つの文法的意味を表すようになってくる。1つは「李四」が同じ受け手であり、もう1つは「李四」がその動作作用の受益者である。

この前置の「給」は、第2節と第3節で述べた「送」タイプの動詞と「画」タイプの動詞に限らないで、より多くの動詞述語の連用修飾成分になり、標識機能を果している。こういう構文上の相対的独立性により、この「給」はたいてい完全に文法化された要素(「介詞」)と認められるのである。

「送」の場合、前置の「給」は接辞及び後置の前置詞の場合と同じ受け手の標識だが、そうさせる動機付けは何なのだろうか。違うパターンによって何が変わるのだろうか。次の例を見よう。

(28) a.你快去給大少爺去送个信（さっそく若旦那に知らせに行って）（家）
b.一个児子也没給我留下（息子を一人も生んでくれなかった）（小説）

(28)の中に現れる「給」は、接辞或は後置の前置詞のように、その動詞句の後ろに置き換えられない。なぜなら、(28)では、ある種の対人関係が示されており、そういう対人関係が絡んで来る状況の元では、受け手が先決問題になり、それを前提として提出しないと、話が展開できなくなるからである。(28)の「給」の前に出て来る下線を引いた部分がこの受け手を前提化する特別の状況を示す要素である。

次の例のように、疑問文の場合も、「給NP2」の前提化が要求される。

(29) a.給誰 寄書?（誰に本を送るの）
b.(?)寄給誰 書?
c.(?)寄書 給誰?

(29)では、bとcは不適格文ではないが、一般的に(29)aが選択される。同じ受け手を示すにもかかわらず、受け手がより高い関心事になるにつれ、「給NP」も前に出る。さもなければ、bとcのような「不完全な文」になる。(29)において受け手が関心事になるというのは、実際、その中に含まれる対人関係の現れでもあり、これは(28)の場合と同様に、受け手か

実際、その中に含まれる対人関係の現れでもあり、これは(28)の場合と同様に、受け手から受益者に変わる動機付けでもある。次の例がこのことを明確に示している。

(30) 我給你送家里去（(あなたのため)お家まで持っていこう）（茶）

(30)は話し手の意志表明の表現であり、「家里」がその着点(goal)を指し示すので、「給你」が受け手(方向)の替わりに「あなたのために」としか解釈出来ない。

4·2 受益者のいろいろ

前置の「給」の場合、結合する動詞句は無制限ではないが、接辞化と後置の前置詞の「給」より、活発である。そして、共起する動詞句の意味特徴によって、この「給」で示される受益関係も次に示すように、多様である。

1つ目は、目的語と解釈される受益者である。

(31) a.張三 給花 澆水（張三が花に水をかけてやる）
b.張三 給李四 添麻煩（張三が李四に迷惑をかける）

「澆水」でも「添麻煩」でも元来方向性のある行為と考えられる。にもかかわらず、「給+NP2」の部分は前置しかできない。この2つはイディオム化されるもので、意味的に考えれば、「澆水」と「添麻煩」の働きかけを受けるのは、「給」の後のNP2である。(31)はまたそれぞれ「澆花」と「麻煩李四」と言い変えられ、NP2が直接被動者になり、意味関係は変わらないのである。これは動詞としての「給」が、場合によってNP2とNP3を実際のVO関係に結ぶという特徴に合致している(1節を参照)。

2つ目は貰い手としての受益者である。3節で触れた「買」も「画」もこの「給+NP2」の後に来て、受益構文を構成する。

(32) a.这回可得給栓弟多买几个血饅頭了（今回こそ栓ちゃんのため血の饅頭をたくさん買わなければ）（薬）
b.張三 給 李四 画 一張画（張三が李四に絵を書いてやる）

(32)は「买」と「画」のプロセスを表明しているものの、最終的にそのプロセスを経て、例(3)と同様に、NP2がNP3を所有することになり、「A使B有C」の意味は変わらない。こういう「与える」という結果につながる行為を示す動詞が最も共起しやすい。逆に、こういう所有させる結果が出て来ない自動詞述語文の場合、「給」による受益構文は成り立たない。

(33) *張三 給李四 去市場（張三が李四にスーパーへ行ってやる）

3つ目は部分被動体としての受益者である。1つ目で見たように、「給NP2」の「NP2」は実際その動詞の被動体である場合がある。それと関連するものだが、NP3がNP2の所属物の場合も、この受益構文になる。最も典型的なのは、身体語彙(body part lexeme)がNP3になる場合である。

(34) a.張三 給李四 洗頭（張三が李四に頭を洗ってやる）
b.春官娘正給簫簫纏胸（春官の母が簫簫に胸を巻いてやる）（簫簫）

「頭」が李四の「頭」で、張三が洗うと、自然と「李四」へのサービスになり、「給」が李四が受益者の立場にあることを示す。NP3がNP2の所属のものならば、総てこの構文になる。子供の服を母が洗ってやる場合でも、先生の机を学生が拭いてあげる場合でも、適応出来る。人間以外の名詞の場合でも、動詞としての「給」のメタファー用法と照応して、受益構文が成立する。

(35) 是給茶館収拾舗面的?（喫茶店に店構えを修理してやるのか）（茶）

逆に、所属関係が含まれない場合、この種の構文は成り立たない。例えば、

(36) *張三 給李四 擦老師的窓戸（張三が李四に先生の窓を拭いてやる）

NP2にある作用・影響を与えるので、その関連する部分を取り上げて、間接的ながらも、その働き掛けの受け手を示すのがこの種の「給」の意味するところである。これはまた動詞の「給」と意味的にかかわっている。(36)ではそういう相関関係が含まれないので成立しないのである。普通、受益者を示す場合、「替(の替わりに)」や「為(のため)」などが「給」と同義だとされている。(36)は「給」のかわりに、「替」と「為」を入れても、適確文になるが、この2つは間接的な受益関係を結ぶものである。それらの間接性とは対照的に、「給」は直接的でなければならないのである。要するに、動詞としての「給」のNP2との隣接性に内在する意味的緊密性がこの種の受益構文につながっていると考えられる。

4つ目は、自己実現の不可能な受益者である。これは協力者が動作主になって、NP1をなし、当事者が受益者の立場に立って、NP2をなすという意味の受益構文である。

(37) a.打算就在年内給你成婚（年内に結婚させるつまりだが）

b.今天給你們圓房（今日君達のため「圓房」してやる[6]）（簫簫）

「成婚」と「圓房」は当事者(NP2)のことと考えられるが、古い文化的慣習として、他者(協力者)からの働き掛けと見なされ、「給」でその受益関係を結ばれるのである。

5つ目は、方向性的存在としての受益者である。「給」自体の方向性によって、方向表現とされる要素ともかかわっている。第5章で分析した対象指示などの「向」の替わりに、「給」が用いられて、方向性のある動詞述語文の受益者を示すのがその例である。

(38) a.給領導匯報（ご報告致します）
b.我兴児先給你道喜（お祝いを申し上げます）
c.給老太爺磕頭（旦那にぬかずく）

(38)aは「向」に言い換えられ、「給」の方向性を表している。しかし、(38)bと(38)cでは、動詞句が単純な物理的方向を表してはおらず、そこにはある種の対人関係が深くかかわっており、そうした受益関係がNP1(省略可能)とNP2の間に存在することが「給」によって示されている。ここでは「向」の代用は出来ない。「向」の対象(受け手)指示はあくまでも方向指示の拡大解釈であり、方向関係という基本的な意味の領域(domain)から離れていないのである。形の上では、(38)はNP3の移動が考えられないが、抽象的な働き掛けが含まれる点から考えれば、元の動詞としての「給」と意味的にかかわりをもっているといえる。

6つ目は、「受損者」としての受益者である。日本語から考えて、「給」による次の受損表現はおかしい。受損と受益は相対的なものである。動詞として、「給」は一方的な行為であり、常に恩恵を与えるという性格のものでない(1節を参照)。損益に関係無く、作用指向の方向性を示すことを基本的な特徴とする「給」の性格からみれば、次の「給」が出来事の作用関係のみを示すことも、当然のことである。

(39) a.成心給医生找麻煩（わざと医者に迷惑をかける）（小説）
b.他給我弄壊了（彼は壊してくれた）

4·3 他動詞述語文から自動詞述語文へ

動詞としての「給」は他動性のもっとも高いもので、文法化される場合でも、先に見たように、他動性のある他動詞述語文と共起するのが一般的である。しかし、他動性は度合のあるものである。上の5つ目のところに出て来た例を見れば、その他動性の度合が落ちることに気付く。抽象的な作用関係を表す場合、他動性の有無が関係無く、ある対人関係によって、作用の「与え」を示す受益構文も成り立っている。即ち、話し手の認識において、あ

る状況(対人関係で構成される場合が多い)が作用指向(具体的でも抽象的でも)の表示が必要とするとき、「給」がそれを満たすものとして用いられ、作用指向の一つである受益表現が生まれるのである。次の受益文において、動詞句は固定化された複合動詞によって構成されており、目的語の有無によると他動性の判断は難しいが、受益構文としては自然である。

(40) a.只有懇求金大爺大發慈悲、給我們保一保険（金旦那さまに同情して保証していただくしかありません）
b.給娘争气、給自己争气（母さんのためでも、自分のためでも頑張って）
c.周華我給他過節（私が周華とお正月を過ごそう）(愛)

(40)はそれぞれ、依頼、勧誘、意志を表している。そこでは、動詞句の他動性と関係なく、話し手と聞き手の間のやりとりから、ある種の対人関係が結ばれ、その対人関係のもとでの所与の状況の実現が問題とされており、単なる物の移動という物理性を乗り越えた表現になっている。同様の「給」が自動詞述語文にも使われることがそのことを裏付ける。

(41) a.那你也給我走！走！(君も出て行け。出て行け)
b.都給我出去（みな出て行け）

これまでの分析からすれば、(41)は他動性がないので、不適格文となるはずである。しかし、話し手にとっては、、その状態の実現がイメージとして1つの「受益」になるため、その状態自体が1つの働き掛けとして、抽象レベルの「実体」となり、そのことが(41)の構文を成り立たせていると考えられる。(33)の場合は、話し手に作用する対人関係が含まれていないのである。(33)にも対人関係(依頼と意志表明)が関与すると、次の例に示すように、成り立つようになる。

(42) a.你 給 我 去 一趟 市場 （店へ行って来て）
b.我 給 你 去 一趟 市場 （店へ行ってあげよう）

5.「給」のまとめ

朱(1984:170-72)は「連謂結構」即ち連動文を分析する際、下の例の「給」をいずれも動詞と見ている。

(43) a.1) 送 一本書 給他（彼に本を1冊やる）

2) 織 了 一件毛衣 給他（セーターを1枚編んで彼にやった）

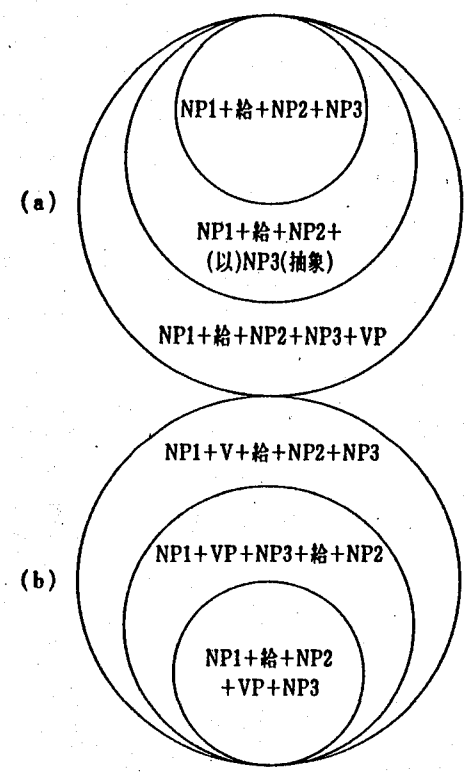
b.送給 他 一件毛衣（彼にセーターを1枚やった）

c.1) 給他 織了 一件 毛衣（彼のためにセーターを1枚編んでやった）

2) *給我 送 了 一本書（私に本を1冊くれた）

朱はその注で、(43)cの2)の不適格文は、その「給」が動詞だからであって、それを「介詞」としたら適格文になるといった趣旨の説明をしている。以上の分析からも分かるように、(43)cの2つの「給」は同じ統語範疇として機能しており、それを動詞と前置詞(介詞)に分ける納得いく根拠は見当たらない。そればかりか、我々の分析に示したように、(43)aと(43)bの「給」も個別の文脈において、標識機能を果し、述語動詞から前置詞と接辞という文法形式にシフトされている。以上、我々は(43)の中の「給」の文法形式の性格を立証するため、述語動詞の「給」と文法化された「給」の相関関係を手掛かりに、それぞれの内部構造を分析し、語順移動に伴って文法化された「給」のプロセス及びその標識機能を説明したが、それをまとめると、(44)のような図式が得られる。

(44)



これを2つの「給」の「原型図」(prototype figure)と呼ぶが、少し説明を付け加えると、以下のことが言える。

1.述語動詞の「給」(a)にしても文法形式の「給」に(b)しても、それぞれ階層をなしている。最も小さい円がそれぞれ動詞性が高い、又は文法性が高い、原型的な部分であり、円が拡大された層は周辺的部分になる。

2.動詞の周辺的な部分になるほど、文法形式に近づき、文法的表現になる。逆に、文法形式の周辺的な部分になるほど、述語動詞に近づき、動詞性が強くなる。

3.動詞の原型的部分が文法形式の周辺的な部分に近くて、意味的にも統語的にも相関関係が深い。逆に、文法形式の原型的な部分が動詞の周辺的な部分に近くて、意味的にも統語的にも相関関係が深い。

4.その両極がそれぞれの原型であり、統語範疇の相対的独立性を備えている。

中国語のGIVE動詞の文法化の特性は他の言語のプロセスからも立証される。日英語の受益構文と少し関連付け、「給」の結論を裏付けてみよう。

6. 日英語との関連で

日本語において、GIVE動詞は複雑な体系を形成している。美化語(敬語)の「あげる」と「さしあげる」と「くださる」を抜きにしても、基本的な語彙項目には「やる」と「くれる」という2つがある。既に第1節で触れたことであるが、両者はそれぞれ聞き手指向と話し手指向という直示的特性をもっている一方、「給」のように動作主と受け手の隣接性による統語制約もなければ、抽象的な比喩表現も一般的に成立しない。[7]

(45) a.太郎が僕に本を<u>くれた</u> (=(4)c)
b.僕は太郎に本を<u>やった</u> (=(4)c')
c.太郎が本<u>を</u>僕<u>に</u>くれた
d.僕は本<u>を</u>太郎<u>に</u>やった

第5章で分析したように、方向動詞の文法化は中日語において、結果として、根本的に性質の違うものになっている。標識機能を果す主範疇の「に」又は「へ」の格助詞が存在するため、それと結合し、方向指示などの状況を説明したり描写したりする働きをもつ「むかって」及び「むけて」は関係標識の副次的範疇にしかならず、「向」のような文法関係を有標化するプロセスではない。GIVE動詞のプロセスもそうである。(44)bにまとめたように、「給」は3つの形で与格標識と受益格標識として機能している。日本語では、その標識機能は「に」と「ために」に担われるので、「やる」と「くれる」はそういう命題の関係標識に照応して、直示的特性により、複雑な述語を構成し、受益の標識として機能している。統語範疇としては、「給」の前置詞と接辞に対して、「やる」と「くれる」は補助動詞になっている。この統語範疇の相違は第6章で分析して得た結論と同じことである。直示的移動動詞の場合

は、中国語では「連結詞」又は「不変化詞」に範疇化しつつあるのに対して、日本語の「いく」と「くる」は純粋な動詞類(verbal)関連の標識である補助動詞になっている。空間動詞の文法化に現れる中日語の相違点が、それぞれの類型的特徴を示すものである。

(46) a.太郎が花子に本を送った
b.太郎が花子に本を送ってやった
c.太郎が花子のために東京へ行った
d.太郎が花子のために東京へ行ってやった

「給」の接辞化から見れば、「Vてやる/くれる」の形では、「やる」と「くれる」も類似する形式と思われるが、しかし、接辞化される「給」は動詞述語に結合価増加をもたらし、与格と受益格の名詞句を必須要素とするのに対して、次の例のように、「やる」と「くれる」は「に」と「ために」で導入する名詞句を補語として要求しない。

(47) a.子供の宿題を手伝ってやる
b.太郎が私を手伝ってくれた
(48) 犬を散歩に連れて行ってやる
(49) a.子供と遊んでやる
b.相手のほうがこちらに来てくれるそうだ

「やる」と「くれる」の文法化も推論の結果であると思われる。つまり、(46)bの「太郎が花子に本を送ってやった/くれた」は「太郎が花子に本を送って、花子のためになる」という推論から、(47)と(48)のように「に」の与格標識と「ために」の受益格標識が抜けた文に現れて、受益構文を構成するのである。そして、中国語において、対話で構成される対人関係が絡んでいる場合に限り、「給」が自動詞述語文と共起できるが、(49)の通り、日本語では、「やる」と「くれる」はその受益的性格により、自動詞述語文も成立する。逆に、「やる」と「くれる」は受益指向のものとして、「給」のような「損益表現」が成り立たない。

(50) a.*太郎が花子にコップを壊してやった
b.*太郎が花子にコップを壊してくれた
(51) a.あいつを負かしてやる
b.ぶんなぐってやる (小泉保ほか 1989)

(51)も「損益」と解釈できるが、「やる」は特別の文脈に限って、話し手の決意表明として機能し、「給」のような命題関係を示す働きがない。(51)にはペアとなっている「くれる」が

出ないのがその特殊性を物語っている。

「やる」と「くれる」は元の意味特徴により、「ためになる」という状況を示さないと、他動詞述語文の場合でも共起できない。

(52) a.僕は花子に戸を開けてやった
b.?僕は花子に窓を開けてやった
c.*?僕は花子に窓を磨いてやった
d.*僕は花子に戸を締めてやった　(Shibatani,M.forthcoming b)

(52)b、c、dは受け手の「花子」にとって「ためになる」状況が想定しにくいので、「やる」は共演できない。これは「やる」又は「くれる」の受益的特性を最大に示したものである。冒頭の(1)aと(1)bは物理的移動性と受益性によって対立するものである。しかし、「給」は「ためになる」状況に限らず、その受益者には、損益を被る者や協力を得た者などがあり、関係標識として機能するので、(52)のいずれも成立する。結論をいうと、関係標識を果す原型となる前置の「給」が状況に束縛されず、相対的な文法機能の独立性を備えているのに対して、「やる」と「くれる」は動詞句関連の受益標識の機能を果しながらも、GIVEという述語動詞の特性は本質的には変わっていない(付録4・2を参照)。

一方、英語では、GIVE動詞の"give"は複雑な述語を構成しており、使役構文にも関与している(Cattell,1984を参照)が、文法標識になっていない。与格標識と受益格標識はいわゆるsimple dativeと呼ばれる語順か、prepositional dativeと呼ばれる厳格な機能語の"to"又は"for"に担われる。そして、中国語と同様に、日本語のような直示的受益表現は英語では成立しない。

(53) a.John gave Mary a book.
b.John bought Mary a book.
(54) a.John gave a book to Mary.
b.John bought a book for Mary

第3節で分析したように、後置の「給」は述語動詞からシフトされつつある文法形式として、動詞の性格を保ちながら、標識機能を果すのであって、与格を必須要素としない、方向性のない動詞句と共起することができる。そういう場合、「給」はその動詞句に結合価増加をもたらし、それなりの標識機能を果している。与格標識の"to"は厳格な機能語として、方向性のない動詞句とは結合できない。

(55) a.*Mary knitted a sweater to John.

b.*I drew a picture to the child. (Shibatani et al.,1994)

向格標識の"to"と"for"が与格標識と受益格標識になるのは、第5章6節で見たように、物理的空間関係の標識から抽象的な人間関係の標識へ、という抽象化の結果である。結論をいうと、英語の関係標識の機能拡大は意味機能の抽象化を伴うプロセスであるのに対して、中国語そして日本語では、それは構文上に現れる状況に基づく推論による拡大解釈に過ぎない。これはGIVE動詞だけではなく、存在動詞と方向動詞のプロセスに見られる中国語と英語の根本的な相違点でもある。

注

1) Shibatani(forthcoming a)がgive-schemaというモデルを提出し、受益構文について認知統語論の観点から分析しているが、give-schemaのモデルを提出する根拠は1つはGIVE動詞が受益構文の標識に文法化するという普遍性のあるプロセスが観察されることにあるという(付録4・1を参照)。

2) 中国語における従来の間接目的語、直接目的語という用語は、以下の分析でわかるように、「給」の説明には不適切なところがあり、本研究では用いないことにする。朱(1984:118)では、「近賓語(近い目的語)」と「遠賓語(遠い目的語)」という用語を用いているが、形式的なもので、一般的には定着していない。

3) 「給」を動詞と認定するのは、Li(1990:99-109)がある。同じ動詞説はSebba(1987)、朱(1979、84)にも見られる。

4) Shibatani(forthcoming a)が" Maurice sent a book to Mary "と" Maurice sent Mary a book "とでは、後者はMaryがその本を確実に貰っていることで前者と異なっていると指摘されているが、中国語においては、このように違う局面を見せている。

5) Halliday,M.A.K(1985:132-33)を参照。

6) 「圓房」は新中国が成立する前のことで、「童養媳」といいなずけが夫婦生活に入ることを指す。

7) 「損害を与える」というように、「与える」はGIVE動詞として、抽象的な表現が成り立つ。しかし、「与える」は一般性に欠け、基本語彙ではない。「与える」が文法化しないのが語彙項目の構造分析に示唆を与える例になる。

第8章　通過動詞の文法化

0. はじめに

ここでいう通過動詞とは、「通過[tōng guò]」と「経過[jīng guò]」の2つの動詞のことである。第5章の方向動詞と第6章の直示的移動動詞とは異なり、通過動詞は方向(direction)と着点(goal)ではなく、経路(path)を補語に取る移動動詞である。経路を取る動詞には、移動の様態などが示される具体的なものが多いが、「通過」と「経過」は移動の主体と経路の関係を示し、今まで見て来た存在動詞、方向動詞、直示的移動動詞、GIVE動詞と同様に、関係的プロセスを表す抽象的な述語動詞である。[1] この通過動詞は連動文の文脈において、意味的な抽象化が起こり、主動詞で示される出来事が遂行する媒介(intermediacy)を示し、文法標識の役割を果している。連動文言語においては、通過動詞の文法化のデータが少ないが(Lord,1993)、次の例に示すように、文法化した「通過」は、媒介標識としてのthroughと日本語の「を通して」又は「を通じて」に対応するように思われる。

(1) a.通過 訳員 交談
　　b.To talk through an interpreter.
　　c.通訳を通して/通じて話をする

(1)cの通り、日本語の「を通して」と「を通じて」はある文脈において、述語動詞から文法的意味を表す文法形式に転換され、第5章で議論した「にむかって」と「にむけて」と同様に、複合格助詞又は格助詞相当句という統語範疇として認定されている。「通す」と「通じる」のプロセスは、部分的に「通過」と「経過」の文法化に類似するものであると思われる。

第8章では、空間動詞の文法化の最後のケース・スタディとして、日本語と関連付けながら、中国語の通過動詞の文法化を考察していく。第1節では「通過」と「経過」の述語動詞の性格を分析し、両者の相違点を探り出しながら、文法化するそれぞれの内在的条件を考える。第2節と第3節では、「通過」と「経過」の標識機能を細かく記述し、それぞれの文法化の特徴を分析してみる。第4節では、伝統的な記述文法の問題点を指摘し、「通過」と「経過」の統語範疇を確定する。第5節では、「通す」と「通じる」の文法化を取り扱い、その標識機能を例示しながら、「通過」と「経過」の文法化を立証する。最後の第6節では、英語における与格と道具格の相関と関連付け、通過動詞の文法化に見られる経路と媒介のかかわりかたをまとめ、動機付けと方向性という文法化の基本的な問題を再び考えてみる。

1．動詞の分析

「通過」と「経過」は2項動詞として、統語的に同じ構造をなしている。

(2) NP1 + 通過 / 経過 + NP2

NP1は移動する主体を表す主語であり、NP2は移動する経路を表す経路補語である。「通過」と「経過」は、NP1の選択に関してはほとんど差がない。つまり、「通過」の主体と「経過」の主体は同質のものが可能である。問題はNP2である。「通過」と「経過」の食い違いはまずはNP2の選択に現れてくる。次の例を見よう。

(3) a.火車 通過 南京大橋（汽車は南京大橋を通過する）
b.??火車 経過 南京大橋
c.火車 経過 南京（汽車は南京を経由する）

(3)では移動する主体の「火車」とその経路との関係が示されているが、経路の特性によって、違う動詞が選択され、主体と経路のかかわり方も異なってくる。「通過」はある場所を通る状況を示すが、その場所の内部でなければならない。つまり、(3)aに示すように、「通過」は「火車」が「南京大橋」の中を走る状況を表し、移動する主体とその経路とは接触しているという一体の関係がもたれ、「南京大橋」が目指している目的地へ到達するための通らなければならない経路になっている。一方、(3)cのように、経路の「南京」が経由する通過点として、「経過」の主体の「火車」とは一体の関係をもたず、「経過」は「火車」の移動を意味しながらも、実質的には「火車」の移動で結ばれた「北京」か「上海」か、ある不確定な場所と「南京」という経路との地理的位置関係を示すのである。従って、(3)bのように、位置関係を構成していない「南京大橋」が経路になると、「経過」の共起が不自然になるのである。位置関係がもっとはっきり示される例を見てみよう。

(4) a.从中国 去 日本 経過 韓国（中国から日本へ行くには、韓国を経由する）
b.??从中国 去 日本 通過 韓国

(4)では、起点(source)の「中国」と、着点(goal)の「日本」と、経路の「韓国」の位置関係が示されているので、「経過」は共起できる。逆に(4)bのように、「通過」は主体が接触しながら移動する場所を経路として要求するので、経路になっていながらも、主体と一体性がない「韓国」とは共起しない。[2]「通過」と「経過」のこういう意味特徴により、全く同じ構文要素で作り上げた文であっても、示される状況が異なることが明らかである。

(5) a.我們 経過 天安門（私達は天安門を経由する）
b.我們 通過 天安門（私達は天安門を通り抜ける）

(5)aは長安街を東西に通過点の「天安門」の横を通っていくことを意味するのに対して、(5)bは入り口の「天安門」から中へ入るという読みが強く、「通過」は目的地につながっている必ず通る経路を示すわけである。

上で見た「通過」に含意される移動する主体と経路との一体性は、主体と経路の依存関係又は影響・被影響の関係でもあると解釈出来る。これは「通過」の意味拡大をもたらす換喩(metonymy)の表現から理解できる。対照的に、場所の位置関係を示す「経過」は、主体と経路の作用関係を示すことがないので、換喩の用法もない。

(6) a.我們 終于 通過了 難関（私達はやっと難関を乗り越えた）
b.*我們 終于 経過了 難関

(6)aは「我們」と「難関」の作用関係を表し、「難関」は主体の目指す目標を指している。目標達成という抽象的な行為を「通過」で譬えていえるのは、「通過」には主体の意図性が付随されるということを物語っている。逆に、「経過」は移動する順次の通過点を提示し、主体の意志の関与性が薄いので、目標達成という意図性のある抽象的な表現には不向きである。これは「通過」と「経過」の前置詞化に現れる相違の根本的な動機付けと言える。

ところで、「経過」は(6)のような換喩によって抽象化された経路を補語に取ることができないにもかかわらず、時間を表す語を補語に取ることがある。時間補語を取るのはいうまでもなく、空間から時間へのメタファーの用法である。これは先に見たような空間の位置関係でもって、時間の前後関係を捕えるのに過ぎない。時間補語を取ると、NP1を構成するのは行為を表すものでなければならないことが、行為の実現に伴って流れていく時間の順序関係を示す「経過」の役割を裏付けている。主体と時間とは、直接的には一体的な作用関係がないので、一体の関係を示す「通過」は、時間補語を取ることができないのも当然のことである。

(7) a.完成 学位論文 経過 5年（学位論文を仕上げるには5年もかかる）
b.*完成 学位論文 通過 5年

(7)aでは「経過」は時間の流れを譬えていうのであって、ある行為に伴う時間的プロセ

スを説明するわけである。後で見るように、文法標識として、「経過+時間+的+動詞」というパターンが観察されるのは、「経過」が時間補語を取る構造の特徴に起因すると考えられる。実際、(7)aを次のように連動文の形に置き換えると、「経過」は主動詞で示される出来事の時間的条件を表し、述語性が薄まり、文法化が始まっている。
「通過」は時間補語を取らないので、その置き換えも無理である。

(8) a.経過 5年、完成 学位論文 (5年を経て、学位論文を仕上げた)
b.*通過 5年、完成 学位論文

2.「通過」の文法化

第4章から第7章にかけて分析してきたように、空間動詞の文法化は連動文という統語構造を前提に、結合される動詞述語と結ばれる意味関係によって、推論、換喩、メタファーなどを伴う意味変化を経て実現できたプロセスである。「通過」と「経過」の文法化も意味変化の結果であるが、それは第4章で分析した存在動詞の「在」などのように、推論によって引き起こされるものではなく、メタファー化又は抽象化によるものである。次の例のように、物理的状況を表す連動文において、通過動詞は文法標識として機能しない。

(9) a.火車 通過 大橋 向南 奔去 (汽車は大鉄橋を通過し南へ疾駆していった)
b.往南 走 経過 西単 才 能 到 宣武門 (南へ向かって行くと西単を通過してから宣武門に着きます) (呂主編 1980)

(9)では場所名詞が補語になっており、後接する述語も物理的な移動を意味する動詞(句)であって、「通過」も「経過」もその出来事の一環を述べる動詞述語として働いている。結論から言うと、「通過」と「経過」は機能語として働くようになるのは、抽象的な事柄を表す後項述語の共起と共に、抽象的な名詞又は動詞(句)を補語に取るにつれ、抽象化を伴う意味拡大が起こった結果である。そういう特別の文脈においては、意味変化と共に、「通過」と「経過」は述語動詞ではなく、前置詞として、後接する主動詞の媒介をマークするようになってくるのである。まず「通過」の媒介標識の機能を調べてみよう。

文法化された「通過」で導入されるのは、まず人間と組織を表す名詞がある。

(10) a.我 通過 張三 認識了 李四 (私は張三を通して李四と知り合いになった)
b.我 通過 学校 了解 他的学習情況 (学校を通じて彼の勉強ぶりを調べる)

(10)では、主語の「我」は述語の「認識」と「了解」という行為の主体であり、「通過」で導入される「張三」と「学校」は、通過する場所でなく、その行為を実現させる仲立ち又は協力者である。「通過張三」も「通過学校」も省略可能であり、「通過」は付加詞の役割を果していることが明らかである。述語動詞として機能する場合には、「通過」は人間と組織を補語に取ることはできない。ここでは、「張三」と「学校」をその補語に取ることができるのは、「通過」にはメタファーによる意味変化が起こったからである。つまり、「通過」が人間又は組織を物理的な場所のように捕えるのである。後接する抽象的な行為を示す動詞の「認識」と「了解」がこのメタファーに関与するものである。(10)では、「張三」が「我」と「李四」を、「学校」が「我」と「他的学習情況」を、結ぶ抽象的な経路であると言ってもよい。この抽象的な経路は「通過」で導入される物理的経路とはイメージ的に変わっていない。動詞の分析で分かるように、「通過」は移動する主体と経路そして目的地を作用関係に結び付ける役割を果すものである。「通過」で結ばれる個体が相互に作用し、場所の主体に対する影響が含意される。仲立ちを標識する「通過」はこの点と合致している。

「通過」で導入される媒介は人間と組織に限らない。「通過」がある抽象的な存在物を導入し、その抽象的な存在物が後接する動詞述語で述べられる事柄の実現に関与する媒介になる例もよく観察される。

(11) a.通過 現象 看 本質（現象を通して本質を見詰める）
　　b.通過 文学作品 了解 日本社会（文学作品を通して日本社会を理解する）

(11)を見ると、(9)aが思い出される。(9)aでは、「大橋」が移動の経路であると同時に、目的地の「南」の「入り口」でもあり、「大橋」は「南」とつながり一体となっている。(11)も同様に、「現象」と「文学作品」は、それぞれ「本質」と「日本社会」とイメージ的に表裏一体の関係を構成している。(11)と(9)aが違うのは、(9)aでは「通過」が物理的移動を表すのに対して、(11)では「通過」が抽象的移動を表し、抽象的な経路が抽象的な行為に関与する媒介に転換されるという点である。媒介標識はあくまでも抽象化に付与されたプロセスである。

ところで、(11)の「通過」は「用(で)」と解釈でき、媒介標識は道具とかかわりをもっていることが見て取れる。[3] ただ「用」などで示される道具は、具体性のあるものが多く、基本的にその行為の及ぶ対象(目的語)とは現実的に分離しているものでなければならない。これは「通過」の抽象性を裏付けている。

(12) a.用 毛筆 写 字（筆で字を書く）
　　b.用 筷子 吃 飯（箸で食事をする）

(12)では「毛筆」と「筷子」は可視的な道具であり、それぞれ「字」と「飯」とは一体性のない個体である。[4] これに対して、例(11)のように、「通過」で結ばれる「本質」と「現象」、「日本社会」と「文学作品」は、表裏一体の関係にある抽象的な存在である。

上で見た人間と組織そして抽象物のほか、「通過」には行為名詞で表される行為を媒介としてマークする例も観察される。

(13) a.通過 留学 了解 異国文化（留学を通して異文化を理解する）
b.通過 義務労働、提高 為社会貢献的精神（ボランティアを通して社会貢献の精神を高める）

「留学」と「義務労働」は行為を表す概念である。「通過」はそういう行為の遂行によって、ある行為が実現するという意味関係を示しているが、より抽象的な媒介をマークする機能を果している。「通過」は元々物理的な経路補語としか共起しないが、特別の文脈において、意味変化が起こると同時に、行為名詞を導入するように統語機能が拡大される。事実、(11)を「通過鑑賞文学作品了解日本社会」とも言い換えられるように、「鑑賞」という動詞を付け加え、動詞句を「通過」の補語にすることができ、「通過」は名詞の結合から動詞句そして節の結合へ機能的に拡大していくのである。次の例がこの状況を示している。

(14) 通過 写信、交流 感情（文通を通して、感情を交わす）
(15) 通過 与日本人 接触、了解日本社会（日本人との付き合いを通して、日本社会を理解する）

(14)と(15)は「通過」を削除しても成り立ち、しかも句と句又は節と節の意味関係は変わらない。出来事の時間的前後関係にせよ、因果関係にせよ、単なる文の羅列だけで十分にその意味関係を表示できる中国語のような「語順の言語」において、無標の関係を有標化することによって、単なる命題内容の伝達だけでなく、語用的機能も果されると考えられる。これはほかの空間動詞の文法化にも見られるように、話し手の意図及び事態の捕え方に動機付けを求められる。(14)と(15)の場合は、「通過」の付加によって、前項述語の効果を説明する即ち主題化する働きがあると読み取れる。これは、助動詞の「可以(できる)」と目的の標識として機能する「来」(第6章を参照)を挿入することができるという統語上の特徴からも理解出来る。

(16) a.通過 写信 可以 交流 感情（文通を通して、感情を交わすことができる）
b.通過 与日本人 接触 可以 了解 日本社会（日本人と付き合うことを通して、

日本社会を理解することができる）

(17) a.通過 写信、来 交流 感情（文通を通して感情を交わす）

b.通過 与日本人 接触、来 了解 日本社会（日本人と付き合うことを通して日本社会を理解する）

(18) a.*写信、来 交流 感情

b.*与日本人 接触、来 了解 日本社会

(18)に示すように、「通過」のような標識のない文では、「来」の挿入はできない。「来」の共起によって、「通過」の文法化の一貫性(coherence)が裏付けられている。即ち、述語動詞として機能する場合において、「通過」の意味特徴に呼応して、連動文の後項述語は物理的な移動動詞でなければならない一方、前置詞化すると、抽象的な述語が共起すると同時に、「来」のような移動動詞から抽象化された文法形式も共起できるわけである。これは文脈依存性と文脈統一性という文法化の特質を物語っている(第9章を参照)。

3.「経過」の文法化

「通過」と同様に、「経過」も連動文のもとで文法標識として機能するようになってくる。幾つかの側面において、「経過」は「通過」と異なっており、その文法化が元の述語動詞の特徴と合致する様子を呈している。

「通過」は人間と組織を表す名詞と結合し、行為実現の仲立ちをマークすることができるが、「経過」にはそれができない。

(19) a.*我 経過 張三 認識了 李四

b.*我 経過 学校 了解 他的学習情況

動詞の分析で指摘したように、「経過」の場合は、移動する主体と経路は接触せず、実質的には経路間の位置関係を示すので、位置と位置には影響・被影響という必然的な作用関係がない。上の例では、「張三」と「李四」、「学校」と「他的学習情況」が同一の領域内に存在し、一体の関係にある。「経過」は異なる領域の個体の位置関係を示すものとして、「認識」と「了解」の共演者でもある仲立ちを示す機能とは相容れないのである。これは次の不適格文の説明にもなる。

(20) a.*経過 現象 看 本質

b.*経過 文学作品 了解 日本社会

動詞として「経過」は位置関係を示しており、場所と場所の一体性又は必然的なつながりが含意されていないので、「現象」と「本質」、「文学作品」と「日本社会」のような一体性の関係を示す機能は内在的には欠けており、抽象的な経路補語を導入し、後項述語の共演要素としての媒介を示すことができないのも当然のことである。

ところが、行為を示す要素が現れると、「経過」がそれを後接する主動詞と関係づけ、文法標識として機能することができる。

(21) a.経過 労働、改変了 思想（労働を通して、考え方が変わった）
b.経過 学習、提高了 認識（学習を通して、認識が高まった）

(21)の「労働」と「学習」は、後接する主動詞で表される行為を実現させた媒介又は条件であり、「経過」がその標識の役割を果している。ところで、(21)の「経過」を「通過」に置き換えることができる。両者はどう異なるのであろうか。
(21)を次のように言い換えても、基本的な意味関係は変わらない。

(22) a.(経過)労働 以後、改変了 思想（労働に参加した後、考え方が変わった）
b.(経過)学習 以後、提高了認識（学習をした後、認識が高まった）

上の「以後」に注目されたい。「以後」は出来事の時間的前後関係を示す標識である。「以後」を入れると、「経過」が省略できることからして、「経過」には出来事の時間的前後関係を示す機能が備えられていることが理解できる。言い換えると、「経過」でマークされる媒介は時間的に絶対的に先立つプロセスであり、後接する述語動詞も前のプロセスで引き出される必然的な結果でなければならないということである。時間的前後関係を表す以上、時間を示す要素が挿入されるのも当然なことであるが、それとは対照的に時間性のない「通過」で導入される媒介には、時間的要素を加える余地はない。

(23) a.経過 5年的努力、完成了 学位論文（5年の努力で学位論文を仕上げた）
b.??通過 5年的努力、完成了 学位論文

動詞述語の「経過」は時間補語を取ることができた。それは空間の位置関係でもって、時間の前後関係を捕えるわけであって、時間全体の流れにおけるある出来事が占める時間的通過点を象徴するだけである。こういう時間的性格により、「経過」でマークされるのは、既成の出来事の媒介でなければならない。(23)の例もそうであるが、後接する動詞述語にアスペクトの標識がついているのがこの点を端的に示している。

(24) a.経過 反復協商、取得了 一致的意見(繰り返し協議した結果、一致した意見がまとめられた)

b.経過 多年的研究、総結出 完備的教学方法(長年の研究の結果、完璧な教授法がまとめられた)

上の「了」と「出」は既成の事実を示す標識である。そういう要素の共起が要求されるのは、「経過」があくまでも既成の事実の媒介を示すものであるからである。「経過」は名詞として使われる場合には、「事件的経過(事件のいきさつ)」のように、既成の事柄を示すのに対して、「通過」は「事件的通過」のような名詞の用法がなく、既成の事実(結果)を必ずしも要求しない。その例を見てみよう。

(25) a.通過 写信 来 交流 感情 (文通を通して、感情を交わす) (=(16)a)

b.我 想 通過 写信 交流 感情 (文通で感情を交わしたい)

「交流感情」は「写信」の達成する目的である。既に指摘したように、「来」が目的達成の標識であり、(25)aは一般的な説明として、時間とはかかわりがない。(25)bのように、願望などを表す助動詞「想」と共起できることからして、媒介を導入する「通過」は主体の意志が関与し、未然の状況にも適応する。一方、「経過」は未然の状況に適応出来ず、「来」や「想」と共起できない。

(26) *a.経過 写信 来 交流 感情

*b.我 想 経過 写信 交流感情

「経過」が既成の事実を表さなければならないという特徴は、述語動詞の状況と合致するものである。名詞を修飾する「経過」が完了の読みしかないことが、これを端的に示している。

(27) a.経過 専門訓練 的 工作人員 (専門的訓練を受けた係員)

b.経過 教育 的 児童 (教育を受けた子供)

(27)では「経過」は「接受過」(受けた)とも言い換えられることから分かるように、既成の事実を述べており、主部を説明するのに対して、「通過」は名詞を修飾する構文上には共起できない。

(28) a.*通過 専門訓練 的 工作人員
b.*通過 教育 的 児童

既成か非既成か、という時間的表現に示される「経過」と「通過」の対立は、次の例からも読み取れる。

(29) a.这 是 経過 老師 同意 的（これは先生の同意を得たものだ）
b.* 这 是 通過 老師 同意 的

判断動詞の「是」が「是‥‥的」というパターンで、既成の出来事に関する様々な側面を説明するものであり、(29)bの「通過」の不適格性は、その非既成の性格にほかならない。

第2節で分析したように、「通過」はある出来事の実現に関与する媒介を示している。それは時間的に後項述語に先立つ事柄ではあるが、必ずしも完成した出来事に限らない。これに対して、「経過」はある完成された出来事に関して、それに関与する時間的順序関係をもつ条件又は媒介となっている事柄を展示し、物理的位置関係を示す述語動詞とはイメージ的に変わらず、標識機能が述語機能の抽象化にまつわる意味拡大に付与されるものなのである。

4.「通過」と「経過」の統語範疇

伝統的な記述文法において、「通過」と「経過」の統語範疇の取り扱い方がまちまちである。Chao(1968:754-767)は、57もの前置詞をリストアップしているが、「通過」と「経過」を含めていない。同様に、Li & Thompson(1981:368-369)のリストにもこの2つが入っていない。呂主編(1980)では、「通過」を「介詞」(前置詞)としているが(p.469)、「経過」は名詞と動詞としてだけ認めている(p.277)。「通過」も「経過」も「介詞」とする唯一の重要な文献は『現代漢語虚詞例釈』である(p.283;416)。先行研究からして、「通過」と「経過」の統語範疇を確定することが必要である。

ChaoとLi & Thompsonが「通過」と「経過」を前置詞にリストアップしなかったのは、英語との対応関係にこだわったことに一因があると思われる。前置詞を議論する際、彼らは英語の前置詞と対応させようとする傾向が強かったのである。確かに、第2節と第3節に出てきた例を英語に訳してみても、一対一の対応を示すものがない。だからと言って、「通過」と「経過」の機能語としての性格を否定できるわけではない。次の節で検討するように、日本語の「を通して」と「を通じて」も媒介をマークし、類似する文法化プロセスを見せてくれる。英語がすべての分析指標を提示するわけではないのである。

一方、呂主編(1980)が「経過」を前置詞と認めなかったのは、統語的に動詞の接尾辞とさ

れる「了」が共起しうる点によるものと考えられる。これまでの分析でくりかえし指摘したように、「了」などでもって、動詞と前置詞を区別するのは無理がある(特に第7章2節と3節を参照)。「了」が付かない動詞もあれば、「了」などが付く前置詞もあるからである。実際、呂主編(1980)に挙げられた例の「了」は義務的な要素ではない。

(30) 経過了 充分 艙醸、各个小組 都 提出了 候選人名単 (充分な下準備を経て、それぞれのグループは候補者名簿を提出した)

データを調査したところ、「経過」に「了」を添える例は稀である。上で分析したように、「経過」は「通過」と同様に、文法標識の機能を果しており、述語動詞から前置詞へシフトされ、文法語としての統語範疇が確立している。第1章2節で指摘したように、典型的な述語動詞は出来事を報告する役割を果すものである。文法標識として、機能する「通過」と「経過」は出来事を報告する読みが薄く、統語的にも、「通過現象」や「経過学習」のような言い切った形で独立した述語として機能できないのである。ただ統語範疇には度合(degree)があるのと同様に、文法化も度合のあるプロセスでしかない。「経過」は「通過」ほど抽象的で複雑な媒介ではなく、時間的プロセスを後項述語の条件又は媒介としてマークし、より具体的であるという点では、厳格(rigid)な文法語ではないとも言える。「経過」だけでなく、「通過」も前置詞の範疇化にとどまり、存在動詞、方向動詞、GIVE動詞のように、接辞化という形態化まで至っていないので、度合の低い文法化と言えよう。もち論、これでもって、その文法語としての統語範疇を否定できるわけではない。日本語の事実が中国語の通過動詞の文法化を立証するものになる。その分析に話を移そう。

5. 「を通して」と「を通じて」の標識機能

冒頭の(1)で示したように、「を通して」と「を通じて」も媒介標識の機能を果している。その元となる「通す」と「通じる」は複雑な構造をなしており、「通過」と「経過」のような経路を取る単純な通過動詞(自動詞)ではない。ただその場所関連という特性からして、[5] この2つは「通過」、「経過」と類似するところがあり、「通す」と「通じる」の標識機能のプロセスが「通過」と「経過」の文法化の動機付けを立証するものになる。「を通して」の標識機能から見ていこう。

「通す」は他動詞であり、共起する要素によっていろいろと意味解釈できるが、いずれにしても動詞述語として働く場合には、物理的な状況を示すのが一般的である。

(31) a.道路公団は海峡の下にトンネルを通した

b.見張りは門を通してくれた

c.銅は電気を良く通す

d.母は買って来たズボンを一度水に通した（小泉保ほか 1989: 348－49）

「通過」と「経過」の分析で指摘したように、連動文だけでは述語動詞が文法標識に転換することはない。文法化は一部は意味的抽象化に伴って実現したプロセスである。「通す」は物理的(自然的)状況のもとでは、連動文の前項述語として働き、「通過」、「経過」と同様に、媒介標識にならない。

(32) a.カーテンを通して外の景色が見える

b.レインコートを通して雨がしみ込んでくる（小泉保ほか 1989: 348－349）

c.雨が傘の破れ目を通して落ちてくる（森田: 785）

(33) 電流や光線、宇宙やステンレスがなにかを通してかおりを発する（国家:82）

(32)と(33)の「通す」の目的語は物理的な実体であり、後接する動詞述語も物理的状況を示しているので、「通す」はより具体的なプロセスを表し、述語動詞の性格が保持されている。「通す」のペアである「通る」も連動文の前項述語として働いているが、物理的表現に制限されるので、文法化が起こらない。連動文は文法化の1つの条件ではあるが、根本的な動機付けではないことを裏付けている。

(34) a.手紙はいったん事務局を通って、各人に渡る

b.カーテンを通って明かりが差し込んでくる

c.レインコートを通って雨がしみ込んでくる

d.風が窓の隙間を通って部屋に入り込んでくる（小泉保ほか 1989:350）

(34)の「通る」に対して、「通す」は(32)と(33)のような連動文を文法化の経路として、抽象的な状況を示す文脈中に用いられると、その意味が拡大され、後接する述語の示す出来事の実現に関与する媒介を示すようになってくる。「通る」は抽象的な事柄を示す文脈を構成せずに、意味拡大もなされないので、文法標識として機能しない。これは「通過」と「経過」の分析で得た結論と同じことであり、即ち語彙項目の内在的な意味・統語構造の特徴が文法化の動機づけの1つである(第9章3節を参照)。

(35) a.ヨーロッパの修道院を通してキリスト教を知る（自分:20）

b.それはそれで内面を通してつかまえているわけですね（ことば:39）

(36) a.「概念体系の枠組」というフィルターを通して外界の事物を位置付け認識し

ているのだと思う。(ことば:256)

b.書物を通して三木清の人間に迫らなければならない(自分:9)

(35)aのように、後接する動詞句が抽象的な出来事でなければ、「通す」で導入される場所が物理的個体として受け止められ、「通す」も述語動詞として機能すると判断出来る。「知る」のような心理活動を表す後項述語に呼応し、「を通して」はその実現の媒介を示すようになってくるのである。構造的に単純な「通る」は、(35)と(36)のような構文には生起しない。

人間と組織を表す名詞が共起すると、概念の領域が拡大されるので、「を通して」の標識機能も拡大される。

(37) a.パール・バック、スメドレーなどを通して人種をこえた人間のあたたかい魂に啓発された。(留学:127)

b.ドイツ騎士修道会を通してヨーロッパが解った(自分:42)

(35)−(37)で導入された媒介は、メタファーによって抽象化された存在物の例である。「を通して」はそういう「もの」の媒介標識から一歩進んで、「こと」を行為の遂行に関与する媒介にマークすることができる。

(38) a.ひとりの日本人である私の手ざわりを通して、日本というものを感じようとしていることだと思う。(留学:220)

b.漢学を通して西洋を学んでも大筋というか根本は理解しうるんだという自信を持っていた。(中国:57)

c.そういう演技を通して彼が見詰めていたものは、‥‥(歴史:83)

(39) 彼の最も嫌うところの英語を教えるということを通してそのことを一生懸命やっていますよ。(歴史:13)

(38)では「を通して」に導入されるのは、必ずしも「こと」とは言い切れないが、(35)−(37)でみた媒介と比べると、より抽象的で可視的な存在ではないことが明らかである。(39)に示すように、「英語を教える」が後接する行為の遂行の条件であり、後接する行為はそれを媒介に実現したのである。これは「通過」の機能拡大に似通ったものである。

一方、「を通じて」のプロセスであるが、機能的に「を通じて」は「を通して」とよく似ている。ただ「を通して」と比べてみると、「を通じて」はより抽象的であることが分かる。「を通じて」は、もとの述語動詞と意味的に掛け離れ、連動文の場合には抽象的な「経路」しか取

らないのが、その抽象的な性格の証である。次の(40)に挙げる古文ふうの例では、「通じる」が連動文の前項動詞として機能しているが、(41)に示すように、現代語では一般的には、物理的な状況を示す(32)と(33)の「を通して」を、「通じて」で代用することはできない。

(40) 曲路一径を通じて両山屏風を建たるごとく(『小学館 国語大辞典』)

(41) a.??カーテンを通じて外の景色が見える

b.??レインコートを通じて雨がしみ込んでくる

c.??雨が傘の破れ目を通じて落ちてくる

d.??電流や光線、宇宙やステンレスが何かを通じてかおりを発する

(40)の「通じる」は「通す」と解釈でき、「通じる」と「通す」の関連性が示されるが、「を通じて」は連動文の文脈において、具体的なプロセスではなく、殆ど抽象的な経路しか示さずに、文法標識の機能を果している。

(42) a.私は年少のころ、こういう人々を通じて中国とその周辺、あるいは中国史というおおきな民族のるつぼを考えるようになった。(中国:213)

b.私はこの組織の全体を明らかにすることを通じて、ヨーロッパという世界を明らかにしたいと思ったのです(自分:38)

c.他の広い読書を通じて得られた知識(留学:143)

(42)を見ると、「を通じて」で導入される部分は後接する事柄とは、相互作用の関係にあることが明らかである。特に(42)bと(42)cのように、前項が後項の行為に付随する同時進行の行為であり、「通過」に観察された一体性という特徴を、「を通じて」ももっており、通過動詞の文法化の相対的な普遍性を示している。

6. おわりに

以上通過動詞の文法化を考察してきたが、格の体系において明確にされていなかった媒介という格範疇が確認できた。[6] それだけでなく、なぜ経路を取る通過動詞が媒介標識にシフトされ、文法語としての範疇化が実現したか、という問題の解決によって、文法化の動機付けと方向性の相対的な普遍性が立証された。以上の分析をまとめることをかねて、これについて少し述べ、第8章のしめくくりとする。

第2章4・1節では、文法化に伴う意味変化を議論する際、英語などでは共格(comitative)と道具格(instrumental)が同一の文法形式(with)でマークする例を挙げ、その機能拡大の動機付けに言及していた。次の例も共格と道具格の相関を示している。

(42) a.She went shopping with her husband.

b.He did it with a crowbar.(Heine et al.,1991a: 164)

なぜ共格と道具格が1つの文法形式でマークされるかについては、一般的に具格が共格から派生されたものであり、派生する動機付けは、"AN INSTRUMENT IS A COMPANION"という、認知活動としての概念化、又は範疇化をもたらすメタファー(Lakoff & Johnson1980: 134-35;Heine et al.,1991a:103-05)、又は意味の同化(semantic assimilation)(Schlesinger,1979)に求められてきた。中国語と日本語において、共格と道具格は全く別の範疇として捕えられ、異なる文法形マークされる。共格標識はそれぞれ、「和[hé]」と「跟[gēn]」、「と」と「に」であり、道具格標識は、「用[yòng]」と「拿[ná]」及び「以[yǐ]」、「で」及び「でもって」である。英語などの状況から、中国語と日本語においては、" AN INSTRUMENT IS A COMPANION "というメタファーが生起せず、共格と道具格の同化も成立しないことが分かる。しかし、通過動詞の文法化が示すように、中国語と日本語において、"AN INTERMEDIACY IS A PATHWAY "という異なったメタファーが起こっており、このメタファーが、経路を取る通過動詞が媒介をマークするように文法化する最大の動機付けである。英語にも経路から媒介へのメタファーによる文法機能の拡大が観察されるが、その媒介標識は中国語と日本語ほど体系的なものではない。

(43) a.The thief must have entered and left the house through the back door. (Quirk et al.,1985)

b.To talk through an interpreter.(=(1)b)

なぜ一方では共格と道具格の同化をもたらすメタファーが起こり、一方では体系的に経路と媒介を同化させるプロセスが起こっているかは、本研究では取り扱うことのできない問題であるが、第2章4・1において既に言及したように、メタファーは相対的な普遍性しかないものである。メタファーだけでなく、メタファーによる範疇化の順序関係も一律化できず、メタファーと同様に相対的な普遍性しかない。従って、Heine et al(1991a)が提出した、PERSON > OBJECT > ACTIVITY > SPACE > TIME > QUALITYというモデル(第2章4・1節を参照)は基本的な傾向を示しているが、絶対的な意味拡大の方向ではない。通過動詞の文法化が示すように、媒介として、人間が必ずしも実体より先立つものでもなければ、行為が必ずしも空間及び時間に先立つものでもない。それらは平行する場合もあれば、逆方向に沿って拡大される場合もあるのである。結論をくりかえし言うが、文法化の動機付けも方向性も相対的な普遍性しかないものである(第9章を参照)。

注:

1) 河上(1984)が経路を取る動詞については、「二つの空間的に異なる位置の間を何らかの連続的な運動(例えば、「歩く」のような)を伴って線的に移動する動作を表す動詞」と述べており(p.40)、これでもって通過動詞を特徴付けることもできるが、通過動詞はその上位範疇であることが明らかである。

2) 呂主編(1980)では、「経過」の場所目的語は全て地名であり、一体性の有無及び「経過」の位置関係の指示機能という我々の考えを裏付ける。

3) 「通過文学作品反映社会問題」(文学作品を通して社会問題を反映する)と、「用文学作品反映社会問題」(文学作品でもって社会問題を反映する)というように、「通過」と「用」には互換性があり、媒介と道具の関連性が表される。

4) もち論、「用」なども「肖邦用他那燦爛的楽章反映他対沙俄圧迫波蘭人民的憎恨(ショパンは彼の燦然たるメロディーでもって、ポーランド人民を圧迫するロシアへの憎みを表す)」(『人物』1994年3号、頁193)というように、抽象化し用いられることがあるが、それにしても、イメージ的にそれは分離される個体に捕えられている。

5) 「通す」の第1義として、「ある場所を端から端へ抜けるようにする。あるいは抜けるようにさせる」(小泉保 ほか1989:348)と記述しているように、「通す」の空間的性格が認識される。

6) 第1章3節に引用した格の体系に等しい主題関係、或はPalmerが一般化した文法役割には媒介という範疇は提示されていない。

第9章　文法化の再認識：結論と課題

In fact there can be no such things as a ' complete ' account of the grammar of a language, because a language is inexhaustible. [Halliday 1985]

我々は機能主義を出発点として(第1章)、言語構造のHOWの問題とWHYの問題の解決に有効な枠組である文法化理論を理解したところで(第2章)、中国語の文法化を考察してきた(第3章から第8章まで)。空間動詞の文法化は、文法化研究のケース・スタディの1つに過ぎないが、1つの小体系になっている。この小体系により、中国語そして日本語及び英語を理解することだけでなく、文法化を説明し、その一般化を立証し、修正することも可能である。以下では、空間動詞の文法化研究をまとめることをかね、文法化とは何かという問題、そして文法化の方向性と動機付けといった基本的な問題を再提起し、文法化について再び考えてみる。その上で、関連する問題を提起し、今後の研究課題としたい。

1. 空間動詞の文法化から見た「5つの原則」

空間動詞の文法化研究は、中国語における文法標識と統語範疇という文法研究の基本的な問題の解決を目標に、スタートした。空間動詞の文法化は中国語の特性を示す一方、文法化とは何か、という問題の説明にヒントを与えるものである。Hopperが提出した「5つの原則」(第2章3・2節を参照)が文法化の現象と本質を集約しているが、空間動詞の文法化体系からそれを理解することができる。

1.Layering(「重層」)

Layeringは、2つ以上の文法形式の共存を指している。Hopperは英語のテンス・アスペクトの標識に使われる動詞の母音交替、接辞、迂言法などを例にして、幾つかの文法形式が共存し、それぞれが文法的意味を表すと同時に、語用や文体などの機能も果すことを説明している(Hopper,1991)。空間動詞の文法化からいうと、例えば、受益標識として、「給」のかわりに、「替」や「為」なども使われるが、その共存が正しくLayeringの事例であるし、方向動詞の「向」と「朝」と「往」が共に方向指示として機能するのも、Layeringと見て取れる。複合格助詞の「にむかって」と格助詞の「に」と「へ」とが共存するのも、「を通して」と「を通じて」が共に媒介をマークするのも、同じことであろう。ただ中国語においては、そういう

文法形式の共存よりも、意味関係の無標と有標化の共存がより特徴的であると思われる。第4章で議論した「住(ø)城市」と「住在城市」がその例である。無標の意味関係を有標化する働きと、有標の意味関係を補足する働きという、中日語の方向動詞のプロセスに現れた対照的な特徴も、中国語においては、無標と有標化の共存が特徴的であることを示している(第5章を参照)。

2.Divergence「(分岐)」

Divergenceは、Layeringと同様に、要素の共存のことではあるのだが、特に語彙項目と文法形式の共存を指している。本研究が「共時的」に進められたのは、空間動詞の文法化はこの性質が最も顕著であるからである(第1章と第3章を参照)。我々のケース・スタディが示したように、空間動詞は述語動詞でもあり文法標識でもあり、意味的にも統語的にも深くかかわっており、両義性(ambiguity)のある事例も随所に見られる。そして、その意味・統語の相関が文法化のもっとも重要な動機付けになる(下の3節を参照)。「通じる」と「を通じて」、"go"と"be going to"などのように、日英語にもDivergenceの例が観察されるが、それは限られたものであり、中国語における空間動詞のプロセスのような体系にはなっていない。

3.Specialization(「特殊化」)

Specializationは、フランス語の"ne"と"pas"という2つの否定辞の共演に示されるように、文法形式が義務的又は固定的になってくるという性質のことである(Hopper,1991:26)。ただ、中国語においては、無標の意味関係を有標化するすべてのプロセスが、Specializationの例になるわけではない。例えば、接辞として機能する「給」は、方向性のある述語動詞とは義務的に結合することがない(第7章2節を参照)。また「在」のように、場所の主題化機能を果しながらも、必須要素ではない。しかし、文法標識が徐々に義務的また固定的になってくるのが空間動詞の文法化に現れる共通の特性である。向格の「向」や受益格の「給」や媒介格の「通過」などが特にそうである。「を」と「通じて」で媒介を示すのも同じ例であると思われる。第6章でみた文末の「去」が最終的に殆ど「去吧」という拘束形式で揶揄を表すのも同じことであると見なされる。

4.Persistence(「持続」)

Persistenceは、Divergenceと関連することであるが、語彙項目と文法形式が意味的に持続性をもっているという特性のことである。語彙項目と文法形式の連続性、多義性(Polysemy)などがその現れである。これは、LichtenberkのPrinciple of Gradual Change(Lichtenberk,1991a;1991b)で示された漸進性に通じるものである。モダリティ標識としての文末の「去」があくまでも移動という意味を失わず、移動する状況の表示も付随され

るというのがPersistenceの典型的な例である。所格標識の「在」の主語関連という原型的な標識機能がその述語動詞の主体関連という特徴と一致するのも、Persistenceの性質を表している。

5.Decategorialization(「範疇分化」)

Decategorializationとは、語彙項目と文法形式の分化のことを言っている。空間動詞の文法化における動詞と前置詞の分化が典型的な例である。前置詞と動詞の関連性に注目して、"coverb"、"verbid"、"modifying verb"、"defective verb"などと呼ばれている(Heine et al.,1991a:233;Lord,1993)。そして、中国語の伝統的な文法研究においては、それを「半動詞」や「準動詞(quasi-verb)や「受導詞」などとも呼ばれてきた(高、1986(1948):317)。いずれにしても、その統語範疇の分化が明確な事実である。その範疇分化は音韻的にも統語的にも証明される。例えば、接辞の「向」などが前項動詞と一体化(fusion)して、「軽音」で読まれたり、ポーズをおいて読まれたりする。また、統語的に前置詞にしても接辞にしても、補語が要求されるのである。例えば、第7章2節の「送給」の「給」は、接辞として名詞句を補語に要求し、「送給」だけでは成立しないのである。[1] ところが、統語範疇のシフトはそういう形式的印(token)よりも、意味機能からの立証にもっと普遍的な意義があると思われる。Decategorializationは本質的に"loss of discourse autonomy"(Hopper1991:30)という結論が、言語交叉的証拠(cross-linguistic evidence)に基づき出されたものである。意味機能から考えると、原型的には、動詞は出来事を報告する役割を果し、名詞は出来事の参与者を表示する役割を果す(第1章2節を参照)。Decategorializationの結果として、空間動詞はその役割が失われたことが明らかである。第8章の「通過」と「経過」は抽象的な名詞を補語に取ると、「通過現象」というような、言い切った形では言えないという事実が、その述語性の喪失と関係標識の機能を裏付けている。「・・・ことを通じる」が成立しないのも同じケースである。第4章の「在」は「張三在家(看書)」というように、後接する述語を落としても述語として機能することが可能だが、これこそ語彙項目と文法形式の相関関係を示し、文法化が度合のものであることを物語っている。文法研究の問題は、範疇よりも範疇性の度合(degree of categoriality)であるという主張がこういうことも意味するのであろう(Hopper,1991:30)。

空間動詞の文法化体系は上の「5つの原則」だけでなく、この原則をモデル化した一方向性の仮説と動機付けという文法化研究の基本的な問題の結論を立証することもできる。

2. 一方向性仮説の修正案

文法化研究は上の「原則」で示される現象をめぐって、基本的に2つの問題を解決しなけ

ればならない。1つは文法化の方向性の問題であり、もう1つは文法化の動機付けの問題である。方向性は文法形式の発達する経路及び要素の相関関係のことであり、動機付けは文法形式の成り立ちの要因のことである。2つは、文法化は何かという問題の2つの側面であるが、それぞれ第1章1節で触れたHOWの問題とWHYの問題でもある。この2つの問題については、先行研究では豊富なデータに基づき、様々な仮説とモデルが提示されているが、中国語の事実から、それらを理解し、修正することが可能でかつ必要である。この2節では空間動詞の文法化の分析を踏まえ、一方向性の問題を考え、動機付けについては、次の3節で検討する。

文法化の方向性は、"grammaticalization chains"と呼んだり(Heine et al,1991a)、"cline of grammaticality"と呼んだり(Hopper & Traugott,1993)して論じられている。いずれにしても、一方向性(unidirectionality)という点がその特徴とされている。一方向性は文法構造の側面と意味構造の側面との両方から考えることができる。

文法構造の一方向性については、次の説明が一般的である。

(1) There are increased syntacticization in its early stages, and increased loss of morphosyntactic independence in the later stages, ultimately leading to zero, i.e.increased morphologization, and phonologization.
(Traugott & Heine,1991:3-4)

(1)はGivónのDiscourse>snytax>morphology>morphophonemics>zeroというモデル(第2章3・2節を参照)を解釈したものである。しかし、Givónのモデルは言語構造の一般的なプロセスとしてのDiscourse>Morphosyntaxの方向であり、言語ごとに文法構造の細部に亙ってその一般化を見極めることが必要である。例えば、発話機能としての主題から統語機能としての主語へのプロセスが分析されているが(Givón,1979;Shibatani,1991)、しかし、これは統語機能を果す文法形式が発話機能を果さないということを意味するわけではない。むしろ、第4章で分析した所格標識の「在」のように、語用機能を果しながら、機能拡大されるケースも観察されるのである。空間動詞の文法化は、「語彙項目から文法形式へ」(Lexical item > morpheme)という局面の分析であり、その方向性は必ずしもGivónのモデルと一致した結果を見せていない。

語彙項目から文法形式への一方向性は次のモデルが典型的である。

(2) lexical item used in specific linguistic context > syntax >morphology
(3) verb-to-affix cline: full verb > (vector verb >) auxiliary > clitic >

affix

(4) noun-to-affix cline: relational noun > secondary adposition > primary adposition > agglutinative case affix > fusional case affix

(Hopper & Traugott,1993: 95;108;107)

(2)は一般的な方向性を示し、(3)と(4)は具体的な語彙項目の文法化の方向性を示している。空間動詞の文法化は(3)のモデルになるが、その方向は(3)と異なる様子を呈している。

語彙項目が出発点になるのは基本的に問題がない。[2] 問題はその中間段階と終点である。第5章の「向」のように、最終的に新しい範疇化(主要統語範疇の動詞又は名詞)が生起するというのもあれば、第7章の「給」のように、接辞化(形態化)されもするが、それは標識機能から見ると、必ずしも前置詞化を経るプロセスではないというのもある。そして、通過動詞のように、その終点として形態化が発生しないのもある。(2)と(3)及び(4)のモデルは、相変わらず言語構造の形態論指向のものであり、中国語などのような形態的特徴に欠けた言語のプロセスを一般化できない。[3] 従って、(2)を次のように修正することが出来るだろうと思われる。

(5) 語彙項目 > 類似文法形式 > 文法形式 { ± 前置詞化 / ± 接辞化 / ± 連結詞又は不変化詞 / ····· } > ±新しい範疇化(語彙化)

(5)の中の「類似文法形式」(quasi-grammatical form)は、「給」が使役標識のようなものとして機能することから理解できる。そして、方向性のある動詞句の後に現れる「給」も類似文法形式とみてよい。それは与格標識と受益格標識へ文法化する中間の段階にある、Hybrid formというようなものなのである。[4] 文法形式として、前置詞(「介詞」)が典型的な例であるが、それ以外の範疇も観察される文法化の結果である。分析ー孤立言語でありながら、派生的接辞が現れてくるのは、屈折的接辞に直接つながる純粋な形態化ではないとしても、それに類似する、又はそれに向かうプロセスと考えられる。[5]

一方、意味構造の一方向性であるが、これは上の文法形式と対応するものとして、具体から抽象へという意味範疇のシフトを指している。Heine et al(1991a;1991b)はアフリカ諸言語における身体名詞(例えば"back")の文法化でもって、Categorial metaphor又はMetaphorical chainというモデルを提示し、文法化にあたって、意味範疇としては、具体から抽象への一方向が保たれることを力説している。

(6) PERSON > OBJECT > ACTIVITY > SPACE > TIME > QUALITY

空間動詞の文法化も部分的に(6)のような意味範疇が拡大される方向にそって、意味関係の標識機能が拡大されていくのである。第4章の「在」と第7章の「給」が人間関連の標識からスタートし、機能が拡大されていくのがその例である。ところが、空間動詞の文法化は述語動詞の意味変化に伴って、参与者をマークする(格標識の)役割を果したり、モダリティ機能を果したりして、標識機能の拡大順序、即ち意味範疇がシフトする順序は、(6)の通りにはいかない。直示的移動動詞のモダリティ標識のプロセスは、(6)とは関連性がないことが明らかである。第8章で見た通過動詞は、そもそも物理的経路を補語に取るものとして、人間の仲介者標識と物の媒介標識とではどちらが先かは不明瞭なのである。或いは「往」のように元来人間と関連しないので、換喩表現を除いて物理的方向関係しか示さないケースもある。メタファーが相対的普遍性しかもたないものである以上(第8章6節を参照)、メタファーによる意味範疇のシフト及びその標識も相対性しかもたず、絶対的な一般化は無理である。

3. 動機付けの再検討

第2章4節において、文法化の動機付けの問題を中心に、文法化研究の関連分野について議論した。そこで既に示した通り、文法化の動機付けは複雑な問題であり、様々な要素が関わり合いながら文法化を引き起こすのである。動機付けは一方向性と同様に、絶対的なものではなく、ケース・バイ・ケースであって、傾向的な可能性しかない。そして、プロセスと動機付けとは一体のものであり、プロセス即ち動機付けであるとも言える。というのは、BプロセスがAプロセスの動機付けになる一方、BプロセスもCプロセスに動機付けを求めなければならないことが多く観察されるからである。reanalysisとanalogyが文法化の動機付けと見なされるが(Hopper & Traugott,1993,Ch.3)、reanalysisとanalogyの動機付けは何かが問われるのである。言語研究の「無尽性」というのも、こういう動機付けの循環的性格によるものであろう。空間動詞の文法化は限られた局面のプロセスであり、それでもって、文法化の動機付けを体系的に帰納することは到底出来ない。動機付けの体系的な説明については先行研究を参照されたいが(第2章3節)、以下では、空間動詞のプロセスを動機付ける特徴的なものを5つにまとめてみる。

1.語彙項目

文法化の出発点である語彙項目は、そのプロセスを方向づけるものである。我々のケース・スタディが示したように、語彙項目と文法化の結果としての文法形式とは、意味的に

も統語的にも深くかかわっている。受益を意味する特性がなければ、「給」も「やる」も受益標識にならないはずである。方向を補語に取る「向」と「向かう」は方向の関連性をもっているからこそ、方向標識になってきたのである。直示的性格により、「去」と「来」、そして「いく」と「くる」も、直示的補語又はモダリティ標識として機能することが可能である。[6]限られた語彙項目が文法化の元(source)になること自体が、語彙項目と文法形式との関連性を物語っている。というのは、いずれも関係的プロセスを表す空間動詞が示すように、より一般的な上位概念を表す少数の述語動詞しか抽象的な文法的意味と位相的(topological)又はイメージ的につながらないのであって、重要な動機付けと思われる意味変化も一部はその位相的又はイメージ的なつながりに動機付けられるものだからである。

2.意味変化

意味変化は文法化のプロセスそのものでもあるが、文法化の結果としの標識機能から見ると、それは動機付けと見なされる。意味変化は様々な意味を意味しているが、概していうと、意味の弱化と拡大である。文末の「去」のモダリティ機能は、ある文脈において移動という意味が喪失するのに動機付けられる。逆に、第5章の「向」の目標指示は意味拡大の結果であると見て取れる。意味変化に関して、多くは抽象化やメタファーなどに動機付けを求めている。「通過」と「経過」が媒介標識を果すのは、AN INTERMEDIACY IS A PATHWAYというメタファーから生まれたものである。メタファーは「問題解決」(Problem solving)又は「交流方策)」(Communicative strategy)に起因を求めているが(Heine et al,1991a; Hopper & Traugott,1993)、認知プロセスとかかわっているものである。

3.連動文と推論

意味変化は"context of the flow of speech"(Hopper & Traugott,1993:68)において起こっているが、連動文(serial verb construction)というのがその典型である。出来事と出来事をつないで連動文の形で表現するのは、類像性言語として、時間的な流れにそって、要素を組み合わせていくが、認知プロセスと関連する事柄でもあり(Givón,1991)、推論がその根本的な動機付けであるということが立証されている。存在動詞は「どこかにいれば何かをする」という推論により、方向動詞は「誰かに/どこかに向かえば、何かをする」という推論により、GIVE動詞は「誰かにやれば、ためになる」という推論によって、それぞれ連動文の文脈において、標識機能を果すように至ったのである。

4.対人関係と捕え方

対人関係と捕え方は発話・語用指向のものである(第2章4・2節を参照)。対人関係とは、話し手と聞き手の相互作用(interaction)のことを指しており、文法化の重要な動機付けになっている。語順移動が語彙項目の文法化を引き起こす現象だが、語順移動は会話の参

与者の意図と態度に左右されるものである。第6章の「去」が文末へ移動するのは、関連する事柄を際立たせる(highlight)ことからスタートを切ったのである。後置の「給」が前方へ移動し、与格標識から受益格標識へ拡大され、最終的に自動詞述語文の標識を果すのも、対人関係が絡んでいるもとで、実現したプロセスである。対人関係と関連することだが、事態の捕え方も重要な動機付けである。直示的移動動詞が、「外向き」の状況を示したり、「内向き」の状況を示したりするのは、その述語動詞の意味特徴による一方、話し手の事態を把握する仕方あるいは関与する状態に動機付けられるからである。

5.類型的制約

文法化は言語の類型的特徴を付与すると同時に、類型的特徴に制約されるプロセスである(第2章4・3節と第3章1節を参照)。なぜ分析ー孤立言語では屈折的接辞のプロセスが行われていないのかというと、それは分析ー孤立言語だからであると説明しても、「迂回解釈」になってしまうので、類型的特徴を動機付けとするのは疑われる。我々は、今のところ、形態論からみた言語類型の起因というような「原始的」な問題を解決することができない。だからといって、類型的制約に動機付けられるプロセスは、空間動詞の文法化に多く観察され、その動機付けは否定できない。「通過」と「経過」が接辞にならないのは、様々な要因が考えられるが、現実世界では、経路そして媒介は時間的に出来事の先立つ要素として、それを示すのも構造上先立つことが義務づけられるからである。これは類像性という類型的特質の動機付けにほかならない。

4. 今後の課題

言語構造は完全なシステムではない。これは文法化理論の考え方の核心である。文法のnoncompleteについて、Lichtenberk(1991b:76)が次のように述べている。

(7) Grammars are always noncomplete. In the grammar of every language there are, at a given time, many rigid regularities; at the same time, there are also many aspects in every grammar that are not fully determinate and that are malleable to various degrees. Grammars do provide patterns for the construction of discourse, but they do not determine its grammatical form fully. Being noncomplete, they allow speakers a certain degree of freedom in constructing discourse. For whatever reason, certain novel patterns become established, which results in a reshaping of the grammar.

文法が完全な体系にならないことは、即ち文法研究も終結することがないということである。実際、事実の発掘にしても事実の説明にしても、我々の研究も残る課題が多い。それを以下の4つに分け、問題提起としたい。

1. 空間動詞の文法化のさらなる研究

これは2つのことを意味する。1つは既に分析した語彙項目の多機能化を分析することである。例えば、存在動詞の「在」は空間関係だけでなく、時間関係の標識として機能し、副詞の振る舞いをする事実がある。そのプロセスはどのように展開しているのか、空間関係の標識機能とどういうかかわりをもっているのかなどが問題である。また、GIVE動詞の「給」については、与格標識と受益格標識の2つにしぼって、その文法化を考察してみたが、それと関連する機能として、対格標識と受け身文の標識として機能する現象も観察される。

(8) 張三 給 李四 打 了 (張三は李四を殴った/張三は李四に殴られた)

1つの語彙項目の多項目文法化(polygrammaticalization)(Craig,1991)の研究が中国語の文法体系の解明にとって欠かせない作業である。

もう1つは、他の空間動詞のプロセスを調べることである。第6章で触れた「到」は便宜的に動詞として見ていたが、それは「到達動詞」としてかつ着点標識として機能するものとみなされる。それはどのように文法化してくるのか、その機能と存在動詞の着点標識とのかかわりなどが重要なテーマである。要するに、空間動詞の文法化の体系作りはより広い範囲の事実と説明が必要とされる。

2. 動機付けのさらなる研究

言語プロセスは極めて複雑であり、様々な要素が関わり合いながら、それを動機付けるのである。我々の研究で示したのは、文法化の動機付けの基本的なものであって、網羅的では決してない。言語は社会の中の言語であり、文化の中の言語でしかない。社会の背景や文化の慣習ないし文学表現の手法(例えば修辞法)などが文法化に関与する重要な要素になるに違いない。実際、我々の分析にすでに部分的に示したように、これらは文法化を引き起こす要因になっている。第5章で議論した方向動詞の「向」が目標指示として機能するのは、「向雷鋒同志学習」というスローガンを発端としたものではないにしても、それをきっかけに、「向」の目標指示が定着し拡大されたのだろうと考えられる。第6章の「去」が文中に出て呼び掛けに用いられるのも同じケースである。また、第7章で考察した受益標識の「給」は、日本語と英語から見れば成立しないはずの「A給B成婚(AがBのために結婚させてやる)」などのように、その表現の成立が文化的慣習によるものであるということが

明らかである(Shibatani et al.,1994)。そして、VOからOVへの語順変化をもたらす有名な対格標識の「把」のプロセスは最初に詩歌の例に観察されたのである(Li & Thompson, 1974)。これらは本当の意味での言語説明の外部(external)要素の一部になるのである。

3. 歴史的研究

我々の研究は、発話ー語用指向のものである。分析した空間動詞が現時点において、述語動詞としても関係標識としても機能しており、語彙項目と文法形式の相関がより深いため、こういう研究方向に導かれたのである(第1章3節を参照)。GIVE動詞の「給」が述語動詞として機能するのも数百年の歴史しかないという事実(太田、1958)からして、本研究の「共時的」アプローチを正当化することもできるであろう。一方、第6章で調べた文末の「去」が中古期の中国語においてすでに「去也」という形でモダリティを表していたということから考え(第3章3・1節を参照)、歴史の事実が文末の「去」のモダリティ機能を立証するものになる。文法化は「泛時的」(panchronic)プロセスである以上、その歴史の側面に目を向けなければならない。こういう意味では、我々の研究はスタートを切ったばかりであるといえる。歴史的研究の重要性を訴えたLichtenberk(1991b:77)の言葉を引用し、この点を強調したい。

(9) Obviously, diachronic explanations of synchronic facts are not the only valid kind of explanation, but if we are serious about trying to understand the properties of language systems, diachronic considerations have an important role to play.

4.言語間のさらなる比較研究

我々の研究は少しばかり日英語と関連付け進めてきた。日本語そして英語への浅い理解により、中国語との体系的な比較分析は出来ていない。類型的特徴により、ある局面において、比較可能性(comparability)の問題が問われるのも事実である(Croft,1990:11-18)。例えば、「で」のように歴史的に語源を遡ることができる格助詞がある一方(第4章注(12)を参照)、"to"のように語源が未だに不明なため、[7]語彙項目と文法形式の相関を分析しながら、そのプロセスをたどって、中国語と比較するのも無理である。第5章と第7章で触れた"for"の向格標識機能と受益標識機能は、関連性のあるプロセスであるとしても、その語彙項目が異なる性格のものであるため、「向」と「給」と比較する直接の対象にならないのも明らかである。これらにより、中国語は「動詞の言語」であり、そして「文法化の言語」であるというように、結論付けることができるのであろう。しかし、そういうことも含め、日本語の補助動詞や英語の複文の接続詞又は補文標識(complementizer)など、中国語に見られない文法化をより深く観察し分析して、中国語と比較すれば、それぞれの類型的

特徴だけでなく、言語の本質を理解することが可能になるに疑いない。

外国語の学習と理解が、我々が自国語の中国語に目を向ける契機の1つである。その学習と理解が深まるにつれ、今後の研究が一段と進むことが期待される。なぜなら、諸言語の事実があまりにも魅力的であり、諸言語の事実から見た中国語の事実もあまりにも魅力的だからである。

注:

1) Hagège(1975)は「送給」が補語を取らないことが可能であることにより、「給」の接辞化を否定しているようである(徐、1990)が、我々の直感では「送給」は裸の形では、一般的に述語にはならない。
2) いわゆるcounterexamplesも報告されているが、それは例外か語彙化(lexicalization)かであると認識される(Hopper & Traugott,1993:126-28)。
3) 分析ー孤立言語において、屈折的形態化(接辞化)が普遍的に起こっていないという報告がある(Traugott & Heine,1991:9)。
4) Hybird form(混成物)については、"hybird forms are part of grammaticalization chains; they are found at the intersection of overlapping stages of the ' no longer quite X but not yet quite Y ' type "とHeine et al(1991a:231)が説明している。
5) Hopper(1991:19-20)が" Therefore categories which are commonly morphologized in one language may be candidates for emergent grammatical constructions in another"と述べ、形態化に向かう傾向を指摘している。
6) Lord(1993:233)が統語的に分析し、自動詞が格標識にならないことを指摘している。
7) 文法化の一方向性(unidirectionality)の説明と関連して、Hopper & Traugott(1993:129)が"to"の語彙項目が不明なことに言及している。

付　録

この付録は関連する諸言語のデータを提示すると共に、中国語における空間動詞の文法化をまとめ、図式化するつもりで付け加えたものである。諸言語のデータは中国語と比較することが可能なものに限られており、そして、理解しやすいために、その文例を英語のglossのままにしている。中国語のまとめに関しては、枠内の○はその要素が文法化が起こり、その標識(又は統語)機能を有することを意味し、△はその標識機能を有するものではあるが、いろいろと制限があることを示し、×はその標識(又は統語)機能が欠けていることを表している。

付録1　存在動詞の文法化

1・1 諸言語の存在動詞("be at")の所格標識(Lord,1993.ch.2を参照)

言語	語彙項目	側置詞化(文例)
Twi	wɔ(vo)	children play wo(in) street top
Ewe	lè	I buy book lè(in) Keta
Ga	yɛ̀	Tete FUT-buy book yɛ̀(at) Osu
Supyire	na	s/he PERF glasses line-up table na(on)
Khmer	nəu	Sok reside nəu(in) province ricefield
Mandarin	zài	3SG zài(in) house interior read PROG magazine

1・2「在」の文法化

				前置詞化の在	接辞化の在
所格標識	他動詞述語	主語関連		○	×
		目的語関連		△	○
	自動詞述語	動的	位置	○	×
			着点	×	○
			経路	○	△
		静的		○	○
		その他		○	○
統語機能	アスペクトの標識			○	×
	補語など後接要素			○	×
語用機能	背景化機能			○	×
	前景化機能			×	○

付録2　方向動詞の文法化

			向	朝	往
前置詞化	方向指示	人間	○	○	×
		物理的方向	○	○	○
		抽象的方向	○	×	×
	対象指示	交流対象	○	△	△
		与格	○	△	△
		源泉格	○	△	×
	目標指示	物理的目標	○	○	○
		抽象的目標	○	×	×
接辞化			○	×	△
名詞化又は動詞化			○	×	△

付録3　直示的移動動詞の文法化

3·1 諸言語のdeictic serialization(Schiller,E.1991:29-30)

言　語	文　　例
English	go get the newspaper
Khmer	go take newspaper come
Krio	The gang go pay for they kill woman DEM-pl childre DEM-pl
Malayo-Portugese	go see if that gentleman is home
French	come take your letter
Tamil	she die go(PAST)
Mandarin	he go go up shift Perf

3·2 「去」と「来」の文法化

		文末の去	文中の去	文中の来	文末の来
モダリティ	意志表明	○	○	○	×
	命　令	○	○	○	×
	反　語	○	×	×	×
	揶　揄	○	×	×	×
連結詞化		×	○	○	×

付録4　GIVE動詞の文法化

4·1 諸言語におけるGIVEの与格と受益格の標識化(Lord 1993,ch.3を参照)

言語	語彙項目	側　置　詞　化　（文　例）
Twi	ma	he-remove my beard ma(for)-me
Yoruba	fún	he reply-message fún(for/to) me
Engenni	kyẹ	he do kyẹ(for) man the
Ewe	ná	1SG-buy door na(give/for) Kofi
Awutu	ná	he described his-town POSTP ná(to)him/her
Cebaara	má	he PERF it give him má(to)
Caribbean	gi	I worked gi(for) him
Mandarin	gěi	letter already hand-over gěi(to) 3SG PTCL 3SG gěi(for) passenger bring water serve tea
Yao Samsao	pun	1SG weave CLF basket pun(for) 3SG

4·2 中日語のGIVE動詞の文法化の対照

		給	やる	くれる
文法化	前置詞化（格標識）	○	×	×
	接辞化	○	×	×
統語制約	自動詞の結合	△	○	○
	「受損表現」	○	△	×

付録5 「通過」と「経過」の標識機能の比較

	名　詞　(句)			動　詞　(句)		
	人間(組織)	抽象物	行為	未然の出来事	継続の出来事	已然の出来事
通過	○	○	○	○	×	△
経過	×	×	×	×	○	○